

我が闘争



ラヒ
ーツ
のト

我

が

闘

争

序

この書はヒットラーが有名である如く有名であり、ヒットラーが偉大である如く偉大な内容を持つてゐる。そのことはこの書が、世界の主要な國の國語に、殆んど洩れなく翻譯されて居り、且つその發行部數が何れも巨大な數字を示してゐることに依つても證明されるのである。

ヒットラーはこの書を書き上げたことに就て「この仕事は同時に我々の運動にも役立つところがあるだらうと思つてゐる。……これと關聯して、私は私自身の發展の跡を辿る機會を得たわけであるが、この書物が理解されるなれば、ユダヤ人の新聞が私に關して作り上げた不潔な傳説は、必然的に一掃されるであらう」と云つて、比較的謙遜した物云ひをしてゐるが、書かれてゐて内容は一字一句ヒットラーでなければ持ち得ない烈々たる闘志に燃えたものばかりである。

しかしそれは只力強い言葉と彼の抱負とが述べられてゐるのみのものではない。彼はこの書の中で、民族國家の行くべき道を示し、明日の世界に對して、峻烈なる警告と、怖ろしい程迫力のある豫言をすらもなしてゐるのである。

今日までの世界の情勢は、ヒットラーがこの書に於て豫斷した通りに動いて來てゐる。それは丁度ユダヤ人の豫言書と云はれる「シオン議定書」に於て、ユダヤ王國の建設さるべき將來に就て彼等の豫言したことが薄氣味悪い程適中してゐることゝ對照されて、全然對蹠的なこの二つの闘争者に無限の興味を覺えさせるものでもある。

この書を読むことに依つて、我々は今次世界大戰勃發の必然性を充分に知ることが出来る。ドイツ並にその敵國の運命をも豫知することが出来る。たゞ惜しむべきは我が國情の相違その他から、「我が闘争」の全篇を採録するの自由を持たぬことである。しかし本書を通讀するだけでも、我々はヒットラー並に世界への認識を、何倍か加へる役には立つであらうと信じてゐる。

とまれこの書は、茲十數年來の歐洲の動きを鋭どくも描き出した目錄書であると共に、若しドイツが勝利を得るなれば、怖らく今後數十年の歐洲は、この書の筋書通りに動くであらう大豫言書でもある。

この中から現在の日本人として、何を吸収すべきであるかは、讀者自らが身を以てする體得にお任せしやう。

紀元二千六百年七月

編 者 識

目次

我が搖籃時代

小さい國境町……………	一五
未來の僧正を夢みる……………	一六
三轉して畫家志願……………	一八
少年愛國者……………	二一
若き鬭爭者……………	二三
肺患に襲はる……………	二四
天涯の孤兒……………	二六

ウィーン時代

入學試験に見事落第……………	二八
勞働者からペンキ屋へ……………	二九

毒蛇のとぐろ……………	三一
惨憺たる人生學校……………	三三
大きな問題への眼覺め……………	三五
マルクス主義への接觸……………	三七
赤への激怒……………	三八
ユダヤ人の黒幕……………	四一
ユダヤ人への認識……………	四三
身慄する憤激……………	四九
熱烈なる反ユダヤ主義者……………	五三

思想の成長

瓦壊の素因……………	五五
眠れる議會……………	五七
出て行け、惡漢奴……………	六〇

大衆は思想の母……………	六三
ドイツ民衆を訓練するには……………	六六
二種の敵を與へず……………	六九
オーストリア憎惡愈々募る……………	七一
憶れのミュンヘンへ……………	七五
戦争は必要だ……………	七七
冷酷な英國……………	八一
同盟の弱さ……………	八三
經濟征服への過信……………	八五

前 世界大戦

何故百年前に生れなかつたらう……………	八八
口露戦争への感激……………	八九
世界大戦への勃發……………	九三

ドイツよ、すべての上に……	九五
怖るべき反戦運動……	一〇〇
大戦中の敵の宣傳……	一〇四
負傷して後送さる……	一〇七
變り果てた祖國の姿……	一〇九
革命の前夜……	一一二
再び傷つく……	一一七
墮落した犯人奴……	一一九

政治生活への第一歩

いと小さき「社會革命黨」……	一二三
國民と祖國……	一二五
七番目の黨員證……	一二七
ドイツ帝國の瓦礫……	一二二

ドイツ國軍の任務……………	一三九
優れたるドイツ官吏……………	一四〇

ナチ運動への進軍

必要缺くべからざる階級……………	一四三
武器か人間か……………	一四四
如何なる犠牲を拂ふとも……………	一四六
大衆は強者の勝利を欲す……………	一四八
實力は正義なり……………	一四九
譽れの傷痕……………	一五二
六人の聴衆……………	一五四
最初の公開演説……………	一五六
我々は武装せねばならぬ……………	一五八
國民社會主義ドイツ労働黨生る……………	一六一

火け點ぜられなり……………一六三

國家とは

三つの國家觀念……………一六八

民族の保護者……………一七一

國家は目標への手段……………一七三

血の純潔……………一七六

優れた肉體の育成……………一七八

最初の闘争

ナス黨は大衆の主人……………一八一

敵の武裝を解除せよ……………一八三

演説の偉大な力……………一八五

赤色との戦ひ

ライブチヒの記念日……………	一八八
赤色黨目との格闘……………	一八九
無視・嘲笑・攻撃・默殺・弾劾……………	一九〇
突撃隊は斯くして生れた……………	一九二
釣十字の誕生……………	一九五
賠償金反對の大示威運動……………	一九八
おゝ我等の勝利！……………	一九九
二發のピストル……………	二〇二

我が突撃隊

恐怖手段は打破し得ず……………	二〇六
永久なる突撃隊……………	二〇八
ウイルヘルム・テル……………	二〇九
突撃隊の綱領……………	二一一

六萬人の聴衆.....	一一三
コーブルグ事件.....	一一四
突撃隊の解散命令.....	一二〇

大戦後のドイツの盟邦

戦後には不誠意のみ.....	一二二
力の剣に依る失地回復.....	一二四
沈黙の征服者英國.....	一二五
佛蘭西強化への恐怖.....	一二七
英獨同盟のチャンス.....	一二八
佛蘭西は永遠の敵.....	一二九
英獨に水をさすもの.....	一三〇
多くの敵を持つな.....	一三一
我々は武器を欲する.....	一三二
日本とユダヤ人.....	一三七

日本の潰滅を計るユダヤ人……………二二九

我が東方政策

斷じて世界的強國たれ……………二四一

三つの貴重な戦利品……………二四二

民族的國境への熱求……………二四二

供蘭西との總決算……………二四五

ロシアを許さず……………二四六

歐洲に二つの強國を許すな……………二四八

正當防衛の權利

悲慘なる降伏者……………二五〇

平和は戦争の延長……………二五二

ムツソリーニは偉大だ……………二五四

附 ヒットラーの小傳……………二五七
……………二八〇

ラヒ
ーツ
のト

我

が

闘

争

我が搖籃時代

小さい國境町

今日に至つて見て私は、運命の神が私を舊獨逸國境の小さな國境町ブラウナウに誕生させて呉れたと云ふことを、深く感謝せずには居られない。それはこの小さな町が、ドイツ人の血からなる二つの國家、即ちドイツとオーストリアとに直接肌を接してゐたからである。而も我々青年の胸には、疾からこの二つの國家を、凡ゆる力と方法とを盡して合併させなければならぬと云ふ考へが芽生えてゐたのだ。

オーストリアの中にある多數のドイツ系オーストリア人は、當然祖國ドイツに復歸しなければならぬ宿命にある。このことは、經濟的な見地から判斷して、よしんばその合併が經濟的にはお互ひに不利益であらうとも、斷じて合併しなければならぬ神の摂理と運命とを持つものである。共通せるところの血は共通した國家に屬さなければならぬ。

一切のドイツ人を共通の國家に抱擁しない限り、ドイツ人は植民地などに手をつける權利は與へられない。この抱擁を果して、之等のドイツ人に充分なる食糧を供給し得るやうになるまでは、ドイツ國外の土地を獲得するといふやうな權利は持得ないであらう。

斯かる思想を私の心に芽生えさせたのも、この小さな國境町に私が生れたお蔭である。

私の父も母も前世紀の八十年代の終りまでこの土地に住んでゐた。兩親とも血統の點ではバヴァリア人、國籍の點ではオーストリア人であつた。父はこの頃至極眞面目な文官であり、母は我々子供達を育てるためにのみ生れて來たやうな良き母であつた。

しかし私はブラウナウでの記憶を何一つ持つてゐない。といふのは、私がまだ物心もつかない頃に父はイン河下流にあるドイツのバッサウといふ町に轉任を命ぜられたからだ。そして更に數年後には再び上部オーストリア州の首都であつたりンツの町に移住した。こゝに勤めてゐる中に父は年金を貰つて退職し、余生を北オーストリアのランバツハ近郊の農場主として送ることになつたのである。

未來の僧正を夢みる

私は自分の將來といふものに對しては、格別何の煩ふものを持たなかつた。しかし父と同じ様なコースを辿つて生きやうといふ氣はしなかつた。小學校での成績は、自讃のやうではあるが非常に優秀であつた。少學校に通ふ傍らランバツハの修學院に入り、その合唱隊に加はつたが、この合唱隊の勤めは素晴らしい感激を覺えたものである。豊で莊重で嚴肅な美しさに満たされた教會の祭禮は、私の幼い心を有頂點にせずには惜かなかつた。殊にこの祭禮を司る僧正を見て、少年の心には押へ難い憧れが生れた。

私が最初に、將來の理想といふものを持つたのは、實に僧正たらんとしたことだつたのである。しかし間もなくこの素晴らしい理想は、次の理想へ席を譲らねばならなくなつた。或る日は、父の書齋で軍事問題に關する書物を見つけた。特に夫れ等の中で、最も強く私の心を引つけたのは、千八百七十年からその翌年に亘つて行はれたプロシヤ（昔のドイツ）とフランスとの間の、所謂普佛戰爭に關する繪入書物だつたのである。

これは素晴らしい發見であつた。私はこの本をまるで食ふやうにして讀んだ。讀み進むに従つて、最早私の理想の殿堂からは大僧正の姿は煙の如く消え去つて、そこにはこの英雄的な偉大な戦闘への、

煮え滾るやうな感激のみが渦を巻いた。私はいまや、戦争と軍國主義に關するあらゆるものに依つて生れて始めてこの大きな感激の洗禮を受けることになつたのである。

しかしこゝに一つ、どうしても解け切れぬ疑問があつた。それはドイツ人のプロシヤが戦争に従事してゐるのに、何故同じドイツ人であるオーストリアの國民が、プロシヤを助けてこの戦争に参加しなかつたのであらうかといふことであつた。ドイツのドイツ人と、オーストリアのドイツ人との間にどんな相違があるといふのだ。

我々はすべて同じドイツ人に屬してゐないといふのであらうか。とまれ、幼い私の頭では、すべてのドイツ人が、必ずしもビスマルクの國家に屬してはゐないのだといふことが、解き難い謎であつた。

三 轉 して 畫 家 志 願

この頃から、私の辯舌上の才能は、そろそろ芽を吹き始めた。議論好きな私は、友達と火の出るやうな議論をすることに依つて、益々私の辯舌を磨くことになつたのである。そして、いつとはなしに

私は、一つの辯論會でもあると、その司會者の位置に据へられるやうになつた。

この辯舌の才能の萌芽と共に、もう一つ別な芽が萌出したのもこの頃である。それは繪畫に對するものであつた。圖畫は自分でも好きであり、父も亦私のこの才能は強く意識してはゐたが、折角乍らオーストリアの學校では、圖畫などは附け足りのやうな課目に見られてゐたし、父自身もまた私の才能には目をつむつて、私を父が經て來たと同様な文官生活に立たせやうと思つてゐた。けれども私は父のこの希望には容易に従ふ氣にはなれなかつた。何故なれば、若い官吏や下役といふものは、常に上役に使はれるものであつて、自分自身の生活の主人公になることは出来なかつたからである。

一方學校での課目は、私にとつては馬鹿々々しい程容易なものであつたために、時間が有り餘つて困つた。そのため私は、屢々森や野原へ出て、學校をおつほり出しておいて惡太郎共と遊び廻つた。現在の私の敵共が私の生涯を詮索して、この少年時代の私を發見したなれば、ヒツトラーは小學教育もロクに受けなかつた無學な男だなどと、卑しい詭計を無數に探り出すことが出来るであらう。だが私にとつては、この時代の追憶程楽しく恵まれたものはない。

十二歳になつた時、私は畫家として立たうといふ決心が、心の奥で固く築き上げられてゐることを

知つた。何も知らない父は、再び文官になるやうにすゝめたのであつたが、その時に始めてキツパリと之を拒み、更に畫家として立つ積りだといふことを斷言した。この私の意外な希望を聞いて、父は顔色を變へて驚いた。

「なに畫家になる？ 藝術家になるんだつて？」

と云つた切り、暫くは呆れて物も云へぬやうに黙つてゐたが、次の瞬間には如何にも性格の強い父らしく、激しく之に反對した。

「いかん、畫家なんか斷じていかん。俺が生きてゐる限りは絶対にいけない」

この強い父の反對は逆に私の決心をより一層固めることになつた。老境に入つた父のその時の表情は實に苦しそうであつたが、父を愛してゐる私にとつても亦、このどうにも修正の利かぬ決心は苦しいものであつた。父は言葉を盡して私の決心を捨て去らせやうとした。父は父としての權力を以てしても、この希望を思ひ止まらせやうとしたが、私はこの權力に對して小さな威嚇行動を以て應じた。つまり私の望みを叶へて呉れないのなれば、もう學校の勉強なんかしないといふ宣言である。この時採つたこの行動が、果して正しいものであるかどうかは分らないが、私はすつかり學業に見切りをつ

けて、たゞ好きな地理と歴史だけに力を入れた。中にも歴史は最も氣に入りであつただけに、優秀な成績をあげたものである。

少年愛國者

當時の私の中に、私は次の二つの重要な心の出來事を認めることが出来る。」
その第一は、私が國家主義者となつたことであり、他の一つは、歴史に對してそれが非常に重要なものであることを認識したことである。

一體當時のオーストリアは、雑多な民族が集まつた國家であつた。五千二百萬の國民の中ドイツ人は約一千萬人を占めてゐた。彼等はその國籍をオーストリアに置きながらも、常にドイツとドイツ語のために、血の出るやうな生活を戰つて來たのである。この事實を祖國ドイツの中で果して幾人が知り、幾人が考へてゐたであらうか。

之等一千萬人のドイツ人は、祖國と壁一重のところの生活し、全的にドイツ帝國を支持して來たにも拘らず、ドイツ自身はその植民地政策に夢中になつて、足下にゐる其の氣の毒な失はれた血と肉に

對して、殆んど何等の注意をも拂はなかつたのである。

しかし、オーストリア國內のドイツ人は、祖國のこの無關心に失望することなく、戦ひ得る限りの方法を以て血の純潔のために戦つてゐた。その一つの現はれはこの國の中に於ける言語闘争である。闘争者と、日和見主義者と、裏切り者との三つが「巴」になつて、ドイツ語のために戦つてゐたのであるが、その鋒先はドイツ人を養成するところの小學校へも勿論容赦なく向けられて來た。幼い子供達に對する働きかけが、どんな偉大な効果を擧げ得るかといふことを充分に知つてゐる之等の闘争者は、子供達に對して次のやうに叫びかけたのだ。

「ドイツの少年達よ、君達にはドイツ人であることを忘れてはならぬ」

「ドイツの少女達よ、あなた達はドイツの母となる者であることを記憶せよ」

この運動は觀面に奏効した。幼い戰士達のゲリラ戦は隨所に行はれ始めた。ドイツ語以外の唱歌を歌ふことを拒んだり、ドイツ國家を示す禁制の徽章を得意になつて附けたり、そのために教師に罰せられたり、鞭で打たれたりしても、却つてそれを偉大なるドイツ人の英雄的忍従として喜ぶやうな傾向さへも見られるに至つた。

私自身も十五歳の時には、完全にこの國民的な闘争に参加してゐた。そしてオーストリア國の支配者たるハプスブルグ王家に對する王朝的な愛國主義と、ドイツ人の根強い國家主義との相違はハッキリ認識するに至つたのである。

一方歴史に對する眼覺めであるが、この國の學校では、オーストリアの歴史を教へなかつた。私はリンツの學校に轉じてレオポルド・ベツチ博士にドイツ歴史の講義を受けた。このベツチ博士の教育こそは私の全生涯に深い影響を齎せたものなのである。博士の歴史教育法は重要な點を強調し、どうでもよいものは捨てる主義であつた。また我々のドイツに對する狂信的な情熱をよく知つてゐて、常にこの情熱を導き利用することを忘れなかつた。そのため歴史は私の何物にも代へ難き熱愛の課目となつたのである。

若き闘争者

私はこの教師の下でドイツ史を學んだことに依つて、オーストリア王朝が、如何にドイツ人を冷遇してゐるかを判然知ることが出來た。この時からして私は、ハプスブルグ王家の敵たる立場に立つた

のである。

オーストリアは我々をドイツ人として愛することが出来なかつた。ハプスブルグ王家は機會ある毎に、チエツコ人をこれ見よがしに好遇した。只單にそうした表面的な事實だけではなく、オーストリア人の中には、押へ切れぬ反獨的な氣運さへも根強く醸成されつゝあつたのである。

ドイツ人は背負ひ切れない程の重荷を背負はされた。税金に於ても血税に於ても、想像を絶した大きな犠牲が、次から次へと要求されたのである。しかもこれを助長した原因は、實にドイツとオーストリアとが同盟關係を結んだからに外ならなかつた。このことは、ドイツ自身が、自ら手を下さずしてオーストリアに於けるドイツ人を去勢し、衰滅させることになつたのである。しかも飽くまで偽善的なオーストリア王朝は、この國が依然としてドイツ國家であると云ふ印象を外國に與へることに、まんまと成功してゐた。

當時のドイツの指導者は、この偽りの實の事實に對して、何一つ知るところがなかつたのだ。そして新興ドイツ帝國と、舊い偽物のオーストリアとの間に結ばれた、かゝる芝居じみた同盟が、遂に彼の世界大戦争を捲き起す最初の導火線となつたのである。

肺患に襲はる

青年時代の第一歩に於て私の攔み得た確信は次のやうなものであつた。

「ドイツ民族を保護せんがためには、どうしてもオーストリアを瓦解させなければならぬ。而してこのドイツ國民的感情は、オーストリア人が持つてゐる王朝的感情とは、根本的に相違したものである」

しかもこの考へはその後益々強固になるばかりであつた。私は自分が生れた北部のドイツ系オーストリア地方を心から愛した。自然的に之と正比例して、オーストリア人のオーストリアを、益々憎惡するといふ闘争者としての感情や思想をぐん／＼生長させて行つた。

斯うした思想が育まれる一面、私の圖畫に對する才能は學校に於ても認められるところとなり、將來畫家として立たうと云ふ決心は一層強められて行つた。にも拘らず私の心はまた「建築」に深い興味を覺えるやうにもなつて來てゐた。この二つに分れた心を、私は怖らく繪畫に對する才能が建築へまで擴大されたに過ぎないものであらうと思つてゐた。今日の私の地位から考へると、寔に不思議な

程遠つた世界で力み返つてゐたわけである。

十三歳になつた時、敬愛する父が急に亡くなり、一家を悲歎のどん底に突き落した。父の死は確かに我々一家にとつては大きな悲しみであつたが、憂愁に閉されながらも格別の變化のない生活が我々の上に續いて行つた。私は依然として畫家になるための決意を固へさなかつたが、突然病魔が私の心の生活に一轉機を齎すことになつたのである。何となく氣分の勝れなかつた私は、醫師の診斷を受けたところ、意外にも可なり重い肺病に犯されてゐることが分つた。そして醫師は母に忠告して、この體では連も官更などには無理であるから、その方は諦めるべきであらうと云つた。私は父からも母からも執拗に迫られてゐた文官志願の桎梏から、思ひがけない病氣のお蔭で逃れることが出来たのであつた。母も仕方なく私を美術學校へ入れることに決心した。しかし、何れにしても私のこの病魔を退散させるために、少くとも一ケ年間は小學校をも休んで静養しなければならなかつた。

天涯の孤兒

やつと自分の希望が天下晴れて叶へられるといふ喜びに、胸を躍らせた間も二年とは續かなかつた。

父が急死してから二年足らずの月日が過ぎ去つた時、母も亦死の手に招き寄せられてしまつたのである。尊敬する父の死も大きな衝撃ではあつたが、それにもまして、愛する母の死は大きな打撃であつた。

母の死は今迄の楽しい希望や、理想を一瞬にして掻き攫つて行つた。今や機は天涯の孤兒となつてしまつたのだ。それ迄と雖も父の死後餘り餘裕のある生活ではなかつたのが、孤兒となつては尙更貧窮に直面するの餘儀なきに至つた。僅かばかりの遺産と孤兒年金では、到底生活して行くことが出来なかつた。私は母の死を充分に悲しんでゐる暇もなく、パンのために働かねばならなくなつた。

そこで私は決心して、首釋ウィーンへ出る事になつた。敢然として自らの道を開拓し、勝利の運命を戦ひ取らうとしてランバツハを後にした私の荷物は、極めて小さなものであつたが、私の心の中には鐵石よりも重く大きい決意が横たへられてゐた。

ウィーンに果してどんな運命が待つてゐるかは神のみの知ることである。たゞ私は、そこに私の生き得る道が何本か待つてゐるやうな氣がした。ウィーンへ行きさへすればどうにかなると思つた。否、どうにかするため、是非共ウィーンへ行かなければならぬと思つたのであつた。

ウイーン時代

入學試験に見事落第

これまでも私はウイーンへ二回来たことがある。その最初のは、十五歳の時に二週間ばかりの休暇をウイーン見物に過した時である。第二回目は母が亡くなる少し前に、憧がれの美術學校の入學試験を受けに来た時であつた。私はこの入學試験には必ず合格するといふ確信を抱いてゐた。私は相當の準備をし、それ迄に描いた澤山の繪を携へて學校の門を潜つた。私は試験の結果が發表される迄の幾日間かを、まるでアラビアン・ナイトの中から抜け出したやうな環狀道路の美しさに眼を瞠つたり、莊麗な議事堂の建物に驚かされたりしながら過した。

間もなく結果は發表された。誇りと自信に満ちてその發表を見に行つた私は、しかし意外な結果に行當つた。私は不合格だつたのだ。敢て白狀するが、今日迄の私が、自分自身に不満を感じたのは、後にも先にも實にこの時一回だけであつた。私はどうして不合格なのかを試験官に質した。が試験官

は簡単に「君の繪には畫家としての才能が不足してゐる」と答へただけであつた。しかし階け加へて「畫家としては缺けてゐるが、建築學校には適當してゐる」と云つた。

この言葉は私の不満と失望とを救ふ大きな役割を果してくれた。既に私の心はそれ以前から繪に對すると同様の熱が、建築に對しても起つてゐたからである。私は數日考へ抜いた揚句、繪の方は諦めて、將來建築家にならうといふ決心を固めたのであつた。

斯うして私は孤兒として三度目のウィーン入りをしたのである。私の將來の希望は既に確立してゐた。私は悠揚迫らざる態度を以て、この希望を生長させるために、その日から生活との四つに組んだ戦ひを始め出したのである。

労働者からペンキ屋へ

人生の最初のスタートであるウィーンの五ヶ年は、物質的に見て、私にあらゆる苛酷な難が加へられた。貧苦の女神は常に私の上にのし掛つて押潰さうとしたけれども、その力が強まれば強まる程、之に抵抗する私の力も強さを加へて、遂には私は、この貧苦の女神を母とすることに感謝するやうに

なつた。後年私が如何なる困苦にも動じないだけの力を持つ事が出来たのは、一にこの時代の試練の賜と云はなければならぬ。

とは云へ、この五ヶ年の思ひ出は、決して楽しいものではない。どの思ひ出の中にも悲しみが裏打されてゐるのである。ウィーンこそは私にとつて、悲痛と困苦と缺乏との五ヶ年間を意味する忘れ難い都なのである。働かねば食へない私は、ウィーンへ來た最初は勞働者の群に雜つて、その日のパンを得てゐたが、間もなく小さなペンキ屋を始めた。而も之等の仕事から得られた錢では、時として激しい飢えを我慢しなければならぬ程慘めなものだつたのである。

歌劇が好きな私は、少しでも餘裕があると歌劇を観ることを楽しみにしてゐたが、それ以外は、何と云つても讀書が唯一の楽しみであつた。私の知識は、この當時の貧るやうな讀書に依つて大分組立てられたと云つてもよいであらう。

この讀書は私の知識を組立てたばかりではなく、私の人生に對する心象をも作り上げた。私の心に生れたイメージは、私の行動の確乎たる中心をなすものであつた。しかも青年時代に生れたこのイメージは、今日に至るまで少しも修正を加へられてゐない。また之を變へる必要をも感じた事がない。

實に人生のイメーヂこそは、青年時代に確立されるものであることを、身を以て知つたのである。將來に對する設計圖は青年時代に於て組立てられねばならない。成人してからはこの設計圖に従つて組立てたり實行したりするだけのことである。

毒蛇のとぐろ

私の少年時代は、ブルジョア階級の家庭に育つて來たので、勞働者階級のことには就いては何一つ知らなかつたし、知らうとも思はなかつた。然し運命の神が私を偶然にもこの勞働階級に突き落してからの私は、嫌でも應でも貧しい人々の生活に直面して行かなければならなかつた。その時からして私はもう盲目ではなくなつた。私には人生といふものゝ兩面が次第に明瞭な形となつて理解出來るやうになり始めた。人間の空虚な偽りや粗暴な外面と、その中に潜められてゐる内面的な性質との區別がつくやうになつて來たのである。

當時のウィーンは、社會的に見て決して健全な都ではなかつた。といふよりも怖ろしく不健康な状態にあつた。ハプスブルグ王家の強引な中央集權政策は、ウィーンの中央に莊嚴目を奪ふ大宮殿を建

現させ、諸々の貴族や高官や富豪達の邸宅が楯比してゐたが、之を取巻く外廓の世界には、ボロ切れのやうな貧民や、食ふにパンなく、寝るに家なくして橋の下や不潔な運河の岸に、ごろ寝をしてゐる無數の人間が充滿してゐたのである。

正にこの有様は毒蛇がどぐろを巻いてゐるにも等しいものであつた。しかし何故これが毒蛇のとぐろであるかは、その毒牙にかゝつたものでなければ到底分らない。實際の體驗を持たぬ者共は、この慘澹たる状態を見て、徒らに感傷的な同情を寄せたり、皮相な儲舌を繰返してゐるが、こんなものは有害でこそあれ決してこの状態を救ひ得るものではない。感傷家達は問題の中心を見失ふし、儲舌家達は問題の核心に透徹し得ないからである。

社會事業を上から試みて、この不健康な状態を是正しやうとする人々は、心の中に愚かにも感謝を期待してゐる。しかしそれが何を意味すると云ふのであらう。斯かる人々はその好意を賣物にして、鵜呑みの社會事業などを試みるよりも、寧ろ人民の權利を回復することに努力すべきである。

一介の勞働者として働く私にとつて、日々のパンを稼ぐ機會を逸して、止むを得ず空腹を我慢しなければならなかつたやうな日は、私にとつて最も暗澹たる頁であつた。勞働の經驗を持たぬ私は、非

熟練工として仕事を求めねばならなかつた。非熟練工の仕事は簡単に求められたけれども、それは失はれることも亦簡単であつた。斯うして私は毎日のパンのために、日々を追つかけて廻されねばならなかつたのである。

惨憺たる人生學校

熟練労働者は、簡単に解雇されるやうなものはなかつた。しかし彼等と雖も必ずしも安全ではあり得なかつた。働くに仕事がなく、従つてその収入の途を失ふといふやうなことはないにしても、彼等の上にも矢張り締め出しや罷業などの不安が見舞ふことは屢々であつた。

ウィーンへは田舎から毎日無数の人々が集まつて來た。この首都は食欲に之等の素朴な人々を吸収し呑み込んだ。彼等がウィーンの土を踏んだ時には、彼等は健康な肉體と明朗な心を持つた立派な國民だつたのであつたが、彼等の滞在が永びけば永びくに従つて、次第に彼等は國民の仲間から失はれたも同然な人間となり變つて、首都を放浪する衰れた姿の存在となるのである。私は目を経るに従つて、彼等をその渦巻のなかで、残酷にも八ツ裂にする首都を憎まざるを得なくなつて來た。

既にパンを得ることだけでも斯の通りであつたから、その住宅状態に於ても亦實に悲慘を極めたものであつた。私はウィーンの非熟練労働者達が固まつて住んでゐる、あの不潔を極めた鼻持のならぬ惡臭に満たされた荒家を想ひ出すだけで、身慄ひするやうな嫌惡に襲はれるのである。

しかしこの慘澹たるどん底の人生學校に、私を入れてくれた神に對しては、生涯を通じて深く感謝するものである。不幸にして私は、まだ之等の蟲唾の走るやうな嫌惡の状態を破壊し改造することは出来なかつたとしても、そのことへの遺憾は、私の心を更に鞭打つて、急速に且つ完全に、様々の人間學の教育を齎してくれたのである。

私はこの悲慘な状態から之等の人々を救ひ出すには、どうすれば良いかといふことを考へ始めてゐた。そしてそれがためには唯一つの道しかないことを發見したのである。即ち將來の發展のために、確かりした基礎を造り上げるには、何としても斯る状態を生む痛腫を叩き潰す殘忍な決意が必要だといふ深い責任感に外ならなかつた。

眞の社會事業は斷じて滑稽で無益な社會事業などから生れるものではない。そんなものは個人を墮落させるか、若しくは正しい道より踏み外させることにしか役立ちはしない。眞の社會事業こそは、

我々の經濟的、文化的な生活組織の中に深く根を下してゐるところの、誤謬を根絶することより外にはない。

實際に於て、オーストリア國家は、この根絶の痛棒を喰ふに足るだけの、あらゆる社會立法、社會正義を缺いてゐる存在であつた。しかも多くのドイツ人の浮浪者達は、そうしたことに氣もつかず、之を檢討しやうともせず、俺達はドイツ人であらうがなからうが、そんなことは問題ではない。たゞパンが充分に與へられ、今日の生活に安全な場所さへ與へられさへすればそれで充分だ——などと、全く民族的な誇りの影さへも見られぬ程、その性根が摺り減らされてゐるのである。私はこんな人間を見、こんな言葉を聞く度に、何とも名狀の出來ぬ憤激を覺えたのである。

大きな問題への眼覺め

私の社會問題に對する興味は、斯様にして次第に眼覺めて來た。このことを自覺した私は、時を移さずこれを徹底的に研究し始めたのである。それと併行して、次第に未知の世界が、私の眼前にその姿を現はして來たのであつた。

いゝ按配に、一九〇九年から一〇年頃になると、私の生活からそれ迄のやうなひどい缺乏が退却を始めた。私は小さいながら獨立して、製圖家や水彩畫家として働き得るやうになつた。素よりそれらの収入は決して潤澤なものではなかつたが、パンのみに追ひ廻されてゐた過去とは違つて、次第に自分自身の時間を持てるやうになつて來た。私は盛んに讀書し、且つ盛んに自分自身の考へに没頭するやうになつた。また適當に隙を作つては、音楽や藝術のことも學び、遠からずして建築家になつてみせるといふ理想に益々磨きをかけることを忘れなかつた。

政治に關する興味は、私に旺んな政治的知識慾を起させた。私はこの興味をあらゆるインテリの普通の義務であると思つてゐた。従つて私は政治問題に關する書物をも熱心に讀み、且つ研究した。

斯ういふと私は、いろんな知識を得たいために、手當り次第に書物の捕虜となつたやうに思はれるかも知れないが、決してそうではない。眞の讀書法を心得てゐる者は、そんな非組織的な讀み方が、只徒らに混亂を招く愚しさをよく知つてゐるからだ。眞の讀書家は、如何なる書物であれ、それが自分の目的に役立つか、または知つて置く價值があるかどうかに依つて、自分に役立つと思ふものだけを撰擇する方法を知つてゐる。そしてその方法だけが讀書に依つて自己に何物かを齎すものであつて

それ以外の讀書法は殆んど無價値である。

マルクス主義への接觸

私は十七歳になるまで「マルクス主義」については殆んど何も聞いたことがなかつた。そしてたゞ漠然と、社會主義も民主主義も同じやうなものだと考へてゐた。その時期までに社會民主黨のことだけは知つてゐた。といふのは、この黨の大衆集會に二三回出席したことがあつたからである。しかしながらそれだけの接觸で、黨の綱領や主義、或は黨員の精神狀態等に對して、格別深い知識を得たといふわけではなかつた。が聽て私は、急速にこの種類の人々と接近し、いろんなことを聞くに従つて社會民主主義こそは、人類愛や社會道德の美しい假面をつけた、怖るべき悪疫であることに氣がついた。この悪疫は、このまゝ放置しておいたら、怖らく世界の全人類を破壊に導く魔力を持つてゐるものであることを發見したのである。

始めてこの社會民主主義者達に會つたのは私が或る建築業に傭はれて働いてゐた時のことである。そこに一緒に働いてゐた同僚からこの黨のことを聞かされ、組合に加入してはどうかといふ勧誘を受

けた。しかし私は、その組合のことについては全然何も知るところがなかつたので、充分研究する必要があるから、その研究が終るまで返答を待つて貰ひたいと申入れた。それではと云ふので彼等は數日の間待つてことを約束したのである。

私の研究は二週間かゝつた。私は晝休みの時間を、パンと牛乳で晝食をしたゝめながら、彼等の交際する話に耳を傾けた。要するに彼等はあらゆるものを否定し、あらゆるものに反對することに依つて、自分達の活る道があると思ひ込んでゐるらしかつた。結局私は、彼等がやつてゐる仕事には、何一つ心を打ち、心を動かされるものゝないことを知つた。どんな方法と力とが私に加へられたにしても、私をして彼等と一緒に行動させることは不可能なる事をはつきりと認識するに至つたのである。

赤　　へ　　の　　激　　怒

私のこの考へは最早決定的なものであつて、如何にしても動かすことは出来なかつた。しかし初めの中は、私は力めて私のこの考へを表面へ現はすまいとして、出来る限り冷靜を保たうとした。だが遂に私はこの氣持を凝つと押へて隠して置くことが出来なくなつた。その手初めとして私は組合加入

の勸誘をきつぱりと拒絶した。それから、更にこの組合運動を否定するものであることを告げ、次第に露骨に彼等の言動を反駁する態度に移つて行つたのである。

このことは彼等をそのまゝにはして置かなかつた。總て彼等は、この小癢な反對論者が到底彼等の組合の味方にならないことを知つて、奥の手の暴力行爲を見せ始めたのである。厄介な理論に勝つ直接手段としては、之が最も簡單且つ有効な方法だと思ひ込んでゐたのだ。

或日彼等から次の様な要求を突きつけられた。

「どうしても組合に加入しないのなれば、今の仕事を捨てゝ退くか、でなければ死を選ぶべし」

と云ふのであつた。私は腹の中では彼等の愚しさをせゝら笑つてゐた。しかしどちらか一つの方法を採ばなければならぬことだけは事實であつた。と云ふのは多數の彼等に對して、私はたつた一人の反對者だつたからだ。私は勿論仕事を止める途を取つた。斯う云ふ愚衆と直接力で争つてみても、何の得もないことは考へるまでもなかつたからである。

私は全くむかつくやうな嫌惡の氣持を抱いて彼等と別れた。之も人生かとは思つたが、斯うしたことが許される現實の狀態に對しては、いろんな疑問や疑惑が雲の如く湧き上つて來た。一體奴等はあ

れでも果して人間だと云へるのであらうか。偉大な民族の一部分だと云へる價值があるであらうか。斯う云ふ事件があつてから間もなく、或日私はウィーンの街を颯々長蛇の列をなして行進する異様な行列を見た。之こそウィーンの労働者達が、誤れる社會主義の操り人形となつて、得々と行つてゐるところの大示威運動だつたのである。

何と云ふ愚にも憤ろしい行列であらうか。私は殆んど戦慄を覺えながら、二時間近くも、この無限の行進を見守つたのであつた。名狀し難い怒りが私の體內を馳け廻つた。この憤激は、その歸途私に生れて始めての赤色新聞を購入させたのである。そしてその夜私は、まるで嘔みつくやうな心持で無數の虚偽と煽動とに満たされたこの新聞を通讀したのであつた。

私は何が故に、多くの新聞紙の中から赤色新聞だけが素晴らしい賣行を示し、赤い書物のみが耽讀せられ、赤色の集會のみが多くの聴衆を吸収し得るかと思ふ事情を始めて知ることが出来た。即ち大衆は、何事に依らず弱い手段や半端な方法で導かれることを望んでゐないのである。丁度女が、弱蟲の男を尻に敷くよりも、寧ろ強い男に服従するのを喜ぶやうに、極度に虐げられた大衆は、敢願者よりも、強力な指揮者を愛するものであることをハツキリと知ることが出来たのだ。

大衆は解放的な自由を與へられることよりも、寧ろ敵を許さぬと云つた風な強力な教導者の方へ、より大きな歡呼を浴びせるものである。

社會民主主義の指導者達は、このコツをよく呑み込んでゐる。そして大衆の弱點を充分に知り盡してゐる。この弱點を基礎として打建てられた運動であるといふことは、大衆を引張り廻すに持つて來いの條件だつたのである。従つて彼等の運動は着々と効を奏して今や抜くべからざる地歩を築かんとしつゝあつた。

之を碾碎するには、なまかな手段や方法では駄目である。矢張り毒瓦斯に對してはより強烈な毒瓦斯を以て應酬するより外はない。彼等の成功を未然に防ぎ、且つ之を根底から顛へすには、理論に於ても闘争力に於ても常に彼等を凌駕する反對側の一團を作らなければ所詮望み得ないことである。

ユダヤ人の黒幕

斯うして次第にマルクス主義者の全貌が、明かな形を浮び上らせるに従つて、私は今一つ重大なものを發見したのであつた。云はゞ之こそマルクス主義の元凶であり、怖るべき赤色參謀本部たるべき

ものだつたのである。ユダヤ人への新しい認識がそれだ。この民族こそは社會民主主義の背後に潜み
つゝ、之を自由に操縦するところの黒幕そのものだつたのである。私は遂にこの主義を發く唯一の鍵
を手にすることが出来たのだ。

ユダヤ人 ユダヤ民族が果して何物であるかを知らうと思つたなれば、何でも構はず倒れる物の假
面を引つ剝がせばよい。そうすれば滾々滾々たる社會的議論の中から、齒をむき出した、狡猾そのも
のゝ如きユダヤ人が醜怪な顔を現はすに違ひないからだ。

私は始めてこのユダヤ人に對して、特別な考へ方を抱き始めたのが何時頃からであつたかを明瞭に
思ひ出すことは出来ない。私は家庭に於ても格別ユダヤ人を攻撃するやうな話を聞いたこともない。
小學校時分にクラスの中に一人のユダヤ人がゐたが、たゞ何となく超然と取り澄ましてゐて、皆と交
際しないために、嫌な奴だな、と思つた位のことである。

政治上の問題で「ユダヤ人」が取り上げられてゐることは、十五六歳時分に既に知つてはゐたが、
私が少年時代を過したリンツ附近には、殆んどユダヤ人は居住してゐなかつたし、よしんば住んでゐ
ても、そうドイツ人と容貌が變つてゐると云ふのでもなかつたから、私はユダヤ人もドイツ人だとは

かり思つてゐた。私のこの考へは勿論不完全なものには違ひなかつたが、私としてはドイツ人とユダヤ人との相違は、たゞ彼等の宗教が我々のそれと異つてゐることだけだらうと思つてゐたのである。従つてユダヤ人が到る處で虐げられ迫害されると云ふ様な話を聞くことがあつても、それは單に宗教が違ふためだけで、そんな目に會はされるのだと思つて、寧ろ彼等に同情してゐた程であつた。要するに少年時代の私は、ユダヤ人に對する組織的な戦争が、同じ國土の中で激しく展開されてゐるといふことなどには全然無關心のまゝ、その戦場の眞只中であるウィーンへ出て來たのである。

ウィーンへ來てからでも、暫くは眼に見える糾纏たる都會の姿と、差當つてパンを稼ぐための勞働とに、私の耳目の大方を奪はれて、この巨大な都會に、どんな種類の人間が居り、どんな種類の層があるかなどはテンで知らなかつた。その後暫く經つてから、やつとこの首都のみに限らず、廣く反ユダヤ主義が展開されてゐることを知るやうになつたが、その時ですら私は、前述のやうな人道的な觀念から、之等の運動に参加する氣もなく、又人から勧められても拒絶し通して來たのであつた。

ユダヤ人への認識

ウイーンへ來た最初私が熱心に讀んだ新聞は、當時世界新聞とまで云はれてゐた「ノイエ・フライエ。プレツセ」や「ウイーンナー・ターゲブラット」などであつた。しかしこの兩新聞とも殆んど盲目的にハプスブルグ王家を崇拜してゐるので、ハプスブルグ王家に對して私の反感が募るに従つて、追権力におべつかを使ふこの新聞に厭氣がさして來た。結局は私にとつて無縁の新聞であると思ふやうになつたのである。

私はウイーンにゐても、ドイツ帝國の政治や文化或は歴史等に關するものを熱心に讀み、且つ研究すると同時に、日を追ふて興隆の途を辿るドイツを我が事のやうに誇りに思つた。それだけにオーストリア帝國の何となき衰頹振りが心の中で皮肉に對照されるのであつた。斯くもドイツを愛する私にとつて、ドイツ帝國の外交は實に素晴らしいものであつたが、その内政に至つては屢々憂慮すべきものを見出さざるを得なかつた。

ウイーンに於けるドイツ皇帝ウイルヘルム二世への反感は相當なものであり、その評判は決して良くはなかつた。私はウイルヘルム二世の中に、單にドイツ皇帝のみでなく、偉大なドイツ艦隊の創始者をも見ることが出來た。私にとつては實に尊敬すべきカイゼルであつた。然るにウイーンの新聞な

だが、小さい地方的な宮廷の勢力に尾を振つて、ドイツのカイゼルを公然と攻撃する記事などを載せたのを見ると、若き私の血は憤激に煮えたぎるのであつた。

殊に有力な新聞が、特に意識的にフランスを褒めそやすことは我慢がならなかつた。その記事には全くドイツ人には耐へられないやうな言葉や文字が使用されることが厭々であつた。その結果私は、反ユダヤ主義の一新聞「フオルクスブラット」に走らざるを得なくなつた。この新聞のドイツのカイゼルに對する凡ての記事は、極めて公正な態度を採つてゐたので、そのことが私を引きつけたのである。尤もまだ私は、この新聞の反ユダヤ主義には左袒出来なかつたが、それでも小型ながら、清潔な「フオルクスブラット」の時事評論は、私に考へさせるいろんなものを提供してくれたのである。

この新聞を読んでゐる中に、これがウィーンの運命を支配してゐた人物とその運動、即ちキリスト教社會黨のカール・リユーゲル博士を知らしめる仲立となつたのである。始め私はこの博士がやつてゐる反ユダヤ運動を反動的なものとして、どちらかと云へば嫌つてゐたのであるが、追々とその意見を聞いたり讀んだりしてゐる間に、私の意見は次第に變化を來すに至り、遂にはリユーゲル博士を、あらゆる時代を通じての、最も偉大なるドイツ人の市長であると考へるやうになつた。

キリスト教社會主義の目的が明かとなり、この主義へ私の心が同感を向けるやうになると共に、今迄抱いてゐた反ユダヤ主義への反感も亦修正されざるを得なくなつて來た。これは私にとつては實に大きな變化であつた。白いものが黒くならうとするのだ。私はこの變化が果して正しいかどうかに就て慎重に考へた。理性と感情とは二ヶ月間にも亘つて、私の心中で戦つたが、結局は感情が勝利を占めることになつた。この時からして私は反ユダヤ主義の翼下に立つことになつたのである。

ウィーンの街を歩いてゐた私は、或日トルコ人の着るやうな長いガウンを着た、黒い捲毛の人間に出會つた。私は突嗟に「これがユダヤ人であるかも知れぬ」と思つた。それと同時に「これも亦ドイツ人なのであらうか」と云ふ疑問が湧き上つた。そこで私は、いつもの私の習慣に従つて、この疑問を書物に依つて解決つけるべく、早速數種の、反ユダヤ主義パンフレットを買ひ集めて研究に着手した。しかし之等のパンフレットは、何れも強い調子でユダヤ人を攻撃してはゐるが、その書かれてゐることに、言葉程強い理論が含まれてゐなかつた。この理論の淺薄さと弱さとは、私を全的に承服させることが出来なかつた。何とかもう少し心から納得の行くやうな確乎たる理論がないものであらうかと、私は數ヶ月の間、解け切れない疑問のために苦しんだのである。そしてその解決されざる心

は餘りにも激しいユダヤ人への迫害事實を、真正面からは認めることは、或は正義に反するのではな
いかとの疑惑をも誘ひ出した。とは云へ、この研究は決して無意味ではなかつた。私は既にユダヤ人
が決してドイツ人ではなく、奇妙な宗教を崇拜するところの、全然異なつた民族であることに眼覺め
たからである。それと時を同じうして、今迄氣もつかなくつたユダヤ人を、街の至るところで見受け
るやうになつた。人口二百萬のウィーン市民の中に、その約一割の二十萬人に相當するユダヤ人が住
んでゐることをも、この頃になつて知つた。

私は解けぬ疑問のまゝ暫くユダヤ人を眺めて來たが、總てこの逡巡にも斷を下される時が來た。そ
れは彼等ユダヤ人が、ユダヤ民族のためのユダヤ王國を作らうとする、シオニズム運動に狂奔してゐ
ることを知り、ウィーン市内に於ても、廣汎な範圍に於てこの運動が展開されてゐることを知つたか
らである。

シオニストであるユダヤ人と、シオニストでない側のユダヤ人との間には、事々しい理論や實際運
動の葛藤が繰り繰げられてゐたのであつたが、その葛藤をよく研究してみると、それは全く虚言と虚
偽との上に組立てられた、意味深長なる一つの芝居であることが分つた。この民族が二手に分れて、

如何に論戦してみせたところで、一度剥けば同じ穴の貉であつて、役者同志の間には立派に一つの共通な目的が貫流して居り、この争ひは輿論を惹き起すための欺瞞興行に過ぎなかつたのだ。このことを知つて始めて私はユダヤ人の心の不潔さに胸をむかつかせたのである。

之はたゞ一例であつて、愈々ユダヤ人の本體を知ると、次から次へ、この民族が如何に指彈され、如何に嫌惡されるに足るだけの、不純不潔な様々のものを持つてゐるかと思ふことが、益々明瞭になつて來た。彼等の服裝が不潔で、その容貌が極めて非英雄的なといふ様なことだけではなく、最も鼻持ちならぬ點は、自ら「選ばれたる民族」と稱するこの人種が、道德的に最も大きな不潔性を持つてゐるといふことであつた。

凡そふしだらや放蕩の存在するところには、必ずユダヤ人の姿なり影なりが見受けられた。特に文化生活方面に於てこの傾向は著るしいものがあつた。不健康極まる文學や、みだらな藝術、全くこの世界に無用と思はれるやうな愚劣な演劇が不思議にも多數の人々の嚆采を博してゐたが、之等の凡ては人口の僅か百分の一にも充たないユダヤ人によつて、すつかり牛耳られてゐたのである。この怖ろしい害毒は、コレラのやうな傳染力と殺人力とを持つてゐた。然もその病原菌は休むことなく培養さ

れ、無數に撒布されてゐたのである。

前述した「世界新聞」も亦この一味だつたのである。表面的にはこの新聞は極めて自由主義的な態度を表明してゐたが、仔細に検討するときは、それは巧みなカモフラージュに過ぎなかつた。この新聞が強く攻撃されることがあつても、或る時は問題ぢやないと云つた風に黙殺したり、或は極めて偉大な態度で應酬したりするのは、彼等の思ひ上つた意志がそうさせるのではなく、そんな態度をとることが、彼等を偉人に見せる唯一の手であることを承知して行ふ。實に狡猾な下劣なトリックであることが明かとなつた。試みに見よ、彼等は常にニグヤ人の作家に對しては、筆を惜しまず賞讃するに引替へ、彼等の惡評の目標は判古で押したやうに、ドイツ人作家にのみ向けられてゐるではないか。彼等はフランス的な文化に對しては讃辭を惜しまないが、ドイツ的なそれには黙殺と惡評のみをしか與へないのである。要するに彼等はドイツ的なあらゆるものに對して、故意にこれを輕視して觀やうとすることに努力してゐる。そして又常に國際的であらうとすることに努めてゐたのである。

身慄ひする憤激

ウィーンはまるで娼婦の都であつた。ウィーン程ヨーロッパ中で、ユダヤ人と娼婦との關係が公然と行はれてゐるところは愉らく見られなかつたであらう。娼婦の賣買は殆んど公然として行はれた。夜のレオポルドシュタットの小路を歩いて見給へ、そこに諸君は應接に違もない程な、之等のどきつい色彩の光景を見ることが出来たであらう。然も之等の無數の娼婦を街頭で縁がせるところの親方が例外なくユダヤ人である事實を知つたとき、私は實に身慄ひする程の憤激を覺えたのである。

最早私の心の中からは、ユダヤ人に對する同情などは、片らもない程綺麗に姿を消してしまつた。それ迄は控へ目にしかユダヤを語らなかつた私も、それ以後は進んで之を人に語るやうになつた。私はあらゆる機會を掴んではユダヤ人の研究を怠らなかつたのである。そしてその私の研究の網へ、果然吞舟の大魚が引掛つて來たのである。

ユダヤ人こそは社會民主主義の指導者であることを、今度こそはつきりと掴むことが出来たのだ。私の永い間の疑問は忽ち氷解した。最早私はユダヤ人に關する限り、過去のやうな捉はれた何等の考へも持つ必要がなくなつたのだ。

先づ私は、社會民主主義の新聞が、一つの例外もなくユダヤ人に依つて支配されてゐることを知つ

た。始め私は、その支配者がユダヤ人であると否には、さう大きな關心を拂つてはゐなかつた。しかしユダヤ人の支配する新聞が、どれ一つとして健全な國家的の思想なり理想なりを持つもののないことは私の注意を引くに充分であつた。

素より私は之等の新聞を腹の底から嫌つてはゐたが、彼等を知り、彼等のマルクス主義を知るためには、堪へ難い我慢をしても、之等の新聞に書かれた癡言を讀まねばならなかつた。しかし到底この忍耐は永續きするものではない。そこで私は方面を轉じて、一體こんな癡言を書き並べる不埒な奴共はどんな顔觸れであるかといふことを調べにかゝつた。ところが、編輯者は勿論、主なる凡ての人がユダヤ人であることに、先づ一驚を喫したのである。

次に私はマルクス主義に關するパンフレットを、片つ端から買ひ求めて、その筆者を丹念に調べて見た。こゝにも亦ユダヤ人以外の者は一人も見付け出すことが出来なかつた。更に私は、この運動の指導者の名前を調べた。果してこゝにも、主要なポイントは殆んど全部この「選ばれたる民族」によつて獨占されてゐることを知つた。尙遡れば、國會の議員にも之がある。労働組合の幹部、各團體の議長、街頭デモの煽動者等、何れも約束したやうに、この狡猾な選民が乗つ取つてゐた。嘗て私が

私の同僚から加入をすゝめられてキツパリ拒絶した社會民主黨も、矢張りユダヤ陣營の一翼にすぎなかつた事實をも亦知つたのである。

茲に於て私は、ユダヤ人がドイツ人ではなかつたといふことを、實に大きな喜びを以て認識し直したのである。そればかりでなく、ユダヤ人こそは、我が愛するドイツ人の油斷ならぬ誘惑者であることをも知つた。

何にも知らぬドイツ人の勞働者達は、この眼に見えぬ者の力に無自覺に操られて、無軌道な運動をさせられてゐるのである。ドイツ人であることの誇りを忘れ、ドイツ國家を忘れてたゞ眼前の僅かな勞働條件の向上や、寢言のやうな自由平等の聲に引張り廻される哀れな同胞の姿を見ることが、私に取つて身を切られるやうな悲しみであり、同時にユダヤ人への大きな憎惡となつたのである。

このことを知つてから私は、何とかしてユダヤ人の猛省を促さうとした。その狂氣じみた教養を反省させやうとした。私は私の情熱を以て、如何にマルクス主義が世界破壊の怖るべき陰謀思想であるかを判らせやうと思つて、機會ある毎に、全く舌がこはばる程にまでこのことを説いたのである。しかし之は私の幼い情熱の迸りに過ぎなかつた。彼等は私の説得によつて一應は理解が行つたかも知

れないが、この自覺は却つて彼等をして、その決心に武裝をさせることだけにしか役立たなかつた。

熱烈な反ユダヤ主義者

私は猛烈に彼等と議論を闘はすやうになつた。しかし之は殆んど標に釘だつたのである。彼等は反對者の無知を利用することに巧みであつた。又議論に敗れると、空々しくとぼける戰術をも心得てゐた。或る場合には證人を立て、議論し、その證人の前で私が勝つたにしても、もうその翌日には結局元の木阿彌に返つてしまつてゐた。しかし何れにしても、彼等と議論し、彼等を憎惡することが益々激しくなるに従つて、ドイツ人に對する私の愛が愈々深さを増すことには變りはなかつた。彼等への論争は、私の愛國心を培養する貴重な肥料の役に立つたわけである。

時として私は、毎日毎時、私の眼の前で刻々とその勢力を強めて行く彼等のマルクス主義運動を見て、之はことに依ると、ユダヤ人に勝利を奪はれるやうな運命が作られてゐるのではあるまいか、との疑問を起すことがあつた。それ程彼等の運動は着々と奏効してゐたからである。

しかし私のもう一つの心は、常に力強く次のやうに反對し否定した。

彼等のマルクス主義こそは、自然の貴族的な木質を否定し、大衆と、數と量とのみを重んじて、權力と力とが持つ永久的な威力に對して全然反對の立場に立つてゐる。彼等は先づ個人を否定し、民族や國家を否定し、それに依つて人類から文明といふものを遮斷しやうとしてゐる。この運動こそは平等觀念を餌にして世の一切の秩序を破壊する以外の何物でもない。こんな運動が成功した時のことを考へて見るがよい。宇宙には唯混沌のみが齎される。人類は滅亡する。正にインターナショナルは或る物を創造する主義や運動ではなく、一切の物を破壊しやうとする、怖るべく且つ憎むべき思想であるに過ぎぬ。

自然は嚴肅である。若し自然の法則を犯そうとする不埒者があれば、自然は直ちに之に復讐する。私が今日ユダヤ人と飽くまで闘ひ抜かうとしてゐるのは、一にこの全智全能の神の意を繼して働いてゐると信ずるが故である。即ち私は神の仕事のために、私自身を闘争に捧げてゐるのである。私はこのやうに神の選民と自稱するユダヤ民族を、心の底から憎むやうになつた。この憎惡は最早私自身如何とも仕様のないものである。しかし一面斯かる憎惡に値する民族があつたればこそ、私の闘争心は力強く養はれた。此の意味では或はユダヤ人共に感謝しなくてはなるまい。

思想の成長

瓦壞の素因

人は誰に依らずずば拔けた才腕を持たない限り、三十歳になるまでは、積極的に政治運動に加はるべきではない。——これが私の抱懷するところの勸かぬ考へであつた。

この信念に従つて私は、長い間政治運動に参加して公衆の面前に現はれることを差し控へた。そして極く限られた範圍内でのみ政治を論じて來たのである。しかしこの間に於て私は、一般の大衆が極めて原始的な觀念で動いてゐるものなることを知り、動機に對する深い洞察を獲得することが出來たのである。そして私は徐々に私自身を鍛練して行つた。

こゝで少しオーストリアの當時の政治状態を説明するなれば、一言にしてこの國は既に老衰状態に入りつゝあると云ふことが出來た。表面的な無事太平に眩惑された國民の頭からは、政治に對する觀念が殆んど失はれてゐるかに見えたが、その裏側に於ては、この國の版圖内に雜居する多數の異民族

が、各々の民族勢力を隠密裡に築き上げつゝあつたのである。而も之と恰も呼應するかの様に、この國の國境をめぐつて、あちらにもこちらにも、新しい民族の國家が形成され始めた。

その最も強力なものはハンガリーの勢力増大であつた。この國の首都ブタペストがハンガリー人の中心都市として益々發展するに従つて、オーストリアはそこに容易ならぬ敵手の擡頭を感じざるを得なくなつた。ボヘミアの首都ブラーグ、ガリシヤの首都レンベルグ、カルニオラの首都ライバツハ等も、何れも民族國家の首都としてめき／＼と勢力を盛り返して來た。

この民族の都が益々強力化し、それがオーストリア國內の夫等の民族と完全な連絡をとつて、愈々強固な地盤を形成するやうになつたなれば、その時こそオーストリアが内部から巨大な音を立て、崩壊する運命に行當る時である。若しこの崩壊を未然に防がうと思ふなれば、そして大國家たるの威嚴を維持しやうと思ふなれば、徹底的に、而して何等の假借もなく、強引な中央集權政策を施さうより外に手段はない筈である。それがためには、何よりも先に、之等の民族の上に一定の國語、即ちオーストリア語を強制しなければならぬ。然るに之に對してオーストリア政府は一體何をしたと云ふのであらうか。この問題に對する奧國政府の怠慢こそは、後日この國の瓦礫を招來する重大な素因とな

つたものである。

眠れる議會

オーストリア政府の衰退は、既にその議會制度の上に、嫌應なしに眼につく程明かに現はれて來てゐた。この國の議會は、英國のそれをそつくりそのまゝ移して來たやうなものであつて、國情を考へない模倣そのものゝ様な議會であつた。滑稽なことには、その議事堂すらも、英國を模倣した建築樣式を採用してゐた。

私が始めてこの議事堂の門を潜つて議會を傍聴したのは、二十歳になるかならぬ時代であつた。その頃からして私はハプスブルグ王家を甚だしく憎んでゐたので、當然オーストリアの議會に對しても何等好意を持つことは出来なかつた。それよりも王家に對すると同様な憎惡の感情を抱いてゐた。とは云へ、當時の私が議會制度そのものをも憎んだり、否定したりしてゐたと云ふのではない。寧ろ反對に私は、眞の自由の愛好者として、議會政治以外の政治を想像することは出来なかつた。私は獨裁政治は不可能ないと信じてゐた。殊にハプスブルグ王家のあのやうな有様を見て、私は獨裁がよしんば

どんな形式であらうとも、自由と理性に對する罪惡だとのみ思ひ込んでゐたのである。

私がこの國の議會を憎んだのは、それが何等國情に適合したものでなく、全然英國議會の模倣に過ぎないものだつたからである。このことは、無意識のうちに當時の私が、英國の議會を稱讃してゐたことを物語つてゐるかも知れない。

とまれ私はこの國の議會を憎んだ。それと云ふのは、單にそれが模倣議會だと云ふばかりではなく普通選舉法の採用に依つて、オーストリア國內のドイツ人の優位が、慘めに顛落さゝれたからでもある。ハプスブルグ王家の反獨的な氣持はよくこの議會に反映して、議會に於けるドイツ人の勢力は最早昔日の面影をとどめなかつた。このことが血氣の私をひどく憤慨させたのである。従つて若しドイツ人の優位が再び取り戻されたならば、私のこの憎惡も或はそれと共に雲散霧消したかも知れない。

私は始めて國會議事堂に入つた日の光景を忘れることが出来ない。元より私は何等の好感をも持たずして傍聴席に着いたのであるが、一度び議場内の有様を見るに及んで、この反感は寧ろ憫笑に代へられた程喜劇じみたものに満たされてゐた。そこには數百名の議員連が出席して各々の議席を占め、壇上では紳士が眞赤になつて演説をしてゐた。しかしそれはドイツ語ではなく、スラヴ系の方言で堂

堂とましく立てゝゐた。しかも身振り手振りよろしく、一言毎に彌次を遮つて氣狂ひのやうに饒舌つてゐた。それに對して、あちらからもこちらからも盛んに彌次が飛んで、何のことはない、たゞもう面白半分に騒ぎ立てる群衆と何の變るところもなかつた。正面には無氣力そのものゝやうな議長が、形ばかりは嚴かに控へて、時々鈴を振り乍ら議場の威嚴を保たせやうと、氣の毒な骨折を繰り返してゐたのだ。始め私はこの光景を見て、一國の議會ともあらうものが、と憤慨したが、終ひには到頭吹き出してしまはねばならなかつた。

それから數週間を経過して、私は再び議會の傍聴に出掛けた。この前の時のやうな騒然たる有様を心に描いて行つた私は、今度は殆んど空席だらけの空家然たる議會に一時は呆然としたのであつた。一人の議員がだら／＼と演説してゐるのに對して、數人の議員は實にじだらくな様子で椅子に腰掛け欠伸を連發する者もあれば、甚だしいのになるとコツクリ／＼居眠りしてゐる者すらあつた。

最初の傍聴から憫笑を味はひ、二回目の傍聴から呆然を購ひ得た私は、議會といふものに對して強い疑念を抱かざるを得なくなつた。疑問に對しては徹底的に之を解かねば我慢出來ない私は、それから以後殆んど毎日と云つてもいい程、議會へ通ひ始めた。私はこの觀察や、批判から、議會に對する

自分の考へを正當に形造ることに努力した。そして私は約一年の後遂に一つの結論を得たのである。それは今日迄の私の考へを根本的に放棄させるものであつた。即ち私は、單にこのオーストリアの議會を認めることが出来ないばかりでなく、すべての民主主義的議會に對して、最早價値を認める必要がないといふことであつた。私はこの觀點に立つて、多數決による民主主義原理の研究に進み、民主主義理論の精神的道德的な理論や性質をも研究した。その間に議會の騒引が如何なるものであるかをも充分に知ることが出来た。結局この國の議會は、この國のみならず、人類をも死滅へ導く一つの兆候を持つてゐたのである。

「出て行け、惡漢奴」

今日の西歐の民主主義はマルクス主義の尖兵であつて、これなしにはマルクス主義は到底成功し得ない。しかもこのマルクス主義は狡猾なユダヤ人等に依つて運用されてゐる魔藥なのである。

一體多數者が支配する議會とは何物であるかだ。責任者は一體誰であるかだ。何等かの政治上の問題が附議され決定されて、それが不幸にして失敗の政治であつた時、一體この中の誰が責任を持つ

であるか。支配者といひ、指導者と云ふ階級のものも、一旦その政策が失敗であつたことが分ると、巧みに「多數」の中へもぐり込んで、その責任を多數者に轉嫁させて了ふのである。要するにオーストリアの議會はそれなのだ。自己の行爲に對して、敢然として個人的な責任を持たうとするやうな強い意志の者は一人もない。こんな責任回避者こそは人民の敵であり、惡黨でなくて何であらう。

指導者が一度び斯う云ふ恥知らずになると、もうそれで凡ては起ち上る力を奪はれて了ふ。行動に對して斷乎たる勇氣を持つなどの氣概は棄にしたくも無くなつて、人はどんな屈辱を忍んでも、その屈辱を甘んじて受けやうとする腰抜けになつて了ふ。この國の議會を形成する多數者とは、凡そこんなものなのである。常に愚鈍と臆病とを代表する議會主義は、不正不徳そのものでなくして何であらう。

之を要するに、この國の民主主義的な議會は、善良なる人民を代表するに足る賢明な人々の集團を作るといふことの代りに、奸智に長けた臆病者共の寄り集まりを作るにあつた。何故なれば、國民を喰ひ物にしやうと企ててゐる操縱者は、自分の命令によつてどんな損害が國民の上に振り當てられやうと、そのために自分の責任を問はれることなく、巧みに黒幕の影に身を潜めて、長い舌を出してゐ

ることが出来るからだ。

斯かる議會は、少くとも自らの責任は自らの誠實に依つて果さうとする人間にとつては、永遠なる不快であり憎惡である。權利と眞理とを用心深く避けて來たこの民主々義！この發達を喜ぶものはたゞこの主義同様に不潔で不道德なユダヤ人あるのみだ。

眞のドイツ民主々義は、斷じてこんな胸糞の悪いものではない。ドイツの民主々義は自己の責任、自己の行爲を立派に果し抜く指導者を選出することに掛つてゐる。そこには多數者に依る支配などといふ臆病なものの存在は許されない。自己の責任に對しては、自己の全體を以て之に當る個人の支配があるのみである。

これが眞のドイツの民主々義である。愛する同胞を支配するだけの力のない者は、斷じて侵入を許さぬものである。よしんば侵入しやうと試みたところで、この地位の重大性は、そんな弱者や無能力者を近附けるものではない。そんな者が萬一あつたとしたところで、我々はすぐさま之を看破するところが出る。そしてそ奴の首つたまを擲んで、

「出て行け、この惡漢奴！」

と抛り出すことが出来るのである。

大衆は思想の母

バプスブルグ王家がそのスラヴ政策を護るために、深甚な決意を以てオーストリア内からゲルマン主義を追ひ出さうとした時、そのために迫害されたわがゲルマン民族の反抗の焰は、ドイツ近世史上殆んど見ることの出来ない程激しいものであつた。

この時始めて今日迄の愛國者が、反抗者と代つたのである。しかしこの反抗は、オーストリア國民に對する反抗でもなければ、國家に對する反抗でもなかつた。ドイツ人は、ドイツ民族を迫害し滅亡させやうとすることのみに専念してゐる、この國の政府に對して反抗の火の手を上げたのであつた。

この反抗は、一國の政府が、その國民の希望を助け、若しくはそれを妨害しない限り、常に國民から尊敬され保護されるけれども、若し國民から希望を奪ふやうな舉に出たならば、一朝にして怖るべき反抗を受けるのであることを明かに證明したものであつた。この國民乃至は民族的な反抗は、單に民衆の權利であるばかりでなく、神聖な義務でもあるのだ。

然るにオーストリアの議會は、純然たる反ドイツ議會であり、絶對多數の非ドイツ人に依つて組織されてゐた。従つてこの議會を通じてオーストリア内のドイツ系オーストリア人の運命を代へやうと計ることなどは、全く絶望であつた。何等か合法的な手段によつて、この目的を貫かうと考へることしか出来ない愚か者達は、強力手段に依る打壓の方法を極力抑壓することに努力してゐたが、若しも之等の人々の意見通りに行動するなれば、それは全く百年清河を待つものであり、徒らにオーストリア國內のドイツ人を死滅の淵へ突き落すことにしかならなかつたであらう。

人間の權力は、國家の權力の上に立つものである。人間なくして何の國家であるかだ。而してこの人間の權力を剝脱しやうとする議會制度を破壊するには、二つの道が與へられてゐる。その一つは、議會の内部から行はれねばならぬものであり、他の一つは外部から敢行されねばならぬものである。しかし内部よりの破壊は殆んど絶望である。

唯一つの道として、外部から戦ひを挑むには、最も責任ある勇氣に依つて武裝し、非常に入きな犠牲を覺悟する必要があつた。この道の前途には無數の障礙と、無數の打撃とが待ち受けてゐる。しかしよしんば、一旦は彼等に依つて地上に叩きつけられ、背骨を粉碎されたにしても、最後まで起き上

つて戦ふだけの勇氣がなければならぬ。かゝる純粹な民族愛に燃えた闘争に於てのみ、勝利はこの不屈の精神と信念とを持つ攻撃者の側に微笑みかけるものなのである。

この外部からの闘争に缺くべからざる力となるものは、云ふまでもなく民衆であり、且つ闘争の永續化のために、その子供達も亦同様に貴重なものである。しかるにこの大衆と大衆の子供を獲得しなければならぬと云ふ大切なことが、今迄のドイツ人運動者の頭に缺けてゐた。彼等は議會のみに依存し、議會に依つてのみ目的が貫徹出来るものと信じ切つてゐたのだ。

あの空虚な論壇（議會）に一體何が出来ると云ふのだ。最大の、而して眞の論壇とは、かゝる議場ではなくして、巷に開かれる大民衆大會である。我々はそこに、演説者に依つて叫ばれる眞實の叫びを聞かうとする眞剣な顔付の民衆を、何千となく見出すことが出来る。然るに議會に於ては、人民から選ばれた數百名の議員と稱する閑人達が、欠伸交りの形式的討論をして、定められた一定の歳費を頂戴するために、だら／＼と出席してゐるに過ぎない。

尤もこの議會に於けるドイツ人の代表は、聲を咽してドイツ人のために叫び續けた。それをしも眞剣ではなかつたと云ふことは出来ない。だがその獅子吼が何を煽ち得たであらう。彌次と、欠伸と、

獸殺だけが徒らに演説者の勞を轉らふのみではなかつたか。

あらゆる政治運動に於て、その根幹をなすものは大衆である。大衆を完全に動かし得る指導者のみが偉大なる政治家と云へるのである。どんな有力な思想も、大衆の支持なくしては白紙に等しいものである。こんな分り切つたことでありながら、當時のドイツ人運動の指導者は、不覺にも之を見落してゐたのであつた。

ドイツ民衆を訓練するには

一方我々は宗教の方面からも、オーストリア國內に於けるドイツ人の不幸を見る必要がある。

ハプスブルグ王家がスラヴ國家たらんと決意して後は、ドイツ主義者を壓迫するために、宗教の力を利用することをも忘れなかつた。各民族に従つて教區がある。ドイツ人はそれまで純然たるドイツ牧師によつて、ドイツ人の教區を受持たれてゐた。ところがハプスブルグ王家が反獨的になるや、この然純たるドイツ人教區にチェツコ人の牧師を派遣する様な方法を採用した。チェツコの牧師は、人情の本來からドイツ人の利益よりもチェツコ人の利益になることの力をより多く考へた。ドイツ人の牧

師は之に對抗して、同胞の利益を計るべく努力したけれども、結局はすべて失敗に了らざるを得なかつたのである。これはカトリック僧侶たちによつて、ドイツ人の重大な権利が、蹂躪された實例である。

カトリック教會は、その本國をイタリアのヴァチカンに持つてゐるのであるから、或る程度迄他國人であるドイツ人に敵意を持つてゐたとしても我慢の出来る點はある。いけないのはプロテスタント（新教徒）の傍觀である。プロテスタントは純乎としてドイツのものである。ドイツ生え拔きの教會である。彼等こそ此の大きなドイツ人の不幸に對して、死力を盡して、その權力を擁護してやるべきであつた。然るに彼等はドイツ民衆の權利や運命を考へるよりも先に、純然たる教理上の意見、例へば「政府の權利」だとか、「民主主義」だとか、或は「平和主義」「國際的結束」などの無意味な理論に心を奪はれてゐた。彼等はその無氣力からと云ふよりも、習慣的に、ドイツ人の物事を、主觀的に見るよりも客觀的に觀察すると云ふ態度に慣らされてしまつてゐた。その結果ドイツ人の權利のために、ハプスブルグ王家や、カトリック教會、並びにユダヤ人に對して敢然と攻撃に立上つたドイツ派の領袖シエーラーを、積極的に支持することに躊躇したのである。

之等の牧師達は何れも立派なドイツ人である。しかし悲しいことに、ユダヤ人の撒き散らした平和主義の毒瓦斯に當てられた人々であつた。彼等はドイツ人の反抗が權利であり、その反抗が力でありその力が正義であるといふところに眼を向けないで、却つて之等が平和なるべき社會の、至上なる精神とは矛盾するものなりとして見たのである。

一體之等の平和主義者の態度が、正しいと思つてゐることからして大きな誤りである。ユダヤ人を見給へ。ユダヤ人はその民族の利益や權利を得るために、こんなドイツ人のやうな取り澄ました平和主義的態度を採つてゐるかどうか。又チエツコ人やポーランド人その他も、またドイツ人のやうなひつぱのない態度で行動してゐるかどうか。

我々は絶對的に、一人の例外もなく、ドイツ民衆を、その少年時代からして誇るべきドイツ國民としての權利を認識させるやうに、斷乎として訓練して行かねばならない。

私は敢てドイツの宗教家を攻撃するものではない。宗教のことは、宗教改革家に任さなければならぬ。私の云はんとするところは、牧師としてのドイツ人ではなく、ドイツ人としての牧師に對してである。

結局私はオーストリア國內に於けるドイツ人運動の中から、左の三つの重大な誤りを發見したのである。

その一は、社會正義のために働くことが如何に重要な仕事であるかへの認識を缺いてゐたために、この運動が遂に大衆の強い、闘争的な支持を得られなかつた。

その二は、オーストリアの議會の力を過當に評價して、云はゞドイツ人を議會に身賣りしたためにドイツ人運動の中心勢力を失ひ、この運動を非常に不自由なものにしてしまつた。

その三は、カトリック教會と争つたために、中流並に下階級諸團體中の大多數を占める優秀な構成分子を、この運動から離反せしめた——といふ三つである。

二種の敵を與へず

今日迄のドイツ人運動の失敗の原因には、更に今一つの重要な點を見逃してはならない。それは、集中された目標への徹底した研究が足りなかつたことである。若しドイツ民衆の權利を擁護すると云ふ一つの目標に向つて、徹底的な研究を行ひ得たなれば、この政治運動も指導權も確立して、希望通

りにドイツの國民と民族とを救つたに違ひない。然し事實は之の反對で、目的なり力なりが餘りに多方面に分散せられ、その結果力は弱化して、遂に政治運動たるの威力を喪失するに至つたのである。率ひて行かうとする大衆に向つては、決して二つの敵を興へてはならぬ。常にたゞ一つの敵を最大唯一の目標として興へなければならぬ。萬人の憎惡がこの只一つの敵に向つて集中されるやうに仕向けなければならぬ。實際には二つ以上の敵があつたにしても、優れた指導者は之等の敵を同一種類のものとして、大衆に思はせるだけの才能を持つて居るべき筈である。斯うと一所を覘つて打下す鐵槌は、矢獸に叩いて廻ることよりも遙かに確實、且つ徹底的な効果を擧げるものである。

若し大衆に幾種類もの敵があることを知らせたならば、それは徒らに彼等を驚かせるばかりでなく敵が多いといふことのために自己の正しさを疑はせるやうな重大な結果を招き勝である。敵が正しくて、自分達が間違つてゐるのではないか、との迷ひを生じて来る。斯うなつては如何に指導者ばかりが頑張つても到底勝算はない。この反對に大衆がたゞ一つの敵と戦つてゐることを信するなれば、その信念は彼等の立場を一層強化し、敵愾心は一層燃え上り、怒濤の如き勢ひを以て敵を征服すること

に邁進することになるものなのだ。

オーストリア憎悪愈々募る

ドイツ人運動の指導者達は、この大切な機微に通じてゐなかつた。しかるに彼等の相手であるキリスト教社会主義黨の幹部達は、大衆といふものの性質をよく理解してゐた。そのために、常にドイツ人運動者に對して優位の對抗が出来たのである。しかし、この幹部達と雖も、ユダヤ人に對する攻撃の點では大いに誤つた觀念を持つてゐた。彼等はユダヤ人を攻撃する點に於て相當激烈ではあつたが殘念なことにその攻撃武器は「宗教」であつた。宗教的にユダヤ人を攻撃することは決して無力ではないにしても、それはユダヤ人の外敵を衝くものであつて、心臓部を狙ふ抜本的な攻撃とは云へなかつた。ユダヤ人を攻撃するには、何としても民族的な立場からすべきである。

宗教的に攻撃されることなどは、ユダヤ人にとつては蛙の面に小便であつて、必要とあらば洗禮の水一滴を以て、彼等に加へられんとする抑壓の矛先を轉じ、ユダヤ主義を擁護出來る程極めてお手輕なものだつたのだ。つまり彼等の攻撃方法は、爪の垢ほどもユダヤ人を心配させることは出来なかつ

た。若しもキリスト教社會主義黨の指導者たちが、大衆の如何なるものであるかを理解してゐたと同じ程度に、反ユダヤ運動を理解してゐたとしたら、更にまたもつと國家主義的な傾向を取り入れてゐたとしたら、この主義なり黨なりは、ドイツ民族の運命を變へるといふことに成功してゐたに違ひないと思へらるるのである。

私は以上の様な見解を抱き、且つこの見解に對しては不拔の確信を持つてゐた。しかし私のこの確信は不幸にして、何處に於ても正しく理解されなかつたし、オーストリアの政黨にも採用されなかつた。私はこの空しき確信を抱きながら、差當つて何をなすべきかに悩んだ。若し政黨が眞に有力なものであるなれば、私は信じて得る政黨に身を投じてこの確信を實行に移したかも知れないが、そんなものは素よりあらう筈もなく、皆無力の凡頭を並べてゐるだけに過ぎなかつた。このことは一層私のオーストリアに對する憎惡を募らせる結果になつた。結局オーストリアにゐては何一つ出来はしない。ドイツ民衆の運命は、この土地以外の土地、即ちドイツ國內に於てのみ決定し得られると云ふことを知つた。

オーストリア國家は絶對的にドイツを拒否してゐる。ドイツ的でないものに對しては惜しみもなく

保護の手をさしのべるが、ドイツ的な一切のものは、之に強い壓迫を加へんとしてゐることが益々明かとなつて來た。殊に首府たるウィーンには雑多な民族、例へばチエツコ人やポーランド人、ハンガリア人、ルテニア人、セルビア人、クロアチヤ人などが雜然として巢喰ひ、それらの民族が又無軌道に混血兒を生んで民族の純潔さが日一日と失はれて行くばかりか、街のどこへ行つてもユダヤ人が目につくので、そんなことだけでも最早私はウィーンの街に居たゝまれない嫌惡を感じ始めた。

私はウィーンにゐる間中、常に幼い頃聞き覺えたバヴリア地方の、ドイツ語特有な響きを忘れることが出来なかつた。どう努力しても、ウィーンの俗語を覺えることが出来なかつた。斯うして長くウィーンで生活すればする程、いろんなことが私の神經に引掛つて、憎惡の火の手は燃え上る一方であつた。この氣持は、子供の頃から祕密な希望と、かくれた愛が私の心を牽きつけてゐたドイツの土地への、憧がれへと變つて來たのである。私は今に有名な建築家となつて、この憧がれの祖國へ行き、祖國のためにその土地で働く悦びを想像して、獨りで胸を時めかした。

或る人々には、この私の憧憬が理解されないかも知れない。しかし、母國から追はれて、その神聖且つ尊い母國語のために戦はなければならぬ人々や、祖國と民族とのために忠實であらうとするた

めに、迫害や壓迫に耐へて來つゝある人々、また最後の時が來たなれば、懐かしの母國の腕に抱かれて永眠しやうと希つてゐる人々には、私のこの憶がれが充分理解出来るであらうと信じてゐる。

私は、ウィーン時代のことに、餘りに長く書き過ぎたやうである。

しかし何と云つてもウィーンは、私にとつては徹頭徹尾冷酷ではあつたにしても、こゝに於ける五ヶ年間は、又と得られない貴重な年月であつた。私は何も知らない少年時代に此の都に入つた。けれども、こゝを去るときには最早考へ深い大人になつてゐた。私はこの都から私の世界觀や政治知識の土臺を得ることが出來たのである。換言すれば、今日のナチ黨の礎石は、この五ヶ年のウィーン生活に依つて打込まれ置き据へられたのである。若し運命が私をこの町へ導かなかつたならば、そしてあの若い頃に、あれだけの修業と鍛錬とを與へてくれなかつたならば、ユダヤ主義や、社會民主主義、或はマルクス主義等に對して、私の現在の態度が如何に變へられてゐたか、想像だに許されないことである。

ハプスブルグ王家への憎惡！ ユダヤ人への徹底的な認識！

これだけの事だけでも最早私はオーストリアに留まつてゐる必要のない男であつた。

憧れのミュンヘンへー

一九一二年の春、私は決心して遂にミュンヘンへ移つた。

ミュンヘン！ おゝ、こゝはドイツの街だ。あのウィーンと比べて、何と云ふ大きな違ひ方であらう。私はあの腐敗した、淫靡な色彩と悪臭とに満たされた街を思ひ出すと、胸が悪くなるやうだ。

ミュンヘンへ来て、この街で使はれてゐる言葉を聞くと、私の心には懐かしい青年時代の思ひ出が滾々として湧き起つた。目に見る物、耳に聞くもの、一切の事物が過去の私にとつて懐かしいものばかりであつた。否過去ばかりではない。現在に於てもこの懐かしさには少しも變りはない。怖らく世界の中の街と雖も、ミュンヘンの様に強く私の心を惹くに足るところはない。不思議な運命の絲が私とミュンヘンとを結びつけて、その後の私の發展の進路と此の街とが不可分になつたことが、こんなにも私の心にこの街への愛着を起させるのであらう。

私はこゝで、今迄やつて來た藝術の仕事を手放した。そして今度は外交の問題について研究しなければならぬと思ひ立つた。落着いてドイツの外交を研究し検討するに従つて、私はオーストリアにゐた

頃感じてゐたより以上に、ドイツがオーストリアと手を握り合つた政策の愚かしさを痛感したのである。

残念なことに、こゝへ來てから私が會つたどの政治家や外交家も、ハプスブルグ王家を、この上なく頼りになる盟邦だと思ひ込んでゐた。彼等はオーストリアが最早ドイツの一國家ではなくして、内部的に崩壊の一途を辿りつゝある國であることを、てんで知らなかつた。私は少くともオーストリアのことに就ては、之等ドイツの政治家達よりは遙かにその眞實と多くの事實とを知つてゐた。

とは云へ、ドイツ帝國の外交政策が愚劣なものとは思はなかつた。たゞ多分に狂氣じみたところが見受けられた。彼等は同盟といふことに餘りに信頼し過ぎて、その同盟國であるオーストリアが、既に親斯拉ヴ主義に轉換し、ゲルマン主義的なあらゆるものに壓迫を加へつゝある事實を、たゞ溫なしく見守つてゐるだけだつた。それだけなればよい、甚だしいのになると、オーストリア内のドイツ人が、屢々説明して來たやうな止むを得ざる事情から、ハプスブルグ家に反抗するのを見て、同盟國の親交を傷付けるものだとして攻撃する沒膽漢さへもあつた。

戦争は必要だ

ドイツの政治家達が後生大事に握つてゐるところの獨逸同盟を見ると、一體同盟とは何物であるか、と叫びたくなる。

同盟とは、少くともドイツが將來何事かをなす際に、ドイツだけの獨力でやるよりも、同盟國と提携してやる方が、容易にその目的物を獲得出来るために結ばれたものではないか。然るに何ぞやオーストリアは、同盟國であるドイツを拒否せんとの下心を持つてゐるのである。一體何のために同盟を結んでゐるのだとの疑問や憤りは、怖らくこの間の事情を知る者の心に等しく起る想念であるに違ひない。

今私はドイツの人口問題を考へてみる。ドイツは年々九十萬の人間が増加しつゝある。之は巨大な數である。この龐大な家族達に常に充分な食糧を興へるといふことは容易ならぬ問題である。限られた領土内に於て、その國民の餓死を避けるためにはどんな方法があるか。私は先づ次の四つの點から私の考へを纏め上げねばならぬと思つた。

一、先づフランスのやうに、人工的に産兒制限をして、餘計な人間の増加を食ひ止めるといふ方法である。

しかしこの方法は決して賢明なものではない。自然の大法則を無視してこんな方法を採用したならば、成程人口は或る程度迄制限出来るかも知れないが、それと同時にドイツは必らず弱體化する。そしてドイツよりも強い民族が、いつかは必ずこの弱小國を喰ひに掛るに違ひないからである。

二、次に考へらるべきことは「國內開發」である。

この政策は決して悪いものではない。國內開發に依つて、顧みられなかつた土地は拓かれ、諸般の生産は著るしく増大するに違ひない。しかしこれには自ら限度がある。限度のある仕事に對して凡てを注ぎ込まうとすることは、失敗の穴を目標に走り續けるやうなものである。よしんばその限度が相當遠いものであつたにしても、凶作の年には忽ち大きな飢饉に見舞はれないと誰が保證出来るか。

土地——それは神が、或る特定の民族なり國家なりに與へたものではない。土地は常に之を征服する力と、これを耕作しやうとする意力を持つ民族のために用意されてゐる。國內開發に依つて、極めて限られた土地を開拓するといふことは、自分で自分の首を締めるやうなものである。敏捷で旺盛な

力を持つた他民族が、どん／＼その版圖を擴大し、榮えて行く時に、ドイツ國はたゞこつ／＼とドイツ國內の土地を耕作してゐなければならぬとするやうな政策は、決して當を得たものではない。

三、次の方法としては、毎年數百萬の過剩人口をどん／＼移住出來るだけの、新しい土地を手に入

めることである。

四、さもなくば國內の産業と外國貿易を極力旺んにして、外貨を獲得することに依つて、國民の必要な物資を購入する。

この二つの方法が残されてゐる。さてそれでは、最後に残されたこの二つのうちで、何れが最も良

い方法であらうか。云ふまでもなくそれは、新しい領土を獲得することである。新領土を持つことは

他の如何なる方法よりも、計り知れない程の利益を齎することが明白であるからだ。例を現在にとつて

見ても、若し我々の祖先が、その當時も多數に存在してゐた平和主義者共のお題目に惑はされて、平

和主義の上に立脚した政策を採つてゐたとしたならば、ドイツは現在の三分の一の領土も獲得するこ

とは不可能だつたに相違ない。

今日の歐洲に於ける多數の國家を見るがよい。彼等の本國はさほど大きくはないにも拘らず、その

領土に至つては、何れも素晴らしい廣大なものである。之等の國はその頂點を歐洲國に持つてはゐるが、長大な三角形の底邊をその領土や植民地に置いて、羨ましい程の貿易効果を上げてゐるのだ。

之等の領土は如何にして獲得されたか。それは決して平和的な手段に依つたものではなかつた。物しい武裝と、その武裝に相當するだけの固い決意との下に、力に依つて得られたものである。大きな苦痛と犠牲とを忍ぶ戦争によつてのみ、勝利が齎されたのである。戦争は必要だ。勝利を希ふ民族にとつては、そのみが唯一の勝利の道である。従つて、同盟なるものは、すべてこのことを念頭に置き、このことを目標にして締結されなければならない。

若し歐洲の中でドイツが獲得すべき土地があるとしたならば、それはどの點から見てもロシアを犠牲にしてのみ行はるべきであつた。従つてドイツ人が、自ら鐵を振つて耕すことの出来る土地を得、その土地から必要なだけのパンを得やうとするなれば、所詮は嘗て行つた如く、先づドイツ國民が武裝して、戦士となつて進軍することから始めなければならないであらう。

然るにドイツの指導者は、このことを考へなかつた。今ドイツが新しい土地を得やうとするなればそれは限られた東方の土地あるのみだし、それを得やうとすれば、どうしても武力を使用しなければ

ならぬ。しかるに彼等は戦争は眞平であつた。如何なる犠牲を拂はうとも平和であるに越したことはないと思つてゐた。何故かなれば、彼等は既にドイツ國民を維持せむがために、あらゆる手段を盡すことよりも、ありとあらゆる手段に依つて世界平和を維持すべきであると云ふ考へに提はれてゐたからである。

この結果は、之等指導者はドイツにとつてもドイツ國民にとつても、最も不利且つ不適當である答案を、前述の四つの問題の中から撰び出した。即ち産業と貿易を振興させることに依つて、制海權を獲得しやうと決意したのである。しかしこの政策も詮じつめれば、結局は戦争に依つて最後の結着をつけなければならぬ運命を持つものである。何故なれば、イギリスといふ巨大な植民地を持つ國が、當然この問題に對して大きな障害となるに決まつてゐたからである。」

冷 酷 な 英 國

ドイツの指導者が、平和的な世界貿易競争を、その人口過剩問題の解決策として取上げたことは、寔に狂氣じみた指導政策であつた。

四つの海にその領土を持ち、經濟的な世界制覇を念願としてゐるイギリスが、何としてこのドイツの商業政策をそのまま見過すわけがあらう。イギリスは全力をあげて、ドイツのこの前進を阻害するに違ひなかつた。

由來ドイツ人は、イギリスを敢て臆病者の國家であると思ひ込ませるのに躍起となつてゐたやうな傾向が見える。學校や新聞や漫畫などは、機會ある毎にイギリス人は、商人としては伸々利巧ではあるが、戦争に當つては、信じられない程の臆病者である、國民一般に思ひ込ませやうとしてゐた。

しかし實際はイギリス人は、その經濟征服のためには、如何なる殘忍な行爲をも辭さない國民である。この國民は、その巧みな政治的勢力から經濟上の實力を吸収すると共に、あらゆる經濟的な進出を政治的勢力に變化さし得る大きな力を持つてゐる。イギリス人がその經濟勢力を擁護するのに、血を流すことを怖れて尻込みするであらうなどと思つたことは、實に飛んでもない大誤算であつた。前世界大戰に於て、我々が始めて英國軍と對戦した日のことを思ひ出す。英國人を臆病者と思ひ込んでゐた戦友達の顔には、その猛烈な攻撃力に始めて出合つて、事の意外に名狀の出來ぬ驚きが現はれてゐた。私はこの戦火の中で、始めて「宣傳の力」といふものを生々しく體驗したのであつた。

同盟の弱さ

もう一度同盟に就て考へやう。

同盟が弱化するのには、その同盟國が現状維持の保護者に轉換した時から始まることを、我々は強調せずには居られない。同盟に眞の力が存するのは、その敵に對して平戰何れを問はず攻勢を持つてゐる時であつて、一旦それが保守的、消極的な守備隊形に代るや否や、最早同盟たるの力を漸次失つて行く。獨逸同盟に就て考へても、世界大戰がハプスブルグ王家の側から起り、止むを得ず先ずオーストリアが戈を持つて立上らなければならなかつたといふことは、ドイツにとつては勿怪の幸ひであつた。若しあの戦争が他の方面で、他の方法で勃發したものであつたとすれば、怖らくドイツはオーストリアの援助なんか到底受けられる筈はなく、獨逸以て敵に當らざるを得なくされたに違ひない。獨逸の三國同盟は、この大戰中にイタリアの同盟破棄に會ひ、大戰最中に獨逸側に背を向けて去つたために、ドイツ人は極度に激昂したものであつた。しかし若しドイツが最初にあの戦争の火蓋を切つてゐたとしたら、イタリアに管めさせられたより、も一つひどい寢返りをオーストリアのために味は

されたに違ひないのである。

何故かなれば、ハプスブルグ王家にとつては、獨逸同盟など最早殆んど空文になつてゐたからだ。

それに、ドイツのために味方になつて多くの敵を向ふに廻すといふことは、多數の異民族と異分子をその國內に包藏するこの國として、殆んど不可能事であつた。若しそんな舉に出たら、革命は直ちにこの國に勃發して、オーストリアは敢なく瓦壞するにきまつてゐたからだ。だから、最もドイツに友好的なゼスチュアを示す場合にでも、先ず中立を守ること位が關の山であつたに相違ない。

既にこの當時オーストリアは、少なくとも歐洲各國の憎まれ者になつてゐた。その評判は極めて悪く、之に好意を寄せる國としては殆んどなかつた。この不幸な國に對して同盟國の誼を心から通じてゐたのはドイツ帝國だけであつた。その結果は、オーストリアの敵を、ドイツ自身も亦敵としなければならぬ破目になつたのだ。

私は常にこの不幸な同盟、何一つドイツに利益を齎す筈のない同盟に對して、心から憂へてゐた。オーストリアはどんな角度から見ても、必ず早晚世界的慘事を惹起する危険性を孕んでゐた。そのダイナマイトのやうな危険な國と同盟を締結してゐるドイツ、しかもその危険を感付いてゐないドイツ

の前途に對しては、全くハラ／＼するやうな危なかしさを感じてゐた。當然この同盟は一刻も早く破棄さるべきである。そうでなければ、オーストリアの瓦解する運命が、ドイツそのものをも卷添へ的に崩壊させる、私は機會ある毎にこのことを人々にも強調して來たのであつた。

然し私のこの心配が取除かれる前に戦争は始まつてしまつた。けれども私は、前線で激しい戦闘に従事しながらも、依然としてこの考へを捨なかつた。ドイツを救ふためには、獨逸同盟を破棄することとは今からでも決して遅くはない。この同盟破棄が早ければ早いだけ、ドイツは敵を少なくすることが出来ると思つて疑はなかつた。

經濟征服への過信

とまれドイツの爲政者達が「經濟征服」を考へ且つ實行したといふことは大きな過誤であつた。然し非凡な遠見がない限りこの政策の誤りであることに見透しをつけ得る者は稀であつた、と云ふのはドイツの産業界は、その卓越した種々の發明と相待つて、素晴らしい發展振りだつたからである。正に隆々たるものであつた。この有様を見ては、誰しも外國を後へに敷いて、貿易戰の優勝旗を獲得出來

ると信じるのは無理からぬことであつた。

しかし、このことは國家を一つの經濟機關なりとする觀念を生ましめる結果となつたのである。國家は經濟の法則と利益とに支配せられるものであるといふ觀念が現はれ始めたことである。こゝにこの政策の重大な誤りが芽を吹いたのだ。

一體國家とはそも何物であらうか。

それは決して經濟狀態や經濟發展といふ特別な概念に依つて作り上げられたり支配されたりする性質のものではない。即ち國家は商人や商業團體や産業家などの集まりではない。決して算盤から彈き出されたものではない。それは精神的にも肉體的にも平等な人間が、その種族の發展を唯一の目的として結合したところの、混然たる一共同體である。これが國家であり、國家の進む道であり、國家の目的である。經濟とは單にその行進を助けるための、一附加物に過ぎない。従つて良き國家、強力な國家とは、その共同體の目的のために喜んで自分を犠牲に出来る個人の數が多數に存する國家である。

世界大戰が始まつて、英國が之に參戰する時の宣言は何であつたか。惻怛な英國の指導者達は、「英國は自由のために戦ふ」ことを高調した。單に自國民だけの自由のためのみでなく、弱少諸國の自由

をも獲得してやるために戦ふと宣言した。然るにドイツはどうかであつたか。ドイツの指導者は「パンのために、パンを獲得するために戦ふ」ことを云ひ聞かせたのである。自由とパン、之は何としても芝居にもならぬ段違ひの取組ではなかつたか。

その内實は兎も角として、人類の自由のために戦ふといふことには、大衆の心を捉へるに足るだけの立派な、何となし崇高氣な理想が匂はされてゐた。しかしパンのために戦ふことは、よしんばこれが眞實であつても、餘りに曲のない鞭撻方法ではなかつたか。パンのためにとは、要するに經濟的な利益のためにといふことである。人間が經濟的の利益のために戦ふとなつたとすれば、果して死を見ることが歸するが如としの氣持になり得るかどうか。否、これは望む方が無理な話である。何となれば勝利が齎された曉での、利益の分配には預かれないからだ。従つて當然、戦ふ者もなるべく死なないやうに、巧みに死を回避して要領よく立廻る結果になる。この重大な人情を我々の政治家は理解することが出来なかつた。

再び云ふが、國家は決して平和的な經濟なんかで維持出来るものではない。それは常に民族保持の本能に依つて、或は又英雄的行ひや策略に依つてのみ保持され、建設されて行くものなのである。

前世界大戰

八八

何故百年前に生れなかつたらう

青年時代の私にとつて、何が一番憂鬱だつたかと言へば、商人や官吏にのみ成功や榮達の道が開かれてゐて、それ以外の道は殆んど塞がれてゐることであつた。そんな平凡な、穩か過ぎる時代に生れて來たことは、何としても力のやり場のない不満に馳られざるを得ない。

私は何故百年前に生れて來なかつたらうと、天を怨むやうな氣持にもされた。その頃なれば、人間はピチピチ生きてゐた。「解放」を目ざしてあちらでもこちらでも勇壯な戦争が行はれてゐた。即ち人間が、商賈や官吏以外の大きな價值を持つてゐた時代である。そんな時代に生れ合せてゐたなれば、今日のやうな無爲にして、平穩な日々を睨はずにも濟むし、力一杯の仕事が出来るであらうのにと、屢々考へたり殘念がつたりした。

私は常に少年時代から、決して平和主義者ではなかつた。これは私の持つて生れた天與の性格であ

る。そのため、私を充分に理解しない者や、私の性格を危なく思ふ者達が、今迄にも幾度か私を平和主義へ引入れやうとしたけれども、勿論誰一人としてそれに成功するものはなかつた。

南阿戦争（註——一八九七年南アフリカ共和國及びオレンジ自由國が、英國の侵略に反抗して起した戦争。一九〇二年に講和成り、爾來兩國は英國の植民地となつた）が勃發した時には、私の血は驚く程の熱さで湧き上つた。英國といふ大きな力に對して雄々しくも反抗するこの未開國の英雄達に、限らない共鳴を覺えた。それは随分かけ離れた土地で行はれてゐる戦争ではあつたが、そんなことは私の感激とは何の關係もないことだつた。私は毎日の新聞を、まるで飢えた者のやうに讀んでは、この英雄達の勝利を祈つたものである。

日露戦争への感激

この戦争は残念乍ら南阿軍の敗北に終つて幕を閉じた。私の闘争に目覺めた血はまだ強い力で體內を駆けめぐつてゐた。その中に日露戦争が起つたのである。

日露戦争が起つた時は、私はもうずつと凡てに成長してゐた。素々ハプスブルグ家を憎み、その親

スラブ主義を憎惡してゐた私にとつては、ロシヤそのものにも少しの好意さへ持つてゐなかつた。といふよりも矢張り憎んでゐた。殊にその強力を恃んで、東洋のまだ充分發育してゐない日本を攻撃することには、一種の公憤を禁じ得なかつた。それだけに、世界一の強國と歌はれてゐたロシヤに、憶することなく敢然として矛を採つた日本に對しては、絶對的な支持を與へる氣持になれた。戦ひは世界の豫想を裏切つて、日本の意外な大勝に歸した。私はこの報を得て雀躍りした。何故なれば、ロシヤ帝國の敗北は、取も直さずオーストリア・スラブの弱體化であり、ひいてはそれが破滅の運命を意味したからである。

さて——世界大戦前のドイツ人が、その指導者の指示に従つて、商業的世界征服を信じたことは、商業的にドイツを發展させたことは確かであるが、その一面に於ては、政治の法則にかなつたすべての見識や、意志や、決斷力を忘れさせる結果を招いた。要するにドイツ人は商人となつたことに依つて、ドイツ人たる強さを失つたのである。この弱體化が遂に彼の世界大戦を招き寄せる大きな原因となつてしまつたのである。

しかし私は今一步進んで、このことを考へる。嘗て、そして常に英雄的であつたドイツが、何故斯

くも弱い國家になつたか。それは根底に於て、マルクス主義の毒藥を注射されたからである。

私がウイーン時代に親く目撃し、親しく體驗したところのマルクス主義の大きな破壊力は、遺憾乍らドイツ國家にも既に浸潤して來てゐたのだ。國際的平和主義の假面を被つたこの惡魔は、巧みに偽裝してドイツ政府の中に忍び入り、まんまと我々の指導者達を麻醉させることに成功してゐた。

このことを何も知らないドイツ國民は、「我々の上には何も起る筈がない」と安心し切つてゐたが、これこそ噴火山上で晝寢をしてゐるやうなものであつた。私はこの臆病者達の豫言を破壊して、足元に差迫つてゐる危險を忠告することに之務めた。そしてそのことは今日に於ても尙續けられてゐる。只現在のそれは、その當時と比べて大規模な忠告と、マルクス主義への徹底的な闘争が行はれてゐるだけの相違である。

一九一三年から一四年にかけて、私は確信を以て次のことを警告した。即ちドイツ帝國の安危は、マルクス主義と四つに組んで、食ふか食はれるかの一大決戦をすることに掛つてゐると。この主義は殆んど目に見えない。然し性の悪い白蟻のやうに、何時の間にか國家の屋臺骨を食ひ荒して、それを崩壊へ導く怖ろしい力を持つてゐるものなのだ。

かゝる憂慮に心を痛めてゐる時に、バルカン戦争（註——バルカン半島に起つた二回の戦争、第一回は伊土戦争に敗れたトルコの弱體化に乗じ、一九一二年ブルガリア、セルビア、ギリシア、モンテネグロの三ヶ國が同盟を結び、突然トルコに宣戦して勝利を占め、ロンドン條約の結果トルコからバルカン半島の大部分を割譲せしめた。第二次はこの割譲分割に當つて、ブルガリアが餘りに過大な要求をしたため、他の三國はルーマニアと結んでブルガリアを攻撃し、トルコも亦失地恢復を企圖してブルガリアを攻め、遂にブルガリアが屈してブカレスト條約を結ぶに至つたもの）が起つた。この戦争は間もなく一應の結末を見たが、その結末からは、更に次の一層大きな事件が持上るであらうといふ懸念が充分に見て取れたのであつた。今に何か大變動が起る、今に——といふ氣持は、毎日まるで悪夢のやうに私の心を襲つた。この不安は一時私を熱病患者のやうにした。

しかしこの不安と悲しみは、そう長くは續かなかつた。苦しみ抜いた私の心は、やがてその不安が一つの希望に代りつゝあることを知つた。諦めから翹望への變化であつた。そして私は、所詮避け得ることの出来ぬ不幸であるなれば、徒らに目を經るよりも、一日も早く我々の頭上にそれが見舞つて來る方が良いと思ふやうになつた。

世界大戦の勃發

遂にこの不安や、悲しみや、諦めや、翹望に最後の斷が下されるときが來た。突如としてバルカン
の一角に捲き起つた大事件は、一瞬にして歐洲全土に、漠々たる戰雲を捲き起す大戦争となつたので
ある。

オーストリアの皇儲フランツ・フェルジナンド大公が、セルビヤに於て一凶徒のために暗殺された
といふ報を耳にした時、私はひどくかけ離れた立場にゐたため、細部に亘る事情を知ることが出來な
かつた。それがために私は、これはてつきりオーストリアのドイツ人が、ハプスブルグ王家の親スラ
ブ政策に憤激の餘り、ピストルに依つて天誅を加へたものに違ひないと思つた。と同時に、之は大變
なことを仕出かしたと顔の色を變へたのである。

何故なれば、當時のハプスブルグ家の親スラブ政策は、既に世界各國が是認してゐたからだ。この
是認された事實に對して、ドイツ人が報復を加へたとしたら、怖らくドイツは全世界の非難を浴びな
ければならないからだ。しかし私は間もなくその暴漢が、セルビアの一青年であることを知つた。こ

の新しいニュースは、今度は私を戦慄せしめた。それはこの事件そのものが、裏切り者のハブスブルグ王家に對して下された、最も峻厳なる神の復讐であることを意味してゐることを知つたからである。

激怒したハブスブルグ家は、直ちにセルビアに對して宣戦を布告した。この戦宣を早計であつたと評する者も多數あるが、それは誤りである。所詮如何なる國家と雖も、かゝる一觸即發の時機に於ては、斯ういふ方法を採用するより外に手はなかつたらう。よしんば先づ外交交渉に依る解決點を見出ださうと努力して見たところで、それは結果を一時的に引延ばすに役立つだけで、破局を防止する力とは決してなり得なかつたに違ひない。

この時に於けるドイツとオーストリアとの外交關係は、極めてまづい位置にあつた。兩國ともに、どうしても避けることの出来ない問題（即ち戦争）を、平和主義者の癡言に災いされて極力避けやうと努力して來たために、却つて何等の準備も整つてゐない。最も不適當な時機に、大問題に直面しなければならなかつた。

とまれ戦争は勃發して了つた。ドイツは同盟の誼を忠實に守つて、オーストリアの敵を向ふに廻し

て戦ふことになつたのである。

この歳たる現實は、久しい間の私の憂鬱を吹き飛ばしてしまつた。何故百年前に生れなかつたらうと脾肉の嘆に喘いでゐた私の心は、始めて待望の時を恵まれて、雄々しくも勇み立つたのである。私は抑へ難い感激の嵐に襲はれ、神に跪いて、斯かる時代を與へて呉れたことに、心からなる感謝を捧げたのである。一切が叩き直される時機が來たのだ。これは單にオーストリア人やセルビア人だけの問題ではない。實に愛するドイツ人そのものゝ死活問題である。ビスマルクの政治は、遂に總決算たる戦争にまで押進まなければならなくなつたのだ。

「ドイツよ　すべての上に！」

久しい間私の體内に鬱屈してゐた希望が満たされる日が來た。少年時代から青年時代に亘つて、燃え切つてゐた私の愛國熱が、その吐け口を與へられる日は來たのである。最早私は、私の仕事に齒みついて、拱手傍觀してゐる時ではなかつた。私は幾度か國歌「ドイツよ、すべての上に！」を歌ひ腹の底から「ハイル」を叫んだ。私は遂に立上つた。

素より私は、久しく憎み續けて來たハプスブルグ王家のために戦ふものではない。私は私の祖國であるドイツ帝國のために、ドイツ國民のために、喜んで戦場の露と消える決心をした。

一九一五年八月三日、私は決然としてルドウイツと三世陛下に、バヴァリア聯隊へ編入して頂きたいといふ歡願書を捧呈した。私はその結果を一日千秋の思ひで待ち受けた。そして早くもその翌日、回答は齎されたのである。私は許可されたのだ。許可證を握りしめて、私は文字通り狂喜した。許可證を握る手の慄へるのをどうしても止めることが出来なかつた。數日後、私は軍服を着てゐた。遂に一個のドイツ帝國軍人となつたのだ。そしてこの軍服は、それから六ケ年の間私の身に着けられてゐた。斯くて私の生涯の中で、最も大きな、重大な時期が、到頭その緞帳を繰り上げ始めたのである。私にとつて氣がかりなことは、たゞ一つしかなかつた。それはぐづくしてゐて、第一線に立つ日が後れはしないかといふ心配だけだつた。それだけがたゞ私の心の静けさを掻き亂すだけで、魂の凡ては最早第一線に飛んで行つてゐた。

間もなく我々はミュヘンを後に行進を始めた。愈々ドイツ帝國をその舊敵から守るために、西部戦線への進軍は開始されたのだ。そして進軍中に、私は生れて始めてライン河を見た。ドイツの歴史と共に

に永久に流れるところのライン河は、流石に私の心を打たすにはゐなかつた。

寒い雨がじめ／＼と降る夜、我々の一隊は黙々として佛白國境のフランダースを進軍してゐた。間もなく夜明けが來やうとしてゐた。その時突然我々の頭上を、シウルシウルと激しく空氣を裂く音を立て、一發の砲彈が掠めて飛んだ。と同時に小銃や機銃が雨のやうに降り濺いで來た。之が始めて味方戰場の音であり、味であつた。我々は時を移さず野をよぎり、敵の防塞を遮二無二突破して敵陣に突込んだ。そして文字通り壯烈な白兵戦が展開された。我々は最初の戦ひに、先づ敵に勝つたのである。

引續き必死の戦ひが續けられた。その激しい銃砲聲の絶間に、どこからともなく歌聲が聞えて來た。その聲に和して、いつとなく皆が力一杯歌つてゐたものは、

「ドイツよ、すべてのの上に！　ドイツよ、世界のすべてのの上に！」の國歌であつた。

四日間激しい戦闘が繰り返された。そして我々は交替のために後方陣地へ退いた。が、その時の皆の歩調は、四日前とは全く違つたものになつてゐた。銃砲の洗禮を受け、死の恐怖を潜り抜けて來た偉大なる經驗は、僅か十七歳の少年たちの歩調をすらも、全く大人と同じに確かりしたものに變へて

しまつてゐたのである。

これが序曲であつた。

しかしこの喜びもロマンスも感激も、やがて日毎繰り返される凄惨な戦闘に依つて、一切死の恐怖に被はれてしまつた。私も亦死の恐怖を感じないではなかつた。けれどもその本能的な自己保存の聲が心の中に起れば起る程、それに對する私の反抗心も強まつた。私の義務感は一九一六年の冬までには、完全に恐怖心を征服して、全く「意志」が支配者となることが出来た。

これは單に私だけに起きた心の變化ではなかつた。ドイツの全軍に亘つて、この變化は起つた。要するに一戦毎にドイツの全軍は鐵石の意志を持つ軍隊として鍛へられて行つたのだ。この英雄的な精神こそは萬古を通じて燦たる光芒を放つものとも云へるであらう。

私は既に軍人である。だからなるべく政治を論じたくはなかつた。しかし銃後から送られて來る新聞は、常に私の心に政治を考へさせねば措かぬものを持つてゐた。

戦争の日數が經つに従つて、新聞にはこんな記事が時々現はれるやうになつた。「戦争は、苟くも文明國人と稱する者のやるべきことではなかつた。ドイツの軍人は實に勇敢である。しかしこれは既に

定評のあるところであつて、何も今更我々文化人が驚くにも當らないことである。とまれこの戦争は我々には何等の關はりをも持つものではない」

この新聞記事は私に異様な感じを與へた。すると間もなく銃後に於ける民衆が、戦争熱を昂めるための示威運動やその他あらゆる催しに對して次第に反對の氣勢をあげ始めたことを報じて來た。この事實は儲舌な新聞に益々油を澆ぎ、兩々相俟つて一層この反對氣勢が擴がるかに見えた。實に許し難い罪であり、絞罪にも償すべき非國民的態度であるにもかゝはらず、不可思議にも之等の民衆も新聞紙も何等の處罰を受けぬのみか、彼等のこの反戰運動は益々旺んになる一方であつた。遂には我々が命を賭して勝ち得た大將利の戦捷祝賀を拒む者すら出來て來たのである。

私には之は解き難い奇妙な現象と見られた。戦争熱は陶酔である。若しこの夢が一度破られるやうなことになるたら、最早それは容易な力では元へ取り戻すことは不可能である。而してその結果はどうなるか。これは最早云ふまでもないことである。

私自身としては、戦争の喜びを昂揚したり、前線の將兵を勢ひづけるやうな何等の手段も講じられないといふことが、ひどく腹立たしかつた。そして、斯うしたことが、組織的な何者かの指揮に依つ

てなされてゐるのが、どうしても理解出来ないので苦るしんだ。

怖るべき反戦運動

更に私を苛立たせたのは、マルクス主義に對する當局の態度であつた。ユダヤ的でないすべてのものを破壊することを唯一の目的としてゐるこの主義は、ドイツの労働者階級の中にも深く喰ひ込んでゐた。しかし一九一四年この大戦が勃發して、労働者とその燃えるやうな祖國愛から、ハイルを叫びつゝドイツのために立上つた時には、流石のマルクス主義者共も顔色を變へて慄へ上つたのである。そのまゝで居ることは自分達の絶滅に遭遇するものであることを愼くも悟つた彼等は、マルクス主義を放棄して、彼等も亦ドイツのために戦ふ、といふ態度を示したのである。之は彼等一流の欺惑に満ちたものである。且つその欺惑は實に巧みなものであつた。

この欺惑にまんまと引掛つたのはカイゼルであり、ビスマルクであつた。忠良なるドイツ人が前線に敵弾に墜れねばならなかつた時、同時に國內に於ける之等のバチルスも根絶さるべきであつた。しかるにカイゼルは之等の惡魔共を（多分はうまく利用する積りであつたらうが）提携の相手に撰んだ

のである。しかし結局、國民は憎むべきマルクス主義者共の思ひの儘に料理されることになつてしまつたのだ。

世界觀の相違から来る闘争は、それが激しければ激しい程、強烈な攻撃戦法を採らなければ、絶対に勝利を得ることは出来ない。この場合の攻撃戦法は、無慈悲で残酷すぎる程の力と武器とでなければ、到底相手を仆すことは出来ないのである。この鐵則を、鐵血宰相ビスマルクは殘念なことに知らなかつた。彼はマルクス主義者を仆すべきことは知つてゐたが、それを爲すための方法を見失つてゐたのである。

彼はこの闘争に自らの強力な手を下さずに、ブルジョア階級に委ねたのである。ブルジョアとは何者であるか。マルクス主義者がプロレタリアばかりだと思つたら飛んでもない間違ひである。ユダヤ人が、世界經濟の上に抜くべからざる力を持つてゐることを知つてゐる者には、このビスマルクの失敗は容易に了解出来る筈だ。とまれ勢力を盛り返した彼等は、得たり賢しとばかり、巧妙な方法を以て、怖るべき反戦運動の火の手を舉げ始めたのである。このことを知れば知るだけ、彼等に對する私の憎惡は大きくなつた。

私は今迄の私の態度を一擲しなければならぬ時に立つてゐることを知るに至つた。彼等は是非共倒されねばならぬ。そのためには、私は従來の方針を捨て、積極的に政治問題で活動を開始しなければならぬ。戦争が終つたら——そして私が無事に生き永らへたら——。

政治問題を研究するものにとつて、最も煩はしく且つ迷はされるものは宣傳である。特に陰謀的宣傳は我慢のならないものであるが、マルクス主義者はこの武器をすつかり自己藥籠中のものとして巧みに利用してゐた。

大戦中には、實に無數の出來事があり、その中には信じ得べからざる意外の出來事もあつたが、それは殆んど大部分宣傳の結果であつた。私はしみじみと宣傳の強い力を體感したのである。

戦争中は物を考へる時間が有り餘る程ある。この間隙を巧みに衝いたのが敵の宣傳であつた。ドイツの指導者達は、この問題に對してはてんで無關心であつたが、その代り私は敵から宣傳なるものに就て實に多くの知識を得ることが出來た。

之は一例に過ぎぬが、イギリス人やアメリカ人は、ドイツ國民を匈奴のやうな野蠻で殘虐な國民であると宣傳して、自國の將兵に充分なる戦争の用意をさせた。ところがドイツでは、全然之と反對で

あつた。我々是我々の敵が何れも滑稽な程臆病者で弱蟲であることのみを教へられてゐた。だから、敵はドイツ軍の勇敢さと優秀な武器とに依つて、バタバタ殲される戦友を見る毎に、猛然たる敵愾心を湧き上らせたが、ドイツ兵は弱蟲であるべき敵が、案に相違して仲々頑強であることに先づ驚かされた。我々は格別これがために恐怖状態に陥ることはなかつたが、漸次勇氣を挫かれて行つたことは被ひ難い事實である。凡てのドイツ兵は、新聞なんかもう當てにはならないと思ひ始めた。それについて、戦争そのものゝ理由をすら疑ひ始めるものが生れて來たのである。

「宣傳」に就ては充分私は考へた。そして要約すれば次の諸點に特に力を入れるべきであることを知るに至つた。

- 一、宣傳は永久に一般大衆に對してのみ行ふべきである。宣傳の目的は、個人を科學的に訓練することではなくして、大衆を斯うと思ふ方向へ導くがためのものだからである。
- 二、大衆は忘れっぽいし、その理解力もまた極めて少ない。だから宣傳に於ては、特に重要なもの一二だけを厳選して、どんな愚な人間にも徹底するまで、根氣よく繰返さなければならぬ。
- 三、自己の宣傳に於て、どんな僅少な部分にしる、相手の正義を認めては負けである。そのことは

意外に大きな疑惑を自己の立場に起させるからだ。敵を容赦なく責め立てよ。宣傳に於ては、理性よりも感情を視はなければ駄だ。愛か憎しみか、正か邪か、真か偽かが必要なだけだ。

大戦中に於ける敵の宣傳は、正にこの法則を踏んでゐた。敵は僅かに二三の項目だけを取り上げて常に我々に宣傳の矢を放つて來た。五月蠅い程繰り返された。始めの中は我々は鼻であしらつてゐたが、次には不愉快な氣持にされるやうになつた。そして最後には遂にこれらが信じられるやうになつてしまつたのである。

この宣傳が開始されてから四年半經過した。その間敵は實に根氣よく繰り返した。そして四ヶ年半の後には果然これが奏効して、到頭ドイツ國內に革命の烽火が上げられるに至つたのである。要するに敵はこの點に於て壓倒的に勝利を獲得した。この間に處してドイツ側はどんな宣傳をしてゐたか。答へは結果が語つてゐる。効果ある宣傳は全くゼロであつたのだ。

大戦中の敵の宣傳

最初に敵の宣傳が我々の懸望に舞ひ込んで來たのは、開戦翌年の一九一五年であつた。その翌年に

は一層宣傳の數が多くなつたし、且つ強化されて來た。一九一八年になると最早それは巨大な洪水のやうに、手のつけられない勢ひで擴がつて行つた。もう斯うなるとドイツ軍の意志は無いにも等しかつた。ドイツの將兵は敵の操るまゝに物を考へるやうになつて了つたと云つてもよい状態であつた。戦争の最初に於て、ドイツ軍は破竹の勢ひを以てフランス軍をその國境から奥深くへ押し込んでしまつた。ところが間もなく我々は、驚く程強力な反撃に遭つて、敢なくその陣地を捨てねばならなかつた。これはすべてその背後に大きな宣傳の力が働いてゐたからである。

しかるにこの期間中、ベルリンからは何が一體戰線へ送られて來たか。

何もなかつた。否、それよりも一層悪いものが送られて來た。それは新聞だ。前述の通り、全く第一線の將兵を去勢することのみに努力してゐるやうな之等の新聞は、極端に私を憤慨させた。若し私が救き得る地位にあつたなれば、之等の新聞を絶対にタゞではおかなかつたであらう。

敵軍からバラ撒かれた宣傳ビラが、我々の陣地へ降つて來たのは一九一五年の夏であつた。ビラは頻繁に送られて來た。そしてその形式はいつも違つてはゐたが、ビラに書かれてあることは大體きまつてゐた。即ちドイツは今非常に苦るしんでゐるとか、このまゝでは戦争は決して終らないとか、ド

ドイツが勝利を得るなどの希望は全然失はれて了つたとか、といふ種類のものであつた。またドイツ國民は既に心から平和を希望してゐるにも拘らず、カイゼルと軍國主義者とが之を許さないのだといふのもあつた。全世界は決してドイツ國民を敵とするものではない。敵は君達と共同の敵たる惡漢カイゼルだけである。この全人類の敵が倒されたとき、始めて戦争は幕を閉ぢる。ドイツ軍閥が仆された時始めて民主主義國は、幸福な、永遠の平和のうちにドイツ國民を抱擁するであらう。とも書かれてゐた。

この宣傳は確かにドイツ軍の士氣を沮喪させた。我々は戦後の國民を飢や寒さに泣かせまいとして身命を賭して戦つてゐる。然るに戦後では既に想像以上の慘狀が生れ、國民は深い嘆きと呪ひを持ち始めてゐると云ふのである。この「國內消息」は我々を惱まさずにはゐなかつた。

しかしまだ全的には信ぜられなかつた。がこゝに誠に遺憾なことが持ち上つた。それは思慮の足りない國內の女共から、前線の夫や兄弟に送られて來る手紙であつた。それらの手紙には此の敵の宣傳を裏書きするやうな事實が、一種の泣き言になつて書かれてゐた。敵の宣傳は無智なドイツ國內の女共によつて先づ支持者を見出したのである。事茲に至つては、最早疑ひの餘地はなかつた。ドイツ軍

の士氣は衰へ、軍規は目に見えて紊れて來た。そしてそれが爲めに、數十萬の生命を失ふやうな結果すら生れて來た。事態は完全に惡化の一途を辿るのみとなつた。」

負傷して後送さる

一九一六年九月の末、私の屬する部隊は、フランダースの南方ソムの戰線に向つて進軍を續けてゐた。そこに於ける戰爭は實に物凄（ものすご）いものであつた。戰爭と云ふよりも、まるで地獄のやうな有様であつた。我々は銃砲火が文字通りに渦巻く戰場にあつて、陣地の奪取に阿修羅のやうな惡戰を續けた。押し戻されたり、撥ね返したりして、一寸の地を得るためにも死力が盡された。しかし我々は決して退却はしなかつた。所謂死守した。

そのうち十月七日、遂に私は敵彈のために負傷した。そして陣地から一旦後方の野戰病院に運ばれたが、私の負傷は國內送還の必要があると云ふので、複雑な精神状態のまゝ歸還することになつたのである。

私は二年の間、全く戰爭以外の何物をも見なかつた。明けても暮れても、汚れ切つた軍服と、砲彈

の炸裂と、死を賭けての闘ひとのみの中で過して來た私には、二年振りで見える祖國の姿をどう想像していか分らなかつた。軍服を着てゐない人間の姿、そんなものは昔何處かの國で見た、遙かな思ひ出のやうな氣さへもしたのである。

私は國境を越へてドイツへ入る前に、一旦エルミイスといふところの病院へ運び込まれた。そしてそこで後送の順が廻つて來る迄を靜かに横たへられてゐた。フト私は妙なる音樂の様な聲が、隣りに臥してゐる兵へ話しかけるのを聞いた。女！ 女の聲であつた。二年間すっかり忘れてゐたドイツ婦人の聲は、全く私をびつくりさせた。その女は看護婦ではあつたが、とまれ私は二年間只の一度も耳にしたことのない女の聲を聞いて、名狀の出來ない氣持を味はつたことであつた。

歸還列車はベルギー領をドイツの國境に向つて走つた。ブラツセル、ルウヴァン、リエージュ、これらの町々は嘗ての日我々が戦争への興奮に耳をぼてらせながら、堂々と行進して通り過ぎた處である。誰の胸にも今は負傷兵として後送される自分と、健康な兵士であつた頃との對照的な氣持が湧き上つたに違ひない。

愈々國境を越へて、懐かしい祖國へ入つた時には、誰も彼も一樣に興奮した。そしてあの夢にも忘

れなかつた高い破風と、特色のある鐵戸を持つたドイツの最初の家を見た時には、その興奮は頂點に達した。

おい、祖國！ 懐かしのドイツ！

顧みれば一九一四年の十月、この國境を越へて敵地へ趣く時の我々は、全身を熱狂的な興奮に燃え立たせてゐた。生きて再びこの國境を跨げるとは思はなかつた。にも拘らず、傷ついたとは云へ私は再び祖國を見ることが出来たのだ。そのことに依つて私は興奮した。しかしそれは靜かな喜びの壺に盛られた靜かな興奮であつた。

變り果てた祖國の姿

我々が進軍を開始した記念日に近い秋の或る日、私はベルリンの近郊にあるペーリッツ病院に着いた。そして泥と血と汗とで汚れ切つた軍服をぬぎ捨て、眞白いシーツの上へ勞られる如く横たへられた。思ひがけない貴重なものを見たかのやうに、その眞白いシーツを、ひそかに愛撫したものである。

病院のシーツは純白であつたが、そこに様々の形をして病を養つてゐる兵士達の心は、必ずしも純白ではなかつた。最も悲しむべきことは、この多くの傷病兵の心の中にも呪ふべき反戦思想が、相當多量に流れ込んでゐることであつた。或る負傷兵は、戦線に於て如何に彼が臆病であつたかを、自慢氣に面白可笑しく語つた。之に和して、右手を負傷した兵士は、その負傷の原因を得々として辯じてゐた。つまりこの兵は、病院に這入りたいために、故意に片手を鐵條網へ突込んで負傷したと云ふのである。而も彼は、鐵條網に引掛つて戦死した愚かな英雄達よりも、彼自身の方が遙かに英雄だと豪語してゐた。

こんな話を多くの傷病兵は黙つて聞いてゐた。聞くに堪えない話だとばかり、眉をしかめて部屋を出て行つたのは極く僅かで、中には大ビラにこの二人の話に賛成してゐる者すらあつた。私はこの憐れむべき精神病者共の話を、可なりの忍耐を以て黙つて聞いてはゐたが、胸の中は煮え返る程であつた。どうしてこんな非國民的な話を黙つて打遣つておくのかと怪しんだが、聽てその寛大は、之等の愚物でも、名譽の戦傷だからとの特別な計らひではなく、最早取締らうにも取締りのつかない程一般的な觀念になつてゐるからだと云ふことが分つた。要するに、これらの話を黙つて聞いてゐる他の兵

達の心の中にも、大なり小なり共通の何かがあることを知るに至つた。

永い病院生活の末私は再び完全に歩けるやうになつたので、或日許可を得てベルリンの街へ出かけて行つた。久し振りに巷へ出る私の心は様々の期待に膨れ上つてゐた。しかしベルリンの街の空氣は病院に於けるそれよりも遙かに灰色で不快なものであつた。そこには、第一線で見える様な戰鬪意識などはテンで見かけることは出来なかつた。街には陰鬱な眼をした市民が、疲れた足取りで歩いてゐたし、殆んど大部分の市民が、ひどい食糧難のために半ば饑餓状態に置かれてゐた。どこへ行つても不平と不満との聲が満ち溢れてゐた。病院内の状態などは、之と比較するとまだまだ生優しい方であつた。

ミュンヘンは之よりも尙一層ひどかつた。そこにはベルリンを何倍かに擴大したやうな不満があり愚痴があり、怒りがあり、呪ひがあつた。こゝの人達は、與へられた義務を回避することを賢明なやり方だとする程、ひどく反抗的にまでなつてゐた。

さもあらう。今や國家の官吏と云ふ官吏は、すべてユダヤ人である。官吏ばかりではない。商店の賣子までユダヤ人が取つて代つてゐた。これは一體どうしたことであるのか。ユダヤ人と雖もドイツ

の國籍にある限り、戦線に動員されてゐなければならぬ等である。然るに——思ひ返してみると、成程第一線で銃把を握つてゐるユダヤ人は全然見かけなかつた。彼等は不思議にも安全な地に身を置いて働いてゐる。

考へるまでもなく、この間の消息はすぐ了解出來た。彼等は最も危険な場所へはドイツ人を押出して置いて、自らは安全地帯に身を置きながら、巧みに戦争を食つてゐたのである。政治的にも經濟的にも、彼等は既に着々とプログラムを進行させつゝあつたのだ。そして破壊工作の前哨戦たるプロシヤ人とバヴアリア人の離反も、既に私かに實行されつゝあつたのだ。

革命の前夜

このことは私の心に深い傷手を与へた。彼等がバヴアリア人とプロシヤ人とを争はせやうとするとは、この争ひによつて人々の注意や非難がそちらに集中され、元凶であるユダヤ人への攻撃を轉化させるためのものであることがよく分つてゐた。今にユダヤ人はこの仲間喧嘩の裏で、すつかりドイツ人から一切を奪ひ、系統的、組織的に革命の歩を進めて、ドイツを滅亡させるに違ひない、と思は

れた。

何としても之は私に正視出来ない悲しい事實であつた。とは云へ當時の私には未だこの陰謀を破壊すべき何等の力もなかつた。たゞ残されてゐる唯一つの途は、再び戦線に立つて、祖國の敗北と破壊とを防止することよりなかつた。そこでミュンヘンに歸るや間もなく戦線復歸を願ひ出た。許可は直ちに與へられた。私は見たくもない程汚らしい世界に背中を見せて、勇躍戦地へ二度目の出發をしたのである。時に一九一七年七月の初旬であつた。

炸裂する砲彈は私に再び新しい元氣と勇氣とを喚び戻した。第一線は案じた程悄氣てはゐなかつた。ドイツ軍は依然として健全であり、絶對的に聯合軍を壓迫してゐた。最早最後の勝利は間近にあると思へた。

然るにこゝに思ひがけない一大不祥事が突發したのである。國內の軍需工場が一齊にストライキを起したと云ふのだ。之は正に一大事であつた。若しこのストライキが成功したなれば、その反對に我々の攻撃は敗北を招かねばならなかつたからだ。肝心の軍需品の供給を斷たれかけたドイツ軍の攻撃はこゝで一時中斷されるの已むなきに至つた。今一息で叩きつぶされる運命にあつた聯合軍は、この

突發事件のために危く虎口を逃れたのである。

このストライキが繼續したなれば、後日を待たずして、その時既にドイツは白旗を掲げねばならなかつたらう。幸ひにもこのストライキは間もなく解決された。再び我々の攻撃は開始されることになった。しかしこのストライキの敵味方に與へた影響は、計り知られざるものがあつた。銃後の後援に大きな罅の入つてゐることをまさぐと見せつけられた兵士の士氣は、次第に衰へて行くことは極めて自然のことではかない。その反對に、今迄偉大にして不屈なるドイツ軍の攻撃の前に、連戦連敗支離滅裂、全く希望なき戦鬪を繰返すに過ぎなかつた聯合軍の士氣は、急に活を入れられたやうに立直つて來たのである。銃後に革命が起きつゝある！これ程我々にとつて致命的な傷手があり得るだらうか。

英、佛、米の各新聞は、得たりかしこしとして、この事實を取り上げたばかりか、それは事實以上に大きく報導されて、萎えきつてゐた國內の民心にパツと光明を投げた。前線の兵士達には、時を移さず「ドイツには革命が起きつゝある。勝利は既に確實に聯合國側のものである」といふ激勵が加へられた。こゝに勝敗の歸趨は逆轉の氣配を見せんとしてゐた。

それでも前線の兵士は「ドイツよ！ 凡ての上に」を歌ひながら、勇敢に戦ひ續けた。しかし之に和すべき筈の銃後の萬歳は、何と「普通選舉萬歳」だつたのである。エーベルト、シヤイデマン、バルト、リーブクネヒトなどといふユダヤ人の兵役回避者共が、いつの間にか將兵の上に立つて命令を發するやうになつてゐた。兵士達はこの新しい支配者共の、新しい戦争目的を、たゞ不可解な眼をし

ばたゝいて聞くのみであつた。

だが、私の態度や考へは既に最初から一貫してゐた。私はドイツの民衆を裏切つた之等の惡漢共の心中に、祖國愛の片らもないことをよく知つてゐた。彼等は只彼等の利益のみを考へる豺狼である。彼等の利益のために、實に巧みに民衆を犠牲にしようとしてゐる吸血鬼であつた。

最初から戦線に立つてゐる將兵には、この間の消息は大方分つてゐた。しかし後に増援隊として派遣されて來た若き兵士共の考へは、既に我々と相當の隔たりのあるものだつた。従つて増援隊は却つてドイツ軍の戦鬪力を弱める結果を招いたやうなものである。

けれども戦争は依然としてドイツ軍の強さを證明してゐた。こんなに士氣が衰へかけてゐながら、まだ聯合軍の攻撃を充分支へたのみか、幾度か攻勢を取つて、一旦喪つた陣地をも、次から次へと奪

ひ返した。

私は今度もフランダースの野で戦つてゐた。正面の敵はイギリス軍であつた。押したり押し返されたりの際戦が夜に日を繼いで繰返された。

一九一七年七月、私達は皆て我々が若き義勇兵として戦ひ、幾多の戦友を失つた神聖なる土地を守ることが出来た。之に對してイギリス軍は絶えず熾烈な銃砲火を浴びせて來ながら、後年戦史に大きく残されたフランダース總攻撃の準備をしてゐたらしかつた。

一九一七年七月三十一日、果然イギリス軍の總攻撃は開始された。この總攻撃こそは、兩軍共全く死者狂ひの凄惨な戦ひであつた。我々は砲彈の穴や僅かの地物に身を隠したまゝ、勇敢に戦つて一歩も譲らなかつた。八月の始め、我々の部隊は後方からの救援を受けて後退した。しかしながらイギリス軍が莫大な犠牲を拂つて進出し得た地點は、双方の砲彈に蜂の巢のやうに穴を明けられた僅か數百ヤードに過ぎなかつた。

再び傷つく

一九一八年の八月、私は三度びこの地點に立つた。斷じて攻勢を捨てぬ我軍は容易に敵の蹂躪を許さなかつた。しかしこの頃になると、兵士の間では既に盛んに政治論が交されるやうになつて來てゐた。國內からの毒素は遂に完全に第一線にまで及んで來たのだ。

十月十三日の夜から十四日にかけて、イギリス軍はイーブルスの戦線で毒ガスを發射して來た。それは我々が始めて經驗するところの「黃十字」と呼ばれた猛烈な糜爛性毒ガス彈であつた。私はその毒ガス彈の効果を調査する様命ぜられた。そこで私はヴェルヴィック南方の小丘に趣いたのであつたが、その夜は夜つびてこの毒ガス彈に見舞はれ、眞夜中頃までに、既に我々の半數は仆れた。そしてその中の何人かは遂に永久に眼を開かなかつた。

夜明けに近付く頃、私も亦猛烈な苦痛に見舞はれ始めた。如何にしても我慢がならないので、朝の七時頃よりめきながら後方へ退かざるを得なくなつた。まるで眼全體が燃える石炭のやうに熱くなりあたりは眞暗になつてしまつた。

私は間もなくベルリン北方の海岸地方にあるボメラニアのバゼヴァルクにある病院へ移された。そこで私は、ドイツ人としての生涯を通じての一大不名譽に遭遇しなければならなかつたのである。

私は失明するのではないかと思つた。しかし幸ひにも視力は幾分恢復され、痛みも次第に薄らいで行つた。再び繪が描けるやうになる迄、是非とも恢復させなければならぬと思つて、私は眞剣に養生をし、全快を神に祈つた。

その頃の國內の空氣は異常な不安を孕んでゐた。今に何か持ち上るに違ひないと言ふ豫感が頻りと私の胸を往來した。果然この年の十一月になつて、大變動が我々を見舞つたのである。この海岸町の病院の前を、數臺のトラツクに分乗した船員たちが、數人のユダヤ人に指揮されながら、手に手に赤旗を振り聲一杯に革命歌を高唱しつゝ通つて行つたのである。あゝ遂に來た！と思つた。しかし私は、どうかしてこの革命的暴動が、この地方だけの一小事件であつて呉れることを、ひたすらに祈つた。が、それは無駄であつた。噂は次第に高まり、浪のうねりは日増しに大きくなり、遂に最も怖れてゐた革命の大津浪は、ドイツ全土を襲ふに到つたのであつた。

引續いて前戦からのニュースが入つて來た。事茲に至つては、最早降伏を考慮するより外あるまい

と云ふのである。お、降伏！ 今日まで絶對優勢裡に戦つて來た我々が、突如として白旗を掲げねばならないとは——果してそんなことが可能であらうか。

十一月十日、一牧師が悲痛な顔をしながら、我々の病院を訪ねて來た。そして我々はその牧師から既に、起きてしまつた一切の事態を知つたのである。私はひどく昂奮しながらその牧師の話聞きに行つた。牧師は木の葉のやうに打顫へながら、ホーヘンツォルレン王家が退位したこと、祖國は最早帝國ではなく、あの盗人共の共和國となつたこと等を話すのを聞いた。最後に牧師は、如何に王家がドイツのために全力を傾けて盡したかを物語つて、しばし涙にくれてゐた。そして、もう我々は戦争を繼續出来ないこと、戰敗國となつた以上は、勝利者の慈悲に縋らねばならぬこと、祖國は當分聯合國の壓迫を甘受せなければならぬこと等の説教を始めた時、私はよろめきつゝ立上り、寢臺へ戻つて火の様に熱した頭を夜具の中に埋めたのであつた。

墮落した犯人奴！

母が亡くなつた時泣いて以後、始めて私は涙をながした。何と云ふ意地悪い運命であることか。餘

りに残酷な運命の裁きではあるまいか。少年時代からの数々の不幸と不遇、或はこれで生涯盲目になるかも知れぬ毒ガスのお見舞、最後にこの言語同断な祖國の瓦壊！ そんなことが走馬燈の如く心の中を駆け廻つて、私は私のこの限りなき不幸を泣いた。しかしその中私の良心は「卑怯者め、お前の不幸など物の数ではないぞ。何千萬人も人間がお前より百倍も不幸である世の中だ。それでも尙お前は泣かうとするのか」と激しい鞭を加へて來た。

けれども、この一時が私を根底から打ちのめしたことは、修正のしやうのない事實であつた。祖國は遂に最大の災難に遭つた。凡てのドイツ人の堪えに堪え、忍びに忍んだ饑餓も渴きも空に歸した。あたら戦場の露と消えた二百萬の英靈も徒らなる骨と化した。

勇敢であつた兵士たちは祖國の敗北のために惡戦と苦闘とを重ねたのであつたか。フランダースの塹壕で、十七年の生涯を終つた少年勇士も、こんな結果のために一生を棒に振つたのであるか。一切の苦闘はこの祖國を賣つた惡漢共に捧げる努力であつたらうか。祖國ドイツの將來はどうなるのか。こんな悲惨な結果を見なければならなかつた程、今迄のドイツは無價値なものであつたのであらうか。我々はドイツの、而して我々の歴史に對して何等の責任をも負はなくていいのだらうか。こんな

滅茶苦茶な運命を、どうして尊い未來へこのまゝ引渡すことが出來やう。

墮落した犯人奴等！ 私は拳を握つた。

恐怖と混亂との幾日かは続いた。その間に私が知つたのは、ドイツがすべてを失つたと云ふ事實だけであつた。たゞ驢付きの無賴漢共と、お話にならぬ白痴共だけが敵の慈悲を望むことが出來た。日毎夜の出來事はただもうこれらの墮落した犯人共に、火のやうな憎惡の念を燃え上らせることのみであつた。

塙塙の煮えたぎるやうな日は續いた。その間に、私は自分の之からの運命をはつきり自覺出來たのである。私は自分個人の將來について兎や角案じてゐたことを嘲ふやうになつた。この混亂期に私が聞いたり目撃したりしたことは、つねに私が憂慮してゐたことではあつたが、よもやそれが實現されるであらうとは思ひもしなかつたことだらけであつた。

氣の毒なのはカイゼル。ウイルエルム二世である。カイゼルは巧みにユダヤ人を利用するつもりでマルクス主義者等に手を差し伸べた。マルクス主義者共は喜んでその手を握り、如何にもカイゼルの味方であるかのやうに粧ひながら、もう一方の手に匕首を握して、カイゼルの首を覗つてゐたのであ

る。

一切は明白になつた。ユダヤ人一派のこの許すべからざる陰謀に對しては、最早極端な無慈悲の手段を以て臨むより外に方法はない。若し少しでも彼等に隙を見せたら、必ず手に嚙みついて來る輩である。

さればよし、私は政治家となつて私の鬭争を展開しよう。悲壯な決心はこゝに於て實を結んだのであつた。

政治生活への第一歩

いと小さき「社會革命黨」

心配した私の視力も幸ひにして恢復したので、一九一八年十一月の末、私は所屬の聯隊に従つてミュンヘンへ歸つた。しかしその軍隊は既に共和政府の「兵卒委員會」の手中にあつた。云はゞ私の敵の軍隊である。これ以上の不愉快はないので、私はミュンヘン東部のトラウンスタインへ行き、愈々聯隊が解散と決まるまでそこに滞在した。

一九一九年の三月、私はミュンヘンへ歸つて來た。

私の頭の中には無數の考へや計畫が充満してゐたが、さて現在の私に何が出来るかを自問してみると、誠に衰れた程無力であつた。その間「委員會」の改革に對して私のとつた態度が、當局の方針に反するものであると云ふ厭で、その年の四月二十七日の早朝、三人の男が私を檢束するためにやつて來ると云ふやうな事件があつた。しかし私はこの三人に向つて、銃を擬して反抗を示したため、彼等

は手を空しくして歸つて行つた。

その後私は、革命事件を調査する委員會に召喚された。これが今迄の私の、政治的生活面に直接肌を觸れた最初のものであつた。

それから數週間経つた或日、兵士に善良な公民訓練を施す講習會を開くから出席しろと云ふ命令を受けた。無論私は出席した。そしてそこで計らずも私と同じ意見を持つ人々に行き逢ふことが出来たのである。この同志の意見は、現在の瀕死のドイツを崩壊から救ふには、中央黨だとか社會民主黨などの力では全然駄目だと云ふ點にあつた。そこで我々は小さな集會を開いた。この集會の目的は、祖國を崩壊の最後の一步手前で救ひ出し得る新しい勢力を生まふとすることだつた。それには先づこの新黨の名稱からして、民衆の心に充分徹底するものでなくてはならなかつた。そこで、いと小さき我々の新黨は「社會革命黨」と名付けられることに一致した。

この時まで、遺憾ながら私は、まだ資本主義とは如何なるものであるかを知らなかつた。これに就て基礎的な智識を與へてくれたのは、講習會の講師ゴットフリート・フエダーであつた。又この講習會で、生れて始めて國際金融と國際資本に關する經濟の知識をも得ることが出来た。私は之等の講習

を聞いてゐる間に、閃きの如く、我々の新黨が進むべき重大な途を發見したのである。」

國民と祖國のみ

「國民と祖國あるのみ！」

私自身及びナチ黨員のすべてにとつては、これがたゞ一つの信條でなければならぬし、又信條なのである。

我々は我々の民族と國家のために、子供達のために、ドイツ人の血の純潔を護るために戦はねばならぬ。我々が創造の女神から與へられてゐるドイツ人としての使命に、立派な花を開かせ、見事な實を結ばせるために、そして祖國の自由と獨立とを永遠なるものたらしめるために、飽くまで戦はなければならぬのである。

私はこのことを講習會の聽講から感得したのである。フエダーの「利益の獨占を破るもの」と云ふ講義は、大戦争は國際資本に對抗しながら戦はねばならなかつたことを教へた。そしてそのことから私は、如上のスローガンを體得したのである。」

別な意味で、この講習會は今一つの收穫を私に與へてくれた。それは私が平素の持論から、或る機會を捉へて、一人のユダヤ人と皆の前で討論を試みたいと申出したことから始まる。私はこの討論會に於て思ひ切り相手を論駁した。聴衆の大部分は私の説に賛成の意を表し、私はこの討論に勝つことが出来た。その結果は間もなくある聯隊の教官として入隊を命ぜられるに至つたが、收穫と云ふのはそのことではない。多數の聴衆を前にして、冷靜を保ちながら演説が出来ることを實證された喜びがそれなのである。私の聲はよく通つた。狭い兵營の講堂では、聴衆は私の演説が聞きにくいために理解出来ぬと云ふ者は一人もゐなかつた。こゝに私は一つの武器として、私の演説の才能が證明されたと云ふ事實を、心から喜ばずには居れなかつたのだ。

私の途は拓きかけた。命ぜられた聯隊へ赴任してからの私の仕事は、非常に仕甲斐のあるものだ。何故なれば、軍隊こそは私の心の中に組立てられた組織に最も近いものであつたし、そこには數千の熱心な聴衆が常に存在したからである。私はそこで何回となく演説をした。そしてドイツ人の兵士の心に祖國を蘇らせ、幾百幾千の人間をその祖國と國民に復歸せしめることに成功したからである。私はこの軍隊を國民化し、訓練を強化することに全力を注いだ。この動機が後に新運動の中心人

物となり得た幾多の同志を、私に與へて呉れることになつたのである。――

七 番 目 の 黨 員 證

或る日私は本部から「ドイツ労働黨」と云ふ政治結社の背後關係を調査するやうに命ぜられた。その晩そこでゴットフリード・フェダーが演説をすることになつて居り、差當りその晩は彼の演説を筆記して來ることであつた。そこで私はミュンヘンの裏街にある家の一室へ出かけて行つた。この部屋こそはその後の我々にとつて歴史的な重大意義を持つところとなつたものであるが、この夜は二十人ばかりの、大方は下階階級に屬する人達が集まつてゐた。斯うした結社といふには餘りに小さ過ぎる結社は、當時の社會不安に對抗する意味で隨所に生れてはゐたが、その何れもが組織的な頭を缺いたブルジョア階級固有のやり方なので、成功を収めたり成長したりする可能性は殆んどなかつた。私は何の感銘も受けずフェダーの講演を聞き終つた。そして歸らうとすると自由討論が始まつたので暫くそれを聞いてゐた。一人がフェダーに食つてかゝつて、バヴアリアはプロシヤから分離すべきのみでなく、オーストリアに合併さるべきであると主張し出した。これは私として聞き捨てならぬことだつ

たので、フエダーに代つて私がこの男に一矢を酬ひると、意久地なくもコソ／＼と歸つて行つた。残つた人々は私の演説を聞いて驚いたやうな顔をしてゐた。このことが終つて歸らうとすると、一人の男が駆け寄つて來て「是非これを讀んで頂きたい」と云つて一冊のパンフレットを手渡した。

當時私は歩兵第二聯隊の兵舎内で起居してゐた。と云つても、大抵は小銃第四十一聯隊や集會や講演等に出かけてばかりゐるので、そこはたゞ寢に歸るだけの部屋に過ぎなかつた。その部屋で翌朝私は手渡されたパンフレットを讀んでみた。それは「政治の眼覺め」と題するものであつて、一勞働者が、マルクス主義の迷路と勞働組合の綱領の中で、足掻きながら成長して來た過程を書いたものであつた。そしてその経路は、私のウィーン時代に於ける経験を想ひ起させるだけのものは持つてゐた。

ところがそれから一週間ばかり経つた日、一通の葉書が舞ひ込んだ。見ると鹽々しく「貴下をドイツ勞働黨の一員として入會を認める」と書いてあつて、尙これに就て何等かの意見があれば聞かせて欲しいと斷り書がしてあつた。私は思はず苦笑した。何故なら私はどんな黨から勧誘を受けても、それに加盟する氣はなかつたからだ。私は私だけで一黨を樹立しなければならぬと決意してゐた。

水曜日の晩に委員會があるといふ通知だつたので、私は手紙でなんか斷るよりも、行つて口頭で斷

つた方がよろしいと思つて出かけて行つた。会場たるアルテ。ローゼンバットの料理店では、半ば壊れかけた薄暗い瓦斯ランプの下で、四人の青年がテーブルを圍んで待つてゐた。私が行くとその中の一人が立上つて、新黨員たる私に親愛の情をこめた挨拶をした。この男が例のパンフレットの著者だつたのである。「全國委員長」の名はハーラーと云ひ、私が行つてから間もなくそこへ姿を現はれた。ミュンヘン區の委員長はアントン・ドレクスラーと云ふ青年であつた。

顔が揃ふと會議が始まつた。先づこの前の集會の議事録を読み上げてそれを承認し、續いて會計報告があつた。それに依ると黨の全財産は何と七マルク五十ペニツヒ（約三圓五十錢）しかなかつた。それから各地から來た手紙（と云つても三本であるが）を朗々と読み上げ、各人が暫らくその手紙に對して討論した上、何れも回答を出すことに決定した。

私はその事々しい様子を見ながら、初めは吹き出したくなつた。どんな角度から見ても、ドイツ労働黨などよいふ堂々たるものではない。そこらにザラにある貧弱なクラブの一種に過ぎない。このクラブへ私を入會させやうと云ふのか。

それらが濟むと今度は新黨員たる私への討議が始まつた。そこで私は色々質問して見たが、黨とし

て持つてゐるものは原則だけで、その他にはまだ何の計畫も、黨員名簿も、リーフレットも、いやゴム印すらも持つてゐないことが分つた。

しかし私は最早笑ふことが出来なかつた。この貧弱極まる黨の姿は、そのまゝ現在のドイツ人の憎みを象徴してゐるやうに思へて來たからである。組織や數は如何様ともあれ、この人々の結合は祖國ドイツのために盡さうとする大きな熱意から出發してゐるものには間違ひなかつた。そこで私はタイプライターで打たれた黨の主張を大急ぎで読み通した。そこには智識を所有してそれを驅使しやうとする大乗的な欲求は見當らなかつたけれども、何等かの智識を欲求する熱が躍動してゐた。切實に何ものかを求める肉心的な力が強く感じられた。

考へてみれば私も、煎じつめればこの人達と同様な考への下に、既成政黨とは違つた、全然新しい生命を盛つた新黨の誕生をのみ思ひつゞけて來てゐたのである。

皆と別れて兵營へ歸つてからも、歸つて後の二三日中も、私は常にこのドイツ勞働黨に加盟すべきか否かに就て思ひ煩つた。これは非常に決心のつきにくい問題であつた。屢々述べた通り私は、如何なる黨にも加盟しないと云ふ斷乎たる決意を持つてゐた。従つて私の理性は頑強にこの黨に入會する

ことを拒絶した。しかしその反對に感情は、不思議とこの黨へ引きつけられるのである。

私は一度斯うと決心した以上は、その後、於て絶対に變更をしない人間である。従つて私の決心は常に確乎たるものでなければならなかつた。即ち私はこの黨に加入するか否かを私の永久の問題として決しなければならなかつた。それだけに私の考慮は他人の想像以上に眞剣だつたのである。

兎角する中、ドイツ勞働黨のやうな、こんな小さな黨なれば、自分の思ひのまゝに料理出來るといふことを考へ始めた。舊來の政黨からは何物をも期待出來ぬ。しかしこんな小さなものからでも、國民を更生させる新運動を起し得ぬと誰が斷言出來る。必要なのは、新しい世界觀と、人を動かす得るスローガンである。

こゝまで考へは進んだけれども尙未だ決心がつきかねた。

この黨に入り、この黨を自分の思ふまゝに作り上げることが出來るとしても、それ以上の何が私に出來るであらうといふことを考へたからである。何よりも先づ私が無名の一軍人であり、私一個の生死は私の周圍に何の痛痒をも感ぜしめはしない。つまりは生きやうが死なうが、誰も問題にしないところの平凡な人間である。のみならず私にはこれぞと云ふ學問がない。知識階級の間共は、小學校

をもロクに卒つてゐない私などの云ふことを、頭ごなしに輕蔑してかゝつてゐる。このことも私を躊躇させる一つの原因となつてゐた。

斯うしてその後二日間私は苦しい程に迄考へつゞけた。しかしその結果確乎たる決心を握ることが出来たのである。これは私の生涯を決定するであらう一大決心であつた。しかし一旦決まつた限り最早再考の餘地はない。

私は決然としてドイツ労働黨に入黨することを申出た。そして私の手には、記念すべき「第七人目の假黨員證」が手渡されたのであつた。

ドイツ帝國の瓦壞

ドイツ帝國が瓦壞した原因に就て、大部分の人々は、それが經濟的な行詰りから來たものであると信じてゐる。だからして、ドイツの復活は、經濟的な手段が奏効しない限り駄目だと思ひ込んでゐる。

これは飛んでもない誤りである。眞にドイツを救済するために經濟が持つ役割は第二義、第三義的

なものであるに過ぎぬ。最も必要なものはドイツ民族自身の熱血と道徳との中にあることを知らなければならぬ。

ドイツ民族の現在の不幸は、大戦に於ける敗北がその原因であると説くものがある。而るにこの同じ連中は別の舌で、若しドイツが戦争に勝つたとしても、その利益に預かる者は「資本家」ばかりで労働者や一般國民には何のお蔭もありはしないと觸れ廻してゐる。更にまたドイツの軍國主義は、所詮この國が大敗を喫しない限り叩き潰すことは出来ないといふ出来ないと叫んだのもこの連中であつた。そうして、革命のみが、ドイツ軍から勝利の旗を奪ひとる革命のみが、ドイツ國民を救済する唯一の方法であるかの様に思ひ込ませたのだ。

果してこの革命がドイツ國民を救つてゐるか。幸福にしてゐるか。何と云ふ度し難い惡漢共であらう。

ドイツの軍隊の組織並びに統帥力は、恐らく過去に於て如何なる國のそれと雖も比肩出来ない程優秀なものであつた。而もこの軍隊が一敗地に塗れたといふことは何のためであつたか。そこには許すべからざる罪惡行爲が働きかけてゐたからである。

「ユダヤ人並びにその同類たる戰鬪的マルクス主義者共は、祖國の爲に身命を犠牲し、死物狂ひとなつて戦つたところの忠勇なる將兵に非難の束を投げつけた。更にまたドイツ帝國の瓦礫の元凶を喫きつかれないために無數の虚偽と欺惑とを捏造した。而も我等のルーデンドルフ將軍は敗戦の責任者と云ふ汚名の下に、巧みに之等の惡魔共に抹殺されて、遂にドイツの眞の裏切者を摘發する力を奪はれてしまつたのである。」

嘘と云へばこんな大きな嘘はない。嘘つきと云へばユダヤ人程の大嘘つきはない。しかし考へてみるに、これは大衆の心理を實に巧妙に把握し、操縦したものと云へるのである。何となれば、小さな嘘は大衆に勘付かれ易いが、それが大規模であればあるだけ、彼等には最早それを嘘として見破る力が失はれるからである。

ユダヤ人達はこの點を充分に知つてゐた。知つてゐたばかりではない。彼等ユダヤ人そのものからして、既に一個の大きな嘘の集團だつたのである。こゝにドイツ軍の敗北の原因があり、ドイツ帝國瓦礫のダイナマイトが伏せられてゐたのだ。

——これらの二三について、實際的に發き出し、白日下に彼等の醜怪さを示すなれば——

第一が新聞である。新聞の讀者層には、記事そのものを何等の批判もせず鵜呑みにする人達と、いかなる記事にも信を置き得ないといふ段階に達した人々と、批判的に見て之に判斷を下す人々とがある。而して最も廣範な領域を占めてゐるものは、第一の無批判な讀者層である。又新聞が絶對的な支配力を有するのも、この大衆讀者層に對してである。

而るに大戰前のドイツの新聞は、有力なるものゝ殆んどがユダヤ人の經營するところであり、當然そこには彼等の計畫を豫定通りに進行さすための工作が絶間なく續けられてゐた。不幸にしてドイツの指導者はこの事への何等の對策をも持たなかつたのである。それが帝國の瓦礫を招來した見逃すべからざる要因となつてゐたことは、嚴たる事實である。

第二は性と結婚の問題だ。ユダヤ人が世界制覇を遂行する上に於て、常に武器として利用するものに性がある。性の悪用にある。彼等は、破壊せんと目ざす國民に對しては、先づその性本能の誘惑へ手を差し伸べる。

大戰前に於けるドイツの梅毒患者は、全く戰慄的な數に上つた。而も政府は之に對して最早拱手待觀、殆んど爲す所を知らぬ有様であつた。之は云ふまでもなく戀愛の醜用から生れた結果である。安

價な戀愛は、僅少の金錢で街の到る處に轉がつてゐた。性の開放に就て間違つた解釋が擴げられ、開放ではなく放逸が流行した。そのために戀愛道が地に墮ちたのみか、次の時代を擔つて立つべき青年を、精神的にも肉體的にも極端な墮落に導いたのである。

この事實は誰しも氣付いてゐたに違ひない。しかし斯くあらしめたものに就ての考慮は、殆んど拂はれてゐなかつた。一體何が斯うさせたか。今にして考へれば、人々は必ずこの事實の裏に隠されたユダヤ人共の周到な陰謀に心付くに違ひない。

第三は藝術の頹廢である。健全なる國民には健全なる藝術がなくてはならぬ。然るにドイツの藝術家達が取上げたものは何であつたか。それは最も恥づべく、且つ輕蔑すべき未來派藝術ではなかつたか。未來派藝術こそは何物をも人生に貢獻するものではない。それはたゞ人心を頹廢に導くためにのみ生み出され、考案されたものに過ぎぬ。

ユダヤ人の藝術が、得意の宣傳に物を云はせてこれを流行させた魂膽は、云ふまでもなく藝術の方面からドイツ魂の瓦壞へ攻撃を加へたものであつた。そしてそれはマンマと成功したのだ。ドイツの文化はこの會體の知れぬ藝術に惑亂されて、遂にその進歩を止めたのみか、いまわしい墮落の道を

通つたのである。

ドイツ帝國は軍艦一隻建造するために、六千萬マルクの支出を躊躇なく可決したが、永久に記念すべき最高の建築、即ち國會議事堂の建築には、その半額をさへも出し渋つたのである。しかもその内部構造を如何にすべきかと云ふ問題に對して、愚かなる國會議員達は、人造大理石の使用さへも惜んで、漆喰の採用を可決した。之などは明かにドイツ文化の没落を如實に現はしてゐる現象と云はなければならなかつた。

最後にドイツ國軍頽廢の責任を獲かなければならぬ。

大戰前に於けるドイツ帝國の對外對内諸問題を通じて、一貫してゐた態度は、實に優柔不斷の四字に盡きると云つてよかつた。凡てに臆病であつた。それと云ふのも、國民の先頭に立ち、國民を率ひて行くべき責任を持つ議會そのものが、殆んど無能力だつたからである。彼等は戰爭を怖れて極端に之を避けやうとのみ努力した。しかしその努力が反對に、ドイツを大戰に導く力になることを全然心付かなかつたのである。

對ポーランド問題にしても、塞に中途半端なものであつた。アルサス、ローレン問題に對しても同

様である。之等の問題に對して何等徹底的な解決方法を講じ得なかつたために、ポーランドに於てはポーランド人を怒らせたのみか、ロシアをもドイツの敵として持たねばならなくされた。アルサス、ローレン問題に對しても、フランスに決然たる止めを刺すことを怠つたがために、アルサス人に何等の公正な利益を與へることも出来なかつた。何れにしても國會が斯くも無能力であり、臆病であつたと云ふことは、大政黨の黨員中にウエツテルのやうな裏切者や、賣國奴が巢喰つてゐたからに外ならない。

この議會の頽廢が、ドイツ帝國の安危をその双肩に擔ふドイツ軍隊に對して、何等の影響をも與へなかつたと云ふのなれば、まだ我々はその罪を默過出来たかも知れぬ。しかし事實はかゝる國會の風潮は、著るしくドイツ國軍の士氣を衰へさせたのである。

ユダヤ人達は、マルクス主義的民主々義新聞を總動員して、常にドイツの軍國主義が誤つてゐることを叫びつゞけた。これは確かに軍隊の士氣を沮喪せしめるものであつた。絶對的な國民の支持なくして、どうして軍隊ばかりが強くあり得るだらうか。

陸軍のみではなく、この影響は海軍にも大きく現はれてゐた。殊に海軍に於て不可なかつたことは

最高の司令官が完全にこの惡弊の洗禮を受けて了つてゐたことである。ドイツ海軍は常にイギリスで建造中の軍艦と同型のものを作ることに腐心してゐた。しかもドイツのそれは必ず英國の軍艦より一回り小型の物を造つて満足してゐたのである。

斯くてドイツ軍は、ドイツを獨立させるための戦ひに動員された。勇敢に戦つた。その結果は巨大な犠牲のみを残した敗北であつた。茲に於て思ふに、如何なる平和時に於ても、眞に祖國防衛の重責を感ずるなれば、軍隊のみならず、國民の總力を動員して、常に一分の間隙もない防衛陣を作つて置かねばならぬと云ふことだ。

ドイツ國軍の任務

とは云へ、ドイツ國軍はその臟腑まで頽廢し、弱體化したものではなかつた。ユダヤ人共が躍氣となつて、「軍國主義」を攻撃するには、攻撃され得るだけの力を持つてゐたことを物語つてゐる。

當時のドイツが持つてゐた唯一の、而も最大の寶はと云へば、實にドイツ國軍だつたのである。若しもドイツにこの國軍がなかつたか、或は有つても無力に近いものであつたなれば、ヴェルサイユ條

約はあの大戦争を俟つまでもなく、疾の昔にドイツの運命を決定してゐたに違ひない。實にドイツ國並にドイツ國民がその國軍に負ふてゐたものは「あらゆるもの」であつたと云ふも過言ではない。

國軍は、あの無能無氣力の時代に於てすら、國家に忠であり自己の責任を重んずる國民を作ること、に全的な努力を傾けた。滅私奉公の精神を懸命に吹き込んだ。國軍は、眞に國家を救ふものが、イギリス人や、フランス人、支那人、黑人等とお座なりな國際親善などにあるものではなく、ドイツ國民自身の團結と力とにあることを、徹底的に教へたところの國民學校でもあつたのである。

特にドイツ國軍は、ユダヤ的民主主義者の大衆崇拜を否定して、個人の人格を信頼することに力を置いた。このやうにしてドイツは、兎もあれ毎年三十五萬の眞面目な青年を教育し、訓練して來たのであつた。従つて眞のドイツ國軍の任務はその指導精神の中に見出される。そのことは、今日のドイツ軍隊に於ても亦主要なる指導精神たる價值を失はぬものなのである。

優れたるドイツ官吏

序に今一つ、ドイツの持つ偉大なるものとして、我々はドイツ人の官吏を挙げなければならぬ。

ドイツには實に優秀な官吏團があつた。この官吏團の爲した功績と治績とは、正に萬國に誇つて然るべきものである。大戰前に於て、最も組織の行届いた、最も治績の擧つた國はドイツを指して何處にもなかつた。例へば鐵道一つを見ても、何處の國にドイツと肩を並べ得るものがあつたであらうか。政府が健全であり、この官吏團が優秀であり、軍隊が堅固である限り、祖國は無限の發展と躍進とを約束せられる運命にあつた。

然るに、革命は一切之等を瓦礫せしめてしまつた。世界に誇る高度の能率は破壊され、國民の能力は次第に愚劣極まる黨派性へと歪められて行つたのである。

斯かる状態になるまでには、抜くべからざる權威が國家に存在してゐた。それは議會や裁判所などと云ふ外形的な機構から生れたものではなく、カイゼルへの國民の絶對的な信頼、國家の方針に對する國民の廣範圍に亘る信頼が、自ら相寄つて形成した處の魂の產物であつた。

想ふに政府とは、つゞまるところ之を分析すれば、政府それ自身が優秀であるべきこと、國民に對して寸毫の偽りをも持たぬこと、國民の利益の正しき代表者であるべきことを國民が信頼し得ることこの三つを具備することに依つて成立する。三つの中の何れかを缺くものは既に國民の信頼に背くも

のであり、政府そのものゝ弱體を物語るものである。況んや壓制に依つて政府が存在し得る理由はどこを捜しても見當り得る筈がない。

結論として私は、眞の國民生活とは、種族及び民族の自己保存並びに發展の推進力の表現以外の何物でもないことを斷言する。

ナチ運動への進軍

必要^{ひつえう}缺^かくべからざる階級^{かいきふ}

一つの大改革運動^{だいけいかくうんどう}が遂行^{すいこう}される場合には、指導者^{しどうしや}がたと一人^{ひとり}であるにも拘らず、之^{これ}を支持^{しち}し應援^{えいえん}する人々^{ひと々}が數百萬^{すうまん}にも上るといふことが屢々^{しばしば}である。

或る目標^{もくべう}が多數^{たすう}の人々に依つて熱望^{ねつぼう}されて、それが數十年^{すうじゅうねん}或は數百年^{すうひゃくねん}間燃え續けてゐる中、その熱烈^{ねつれつ}な欲求^{よくきう}を誘導^{いどう}して、最後の勝利^{さいごのしょうり}をかち得る方法^{はうはふ}を心得^{こころえ}た一人物^{ひとりぶつ}が、指導者^{しどうしや}として顯起^{けんき}するものである。今ドイツ^{いまドイツ}の現狀^{げんじやう}を政治^{せいざい}の方面^{はつめん}から觀ると、國民大衆^{こくみんだうしやう}が一九一八年^{いちじゅういちにせん}當時^{たうじ}同様^{どうやう}、はつきり二つの派^はに分れてゐることが判る^{はか}。

その一つは所謂知識階級^{しゆしきかいきふ}である。この類^{るい}に屬する人々は、一見^{けん}したところ凡て國家主義者^{こくかしぎしや}のやうに見える。しかしよく／＼解剖^{かいぼう}してみると、彼等^{かれら}の國家主義^{こくかしぎ}は極めて基礎^{きそ}が薄弱^{はくじやく}であり、要素^{ようそ}が稀薄^{きはく}である。何故^{なぜ}かと云ふに、彼等^{かれら}のその觀念^{くわんねん}は知性^{ちせい}即ち頭^{あたま}で獲得^{くわくとく}したものであるからだ。換言^{かんげん}すれば、彼

等が國家主義を支持する唯一の武器は「知性」だけである。知性を敢て蔑視する譯ではない。しかしこの武器は、若し野蠻な力の襲撃を受けたならば全く無力である。嘗ては之等の人々が政治の支配權を握り、國民を指導してゐた時代があつた。しかし現在では最早それは無殘に打壊されて、怯懦と恐怖に戦き乍ら、徒らに野獸的支配者の蹂躪に任せてしまつてゐる。

この少數の知識階級に對して、絶對多數を占める地位のものは、所謂プロレタリア大衆である。マルクス主義者は抜かりなくこゝに眼をつけて、この大衆の力を反國家的に團結させることに、着々効を奏しつゝある。しかし彼等が反國家的であることの問題は暫く措くとして、この階級の中には、ドイツが再興し、ドイツ國民が復活するために、必要缺くべからざるものが含まれてゐることを忘れてはならぬ。

武器か人間か

ドイツ國民の眞の再興のためには、單なる武器以上のものがなければならぬことは、既に一九一八年に於てすら明かな事實であつた。ドイツが敗北し、崩壊に瀕した原因が、武器不足のためではなく

自己保存への精神力を骨抜きにされてゐた結果であることは紛れもない事實である。

ドイツ人を復活させ、ドイツ國家を再興するには、どうしたら優秀なる武器を作り得るかの問題ではなく、如何にしてこの目的にふさわしい國民精神を培養するかの問題にかゝつてゐることは申すまでもない。

幸ひにして望むところのこの國民精神が作り上げられた時は、何れの場合、何れの處に於ても武器によつて解決し得る幾多の方法を見出して進んで行くことが出来る。

人間は武器と結びつくものではない。先づ人間は人間と結びつかなければならぬ。

大衆は戦ふことが出来る。國民の實力を高めるために必要な産業勞働に従ふことも出来れば、又それを拒否することも出来る。更に大衆はこれを支配することも出来る。この力を見逃してはならない。新しいドイツを建設しやうと考へる前に、ドイツの國民的自由の理想のために、先づ何よりもこの大衆を味方に引入れることが肝要である。

如何なる犠牲を拂ふとも

我々は一九一九年に於て、既に我々の運動のために、大衆の國民化を主要なる目的としなければならぬことを知つたのである。

では如何なる技術が必要であるかを見やう。

一、大衆を國家のために奉仕させるには、如何なる社會的犠牲をも大きすぎるなど考へてはならない。

若し大衆が國民としての一致を缺いてゐたなれば、何よりも先づ經濟上に於て、各人の經濟的水準を高めることなど思ひも及ばない筈である。大戰末期に於てドイツの勞働組合は無數のストライキを敢行した。若しこの勇氣を以て、彼等を擯取し、貪慾な利益を掻き集めることばかりに狂奔してゐた雇主から、勞働者の權利を取戻し得てゐたとしたらどうだつたらう。また之等の勞働者が、その勇氣と熱とを以て、祖國の運命を懸念に考へてゐたとしたらどうだつたらう。我々は絶対に敗戦と云ふ最大の不名誉と悲劇とを與へられずに済んだのである。このことを考へれば、新しいドイツが今後の勝

利を得るためには、如何なる經濟的な犠牲を要求されても、決してそれが苦痛である筈はない。よしんば最大の犠牲を要求されても、目的の重要性と比較すれば、實に些々たる問題に過ぎない。

二、大衆の國民教育は、社會改革を行ふて始めて實現出来る。なぜなれば、現在の社會を改革するに非ざれば、國民文化に個人を參與せしめ得るやうな經濟條件の創造が不可能だからである。

三、我々の國家主義的な觀念の一面を、無慈悲な程に、また狂信的にまで大衆に繰返して示すことのみが、唯一の大衆獲得法である。

今日迄に起きた歴史上の重大な變革の跡を辿つて見るがよい。それらの原動力は科學的知識などに立脚するものは殆んどなく、殆んど全部が大衆を一つの方向へ驥り立てた、狂信的な感情であつたことが分る。

由來民衆の見解なるものは、大體に於て感情から成立つてゐるものであつて、理性の領分は極めて狭い。従つて民衆は理論的な中途半端のものに對しては無感覺であるが、暴力には容易に征服される民衆の態度が大體に於て安定してゐるのは、彼等が理性に影響されることが極めて少いからに外ならない。

大衆は強者の勝利を欲す

四、大衆の心を獲得するためには、單にその獲得を目標として戦ふだけではいけない。同時にその敵を攻撃して亡ぼすところまでやらなければならない。

敵を猛烈に攻撃してみせることは、大衆に彼等自身の立場が正しいものであるといふ自信を植えつける。若しこの手段を怠つたなれば、大衆は自己の目的を正しくないとは思はないまでも、目的がはつきりしてゐないやうな氣持にされる。

大衆は云はゞ自然の一斷片たるに過ぎない。従つて大衆の感情は、茲に相反する意見を主張し合つてゐる人々があつたとして、それらの間に握手が成立つたといふやうなことがあつても、仲々この間の事情を理解出来るものではない。彼等は只強い者の勝利か、さもなくば弱い者の滅亡しか欲してゐない。然らざれば弱者を奴隸的に服従させるか否かである。

五、ドイツ人の血液はどこ迄もドイツ人の血液として純化されなければならない。それが爲には、この純化を妨げる唯一の敵であるところの外來的ユダヤ人を、この國から驅逐して了ふ必要がある。

このまゝ之等のユダヤ人を住まはせて置くといふことは、ドイツ人の血を汚す微菌と同居してゐるやうなものである。民族問題は、世界歴史と人類文明の種々相を司る鍵であると思はなければならぬ。

實力は正義なり

我々が取敢ず着手しなければならぬことは、國際主義的亂心に陥つてゐる勞働者達を救ひ出して、彼等の力を、國民經濟機構内に經濟的正義を築き上げる様な運動方面へ参加せしむることである。

このことのための宣傳戦は、ブルジョア階級か大衆階級かの何れか一方へなすべきものである。若し双方に對して宣傳を行ふなれば、元來ブルジョアと大衆との利益は一致してゐないから、そのためどちらか一方に誤解されたり、或はまた自動的に他方から斥けられるやうな結果を招く惧れがあるからである。

ゼスチュアに依るか、それとも言葉によるかの何れを問はず、宣傳の目標が専ら組織なる大衆の感情に訴へる點にある場合は、知識階級の連中からは、俗悪だとか何だとかの惡評を蒙る。しかしなが

ら、若し宣傳から原始的力強い表現が失はれたとしたら、その宣傳は最早廣汎な大衆に徹底する力を失つて了ふものである。

次に我々の運動は、その態度に於ても、内部の機構に於ても、一切反議會主義を標榜するものである。議會の様な多數決制度は嚴平として斥ける。何となれば、若しこの制度を採用することになつたら、指導者は單に多數が決めた意見に従つてそれを執行するだけのロボットに墮するからである。

黨全體の指導者は絶對的に唯一人選ばれた指導者でなくてはならない。一度び指導者として選ばれたものは、だから如何なることにも全責任を負つて命令する。彼は、自分の次に位する幹部を任命する。その幹部は更にその下に所屬する處の集團幹部を任命する。斯様にして一切の幹部並びに役員は常に上から選ばれなければならぬ。

然しながら、指導者にしてその資格を缺くものがある場合は、之を糾弾することも自由であり、指導者をその地位から放逐することも亦自由である。そしてその後へ新しい指導者が選ばれる。

何故斯くの如き機構を採用するかと云ふに、斯かる絶對的な指導權を確實に把握し、運用出來得る者は英雄以外にはないからである。すべて人類の進歩は斯かる英雄の天才と、個人の精力とに依るも

のであつて、多數の力に爲るものである。

斯くの通り我々の運動は斷じて反議會主義的である。若しも我々が議會に參與することがあつたらそれはその議會を叩き潰す必要がある時のみに限られてゐる。

さて我々が實現のために戦はねばならぬと思ひ、且つ戦ひつゝある觀念を、實際的に展開させるには、大體次のやうな方法に従ふべきである。

一人の人間の頭に、ドイツを新生させる大きな理想が組み立てられ、それを全人類に傳達させるやう神の指令を受けたと感じたなれば、先づ彼は自分の理想を人々に説くことから始める。そしてその理想の説を肯定する人々を徐々に集めて行く。これが理想的な方法である。

次第にこの同志が増加するに従つて、彼は最早一人で以てその多數の各人を一々指導して行くことは不可能となる。そこで、凡ての組織が有するところの愚弊を生ずる惧れはあるが、兎も角局部的な仕事をするための單位を作らなければならない。但し運動の統一を確實に把持するためには、設立者の權威が最早絶對的なりといふ見究めがつくまでは、この下層組織を許すことは差控ふべきである。次に一つの運動にとつてその誕生の地を持つといふことは、大衆に取つて大きな魔力を發揮する。

例へばマホメツト教に於けるメツカや、キリスト教に於けるローマの如く、我々の運動にもその激熾の地を持つ事は極めて重要事である。この意味からして、ミュンヘンこそ我々のメツカとし、ローマとしなければならない土地である。

地方に於て我々の運動の集團を作るといふことは勿論爲さねばならぬことである。しかしそれは先づミュンヘンに於ける集團が確乎たるものとなり、地方に對して無條件的指導力を具へるやうになつてからのことである。

集團を多數に作るには多數の集團指導者を要する。之の養成は緊切な問題であるが、黨から充分なる資金を供して、之をするだけの力をまだ持つてゐない。従つて初めの中だけは給與を受けないでもやると云ふ名譽的な指導者に依存して、運動を開始しなければならぬ。

譽れの傷痕

誤つては不可ないことは——我々の運動と相似點を多く持つ他の運動と合體したなれば、それだけ黨の勢力が増大するだらうとなす考へ方である。之は大きな誤謬である。量が大きくなることは、必

すしも實を増加せしめることにはならない。寧ろかゝる合流は、自然の法則によつて、黨の凡てを弱
化せしめるものと思ふべきである。

確乎たる大理想を持つた強力な組織の偉大性といふものは、絶對的な、宗教的狂信に依存してゐる
と見てよい。之れは眞に強い力である。能くまで自分自身の正しさを確信し、他の何物をも恃む處な
く、ぐんぐん自己を他のすべてへ押しつけて行く怖ろしい力を持つてゐる。

我々の反對者が、我々のこの運動に對して如何なる敵意を示して來やうと、そんなものを怖れては
ならぬ。かゝる敵意が強ければ強い程、我々自身の存在が正當なものであることを證明して呉れるか
らである。寧ろ我々はかゝる敵意や憎惡を手に唾して期待すべきであらう。

ユダヤ人の新聞等が、筆を揃へて侮辱したり、誹謗して來ないやうな人物は、眞のドイツ人でもな
ければ、眞のナチ黨員でもない。ユダヤ人の我々に加へる痛罵や虚構は、ナチ黨闘士の身體に刻まれ
たる譽の傷痕だと思へ。ユダヤ人から極端に憎まれたり目標とされたりする人物こそ、眞に我々の友
人である。若し今朝の新聞を見て、その中からこの名譽の傷痕を受け得なかつたら、その人は前日に
於て有益な生き方をしなかつたものと思ふべきである。

以上が大體我黨の原則である。この原則が我々の運動に従事する人々の胸に、精神に、深く深く喰ひ入つたならば、最早我々の運動は絶對無敵のものとなるであらう。

六 人の聴衆

我々の運動が開始された當初に於て、最も我々に苦痛を與へたものは、我々が無名であると云ふことだつた。

場合に依つては一人の辯士の演説に、聴衆僅か六人といふやうなことも珍しくはなかつた。この時代には、我々の内輪同士に於てさへ、將來への確固たる信念を喚び起し、且つそれを持續させることは容易な努力ではなかつた。

黨員僅かに七人！ そのどれを見ても若く、貧しく、無名であつた。しかもこの貧し過ぎる程貧しい同志が計畫してゐたことは、嘗ての大政黨ですら失敗したところの、大ドイツ帝國の再建と云ふことだつたのである。七人の青年が、この大目的のためにミュンヘンの一隅で議論し合つてゐる圖を想像して貰ひたい。とまれ我々は餘りに無名であり過ぎた。我々は認められるよりも先に、誰か一人

でも我々を攻撃してくれたら、否嘲笑してくれたら——と希望せざるを得なかつた。それ程にも我々の運動は人々の注意を惹かなかつた。

私がこの運動に参加した時には、黨らしい何一つの用意も設備も持ち合せてゐなかつた。仲間と、その限られた友人關係以外には、そんな黨が存在することなど誰一人として知らなかつた。しなしそれがために沮喪して了ふやうなことは決してなかつた。我々は毎水曜日を委員會日として、小さなカフェーを會合場所にし、そこで討論や講義に熱中したものである。

何としても我々は新しい黨員を獲得しなければならなかつた。その目的で毎月一回——後には二週間——一回づつ「集會」を開くことにしたが、その集會のための招待状も、タイプライターで打つたり或はペンで書いたりして、極めて少數の黨員が自分達の知人關係へ撒くだけであつた。そして今度の集會に来て貰へなかつたら、その次の集會には是非來てほしいなど、一人でも出席者を多く得やうと苦心した。

最初の集會の日のことは永久に忘れ得ぬ感慨を覚えさゝれる。その日の集會のために、私自身が八十枚の案内ビラを配つて歩いた。そしてその夜私達は非常な期待の下に、來會者の一人でも多からむ

ことを願つたのであつた。しかし所定の時間より一時間も延長して待つたが、遂に一人の來場者もなく、我々は依然七人の黨員のみで以て集會を開かねばならなかつたのである。この七人とともに、もう可なり古顔の七人であつたが――。

その後間もなく、我々はミュンヘンの或る印刷屋で多少のビラを印刷出来るやうになつた。そしてそのお陰で來會者も十一人から十三人に増し、更に十七人、二十三人、三十四人と云ふ工合に次第にその數を加へるやうになつた。

これに勢ひを得て、今度は各自がポケットマネーを出し合ひ、或る日「ミュニツヒナー・ペオバハター紙」に集會の新聞廣告を出して見た。結果如何にと當日を待つた。會場はホーフブラウハウス。ケルレルと云ふ百三十人も入つたら満員になるやうな小さなところであつた。しかしその時の私にはこの會場が途方もなく廣い様に思はれ、連も満員となるやうな盛況は望めまいと思つてゐた。

最初の公開演説

ところが、七時になつて開會を宣する時には、實に百十一人も聴衆がこの室に充満したのであつ

た。私はこの異常な成功に驚喜した。

當日の中心的な演説は「ミュンヘン」の教授が行つた。私の順番は二番目であつた。私は緊張した何となれば、この演説こそ臍の緒切つて以來始めての公開演説だつたからである。黨の議長だつたハーラー君は、私が演説すると云ふことを非常な冒險だと考へてゐた。彼はヒットラーは他のことなれば何でも出来るが、演説だけは駄目だと思ひ込んでゐた。そしてこの意見はその後にも相當長く變へやうとしなかつた。

しかし私は割當てられた二十分間のために演壇に立つた。私は豫定の時間よりも多く三十分間を懸命に饒舌つた。この演説は私自身に一つの大きな自信を持たせてくれることになつた。何となれば、私の演説が終つた時、聴衆は電氣に撃たれたやうになつてゐたからだ。そして私が我々の運動のために寄附金を求めると、忽ち三百マルクの金が集まつたのである。この金はその後どんなに我々のために役立つたか知れない。斯うして私は、私自身ですら多少危ふんでゐた「演説が出来るかどうか」と云ふ疑惑を、一夜の中に吹き拂ふことに成功したのである。

こゝで少し同志のことを云ふなれば、はじめて國民議長らしい議長となつたハーラー君はデヤーナ

リストであつた。しかし嘗て大衆に向つて演説した経験もなければ、また出来もしなかつた。ミュンヘン集團の議長ドレクスラーは一介の勞働者であつて、演説などは到底なし得るものではなかつた。その上彼は軍人でもなく、戦争中と雖も一度も軍服を着たことがない。結局その事實を裏書きするやうに、性質そのものが弱々しく、優柔不斷に屬するタイプの男であつた。

見渡したところ、この黨員の中には、我々の究極に於ける成功を、熱狂的に信じ且つ實行に移せるだけの素質を持つてゐる男は、一人として見當らなかつた。また我々の運動に對して、その行手に立ち塞がる者を、暴力を以てしてもねぢ倒そうとする力を持つ者もゐなかつた。運動の目的が容易ならざるものであるから、この仕事には、精神的にも肉體的にも、獵犬の如く敏捷で、革の如く強靱に、鋼の如く硬い純粹なドイツ軍人の長所を備へた人間のみが適してゐた。

我々は武裝せねばならぬ

私自身はその當時もまだ軍人であつた。そればかりでなく、私の性格と運動に對する熱意は「それは誰がやつても出来ない」とか「これは怖らく成功すまい」とか「そんな冒險をしてはならない」と

か「それは餘りに危険過ぎる」といふやうな退嬰的な言葉や考へをまるで忘れてしまつてゐた。このことそれ自身が非常に危険だつたのである。こんな考へはブルジョア連中のクラブでは、或は安全であつたかも知れないが、一九二〇年當時のドイツに於ては、私のやうに遮二無二大衆に訴へて、國家主義の旗を振り廻はすものは、例外なく共產主義者のいゝ目標にされ、十中の十まで彼等のために粉砕されるのがオチだつたからである。

我々の目的は、繰返すまでもなくユダヤ人や、マルクス主義者や更に株式取引所などに利用されてゐるドイツ大衆を、我々の手元に取り戻すことから始められなければならない。それは當然之等の民衆の裏切者達にとつては憎惡の的たらざるを得ない。彼等は「ドイツ労働黨」といふ名を聞いただけで、その中に無数の「挑戦」を感じたに相違ない。茲に於て我々とマルクス主義者達との正面衝突は當然避け得べからざるものとなつたのである。

宿命的に避け得られざるこの闘争に對して、我々の内部に危惧の念を抱く者が出て來た。

若し我々の最初の集會が、今を時めく共產主義者共の妨害に會つて粉碎されたら、我々の運動がそれと同時に潰滅の運命を辿るであらうといふことを想像すれば、この危惧は當然であつたかも知れな

い。しかしそのことを怖れてゐて何が出来ると云ふのか。私は私の意見として、我々は斷じてこの難境を回避してはならぬ、寧ろ進んで之に體當りを食すべきである、そのためには先づ我々を武装しなければならぬ、といふことを極力主張したのであつた。主義や精神だけで暴力主義を破ることは出来ない。しかしテロリズムによつてテロリズムを破ることは可能であると信じたからである。

我々の最初の集會は案ずるより生むが易くまんまと成功した。この勢ひは第二回の集會をも亦成功に導いた。我々はその日百三十人の聴衆を獲得した。そして四人の紳士がプレスト・リトヴスク（大戦中、敗れたロシアがドイツと結んだ媾和條約）とヴェルサイユ條約に關して交々熱辯を振つた。その後を受けて私は約一時間演説したのであつたが、これは前回よりも遙かに成功した。私のこの演説に對しては、果して共產主義者の妨害組が五六人先づ攪亂を企て始めたが、それを見るや私達の同志は、いち早く之等の攪亂者を階下へ突き落して頭を割つてしまつた。

二週間後、更に私達は第三回の集會を開いた。今度は百七十人の聴衆が押し寄せた。そしてそこでも亦私は一場の演説を行つたが、一回一回とその成功は強く私の心に感じられた。

國民社會主義ドイツ労働黨生る

斯様にして我々の集會は次第に成功を収めたので、私はもつと廣い會場を物色すべきことを提議した。そして市の反對側の「ドイツチエライヒ」を會場とすることになつたのである。そこで開いた第一回の大會には百四十人の聴衆しか吸收出来なかつた。このことは、黨内の永遠の懷疑派諸君に小首をかしげさせた。彼等は斯う度々大會を開くといふことは考へなければならぬと云ひ出した。然し私は眞正面からこの説に反對した。七十萬の人口を有するミュンヘンが、二週間に一度の集會に堪へられぬと云ふやうな馬鹿な話はない。二週間に一度どころか、一週間に十日でも立派に受入れ得る餘地があると主張したのである。

果して私のこの説は證明された。その次に開かれた集會には二百人の聴衆が集まつたのみか、相當巨額の淨財さへも寄せられたのである。

次の二週間目には四百人以上の人々が來聽した。

斯くて一九一九年から二〇年へかけての我々の闘争は、この運動を愈々強化し、山をも動かし得る

熱狂にまで高めるための、永いそして血の滲むやうな苦闘であつた。その結果愈々この運動も、もつと組織立つた内部機構を必要とするところまで漕ぎつけて來た。そして先づ黨の名稱からして、もつと大規模な、大家の心に強い印象を與へるものにしなければならぬといふ見地から、その取り決めをすることになつた。名稱やスローガンに就ては、時には馬鹿氣てゐると思はれるやうな議論が戰はされたこともあるが、結局激しい論争の末決定的な計畫が樹てられることになつた。

我々は我々の「國家主義」を標榜するために「人民的」といふ言葉を取り上げることだけは極力避けるやうにした。既にこの言葉は意志薄弱なブルジョア國家主義者のために使用されて、墮落した氣分を多分に帯びてゐたからである。要するに「人民的」などは、強力な我々の運動の鞏固な土臺とするには餘りにも弱々しく、且つ漠然としてゐることも原因であつたのみならず、この言葉には種々の解釋が下される弱身があつた。強い團結を以て一つの政治運動を爲し遂げやうとする者にとつては、斯様な勝手な解釋の下されるやうな名稱は禁物である。

そこで我々は、氣の抜けた國家主義者共への威嚇をも含めて、矢張り「黨」たることを表明し「國民社會主義ドイツ勞動黨」といふ名を以て、我々の運動を象徴することに決定した。古いものに執着

する人間共はこの「國民社會主義」の名に依つて驅逐されるであらうし、「ドイツ勞働黨」の稱號は、それが何であらうと「知的」な劍ばかりを振りまわしたがる灰色の國家主義者を排撃する意味を含めてゐたのである。

火は點ぜられたり

我々の名稱は既に決定した。スローガンも出來た。そこで私は一九二〇年の初めに、この機會を以て、最初の民衆大會を開催すべきであるとすゝめた。或る者は、まだ時期尙早だと云つた。しかし我等の敵である赤色新聞は、既にそろ／＼我々に氣を取られ始めてゐた。このことは我々を喜ばせもすれば勇氣付けもした。最早我々は他黨の集會で論議される時期に入りかけてゐたのだ。我々は次第に有名になりかけてゐた。この機運を擲んで赤色陣營から大衆を奪ふためには、是非民衆大會が必要であると信じた。従つて私は強硬にこの意見を固執して譲らなかつた。

最初からの指導者であつたハーラー君は、大衆大會を開催する時期が既に來てゐると云ふ私の意見に賛成することが出來なかつた。そのため善良で正直であつた彼は、その地位を退いてしまつた。そ

の後に、アントン・ドレクスラーが据はることになった。

こんな経緯の後、遂に問題の第一回大衆大會は、一九二〇年二月二十四日に開催することに決定されたのである。

準備に取掛つた。私はこの準備の凡てを指揮した。先づあらゆる問題に對する我々の態度を、迅速に決定する能力を養ふことに全力を盡した。我々は二十四時間以内に、重要な時事問題に對する我々の立場を略述しなければならぬと考へた。この國民的行動に關聯した大會の報告は、リーフレットやポスターとして出すことにした。このポスターやリーフレットでは、特に重要な二三の點を繰返してそれに依つて大衆に強い影響を與へねばならぬといふところに重點を置いた。

それから黨を象徵する色として「赤色」を選んだ。赤い色は極めて煽動的であるのみならず、我々の敵たる赤色分子に對して確實に憤慨させる作用が極めて著るしからうと思つたからである。大會前の系統立つた宣傳は勿論手抜きなくやつたが、それと共に當日のプログラムの主要な項目を印刷しておく必要もあつた。これは我々の運動の形式と實體と目的とを、大衆に明瞭に知らしめるには大事な武器である。

私はこの時代に於て、ドイツの再建を目ざす幾十の新運動が生れ、且つそれらが他からの、或は自らの力で消滅して了つたことを知つてゐる。只一つそれらの中で残つたのが我が國民社會主義ドイツ労働黨である。私は最早我黨が如何なる挑戦にも堪へ得ること、黨を恐怖させるために諸々の合法非合法の手段が加へられるに違ひないこと、小心翼翼たる大臣共は我々の著述や言論を抑制したり禁止するやうな態度に出るかもしれないこと、しかし如何なる力も、手段も、方法も斷じて我々の理想の勝利を妨害し得るものではないといふことを、以前にも増て強く固く信ずるやうになつて來てゐた。愈々當日となつた。流石に躍る心を制御出來なかつた。遂に大衆大會の幕は開かれるのであるが、果してあの廣い會場に相應はしいだけの聴衆を惹きつけることが出来るであらうか。このことが何と云つても大きな心配であつた。あの廣い會場が満員になつたら、それこそ黨の前途に祝福の盃があげられることになる。

大會は午後七時三十分から開かれることになつてゐた。私はその十五分前にホーフブラウハウスの宴會場へ行つてみた。おゝ何と云ふ素晴らしい群衆だ。廣い——と當時の私には思はれた——會場には二千餘りの聴衆がギツシリ詰つてゐた。そればかりではなく、その聴衆の半分は、日頃我々が接

近の機会を待ちあぐねてゐた人々、即ち共產主義者と獨立社會黨の連中が占めてゐたのだ。私の心臓は喜びにはちきれそうになつた。彼等は勿論機先を制して、我々のこの大衆大會を粉碎する積りで出かけて來てゐたのだ。

私はプログラムの第二番目であつた。演壇に立つて演説を始めると、早連之等の妨害者共から猛烈な攪亂の叫聲が起きて來た。それに續いて起きたものは、我々の同志と彼等との間の激しい格闘であつた。暫くの後には、場内から妨害者共の怒號は消えて、平靜に戻つた。私はそれを待つて豫定通り演説を續けて行つた。半時間の後には先程の叫聲に代つて、盛んな喝采が場内を占領するやうになつてゐた。

私は總て黨の説明に取りかゝつた。最早妨害は殆んど聞えなかつた。最後に私は聴衆に二十五項目の黨綱綱領を示して、その一つ一つに判斷を求めた。一項目が決定される毎に喝采の音は増し、遂に熱狂裡に全項目が満場一致の支持を受けて承認された時、私はこの大聴衆の胸裡に、今迄彼等が感じてゐなかつた新しい確信、新しい意志、新しい信念が湧き起り、不知不識の間にお互が結び合はされてゐることを明かに目撃することが出來たのである。

大衆大會は約四時間にして終つた。人々が昂奮した眼を輝かせながら退場するのを見て、私は我々の運動の原則が、今こそ強くドイツ民衆の中に入り込んで、確實にその根を下したことを感じた。あゝ火は遂に點ぜられた。我々の運動の本格的な進軍は、この日この時を以て遂に開始されたのである。

國家とは

三つの國家觀念

急々軌道に乗つて眞個の活動が開始された我々の運動は、しかし、疲弊しきつたブルジョア社會からは、我々が現在の國家に敵對してゐるもののだとして、相當激しい非難を受けたのである。けれども彼等の頭の中に、果して國家と云ふものゝ正しい觀念が藏されてゐたかどうか。否彼等は只漠然と國家なるものを考へてゐるだけで、既に當時のドイツには、嚴密な意味に於ける「國家」は存在してゐないと云ふ事實をテンで考へて見やうともしなかつたのだ。

「國家」なるものに就ては數個の相違した見方がある。しかしその何れもが、倫理的、道德的な層を包含してゐるものである。大體之等の國家觀を分類してみると、次の三つの集團に區分することが出来る。

一、國家を簡單に、民族が一つの政府の下に、多少自發的に集まつた團體である、と考へるもの。

何と云つても、この考へを持つ集團が最も大きい。この考へを持つ人々は、國家の法律と云ふものを絶對的に尊敬し、法律それ自身が非常に神聖なものであると思ひ込んでゐる。法律が手段であつて目的ではないことなどは全然氣がつかない。従つて彼等は恰も犬がその主人を崇拜する如くに國家を崇拜してゐる。そして國家そのものは、常に秩序の維持と平和とを重んずべきものであると思ひ込んでゐるのである。

二、第二の集團は前者よりは遙かに小さい。この人々は國家の存在に對して若干の條件をつけやうとする。即ち彼等は國家に常に同じ行政方法と、定まつた國語とを要求してゐる。時には單に行政方法の機械的な完成のためのみに、それを希望することもある。

この集團の主たる代表者は、ドイツのブルジョア階級である。彼等は國家の權威なるものが、國家の唯一の目的ではなく、その治下にある人民の安寧を重んずるのが第一目的であると考へる。而してこのことを妥當ならしめるために「自由」の思想を取り入れる。しかし斯かる思想の大部分は誤りである。彼等は政府並に國家を正しく理解することよりも、自分達の方便から勝手に検討を加へやうとする。つまりもつと具體的に云へば、國家は彼等の經濟的な必要を満たし得るか否かに依つて秤量さ

れるのである。

三、第三の集團は最も小さい。この集團の人々は、國家とは、政治的勢力といふ漠然たる憧憬を實現させるための一つの機關だと考へるのである。彼等は國家とは、多數の民衆が一つの國語を話してゐるために、それによつて結合された團體であるかのやうに思つてゐる。

これは云ふまでもなく愚な考へ方である。嘗て舊オーストリア帝國が國內統一の目的で、オーストリア・スラブ系の人々にもドイツ語を話させやうとしたことを思ひ出す。これは一應考へつきさうなことではあるが、少し落着いて考察すれば、必ず徒勞に終る政策であつたことが判る筈であつた。單に異つた民族にその國の國語を使用させることに依つて統一が齎されるものなれば、支那人や黒人にドイツ語を使用させても彼等をドイツ人に出来る道理である。こんな判り切つた不可能を敢て行ふなれば、それは只徒らにドイツ民族の血を混淆させることになり、ドイツ分子の破壊を招來する以外の何物をも得られはしない。

民族の保護者

以上の三つの國家觀念を検討するに、そこに共通的な一つの大きなものを見落してゐることが直ちに看取されるのである。即ち「文化並びに人類にとつて價值あるところのあらゆるものを創造する偉大な力は、實に民族そのものに基くものである」といふことを見逃してゐる點がそれだ。國家は何事を措いても、先づその民族の目的をハッキリさせ、且つ之を非常に重視せねばならぬものだ、といふことを忘れてゐる。

この意味から云つて、民族的人生觀に基いた新しい政治運動の第一の義務は「國家は民族の保護者でなければならぬ」ことであり、且つ之を明白に理解されねばならぬことである。

文化が國家に依つて創造されてゐるなどと思ふことは大きな誤りである。國家は單に、そして常に文化を創造する民族のお役に立ち、同時に之を保護し得る立場のものに過ぎないのだ。従つて民族の生存と、その開發的な生活の確立とに全力を傾け得る國家のみが、勝利國家、成功國家たるの榮譽を勝ち得るのである。

我々は往々にして、紀元前のドイツ人が、一介の野蠻民族に過ぎなかつたといふ説を聞かされる。然しこれは許すべからざる暴言である。我々の祖先は決して文化のない民族ではなかつた。たゞ北歐のやうな生活環境の極めて困難な地に住まはざるを得なかつたために、その創造性が開化を妨げられてゐたに過ぎない。

若し當時に於てこれ等のドイツ人が、南方のもつと住みよい土地に居住したとしたら、彼等はそこに住ふ劣等な人種の極めて幼稚な道具を持たせても、必ず彼等天賦の創造性を十二分に活躍させてギリシヤ人同様或はそれ以上の燦然たる文化を築き上げて見せたに違ひない。

但し、アリアン民族即ち我々の祖先が、斯くも火花のやうな創造性を持つてゐたといふことが、北歐地方に生活を余儀なくせられた結果だと思つてはならない。その筆法で行つたら、北歐の民族、スエーデンやノルウェーなどのラブランド人も亦同様に素晴らしい創造性を持つてゐなければならぬ理窟になる、しかし今彼等を試みに南方の、恵まれた條件の下に置いて見たところで、文化的には依然としてエスキモーの如く不毛であるに相違ない。

アリアン民族は生れながらにしてこの偉大なる才能を持つてゐるものである。このことを「民族の

保護者」は充分認識してかゝらなければならぬ。

國家は目標への手段

國家は一つの目標への手段である。

國家の唯一の目的は、精神的にも肉體的にも同等なる人々の協同體を維持してやり、且つ之を向上させることより外にない。

若しこの目的を持たなかつたり、或は又目的から外れてゐる國家があつたならば、それは畸形兒的國家であり、不具の國家と云はなければならぬ。

我がナチ黨は、新しい世界觀の保持者である。決して、現存する或るものを容認し、そこに立脚點を求めるやうなことをしてはならない。若し我々がそのやうなものの上に基礎を置いたなれば、我々は最早新世界觀を持つた闘士ではなくなるばかりでなく、反對に現存する事物の奴隸となり果てるであらう。

このやうに、偉大なる國家の偉大なる目的は、新しい文化を創造し、より高い人間の美と優秀性を

建設せんとする民族的な要素を飽くまでも擁護するといふ點にかゝつてゐる。我々はアリアン人として、我々の次の時代を背負つて立つべき人々が、今私の述べたことを了解するに違ひないと確信するものである。

我々は、ドイツ人が如何なる國家を形成されることを要求し、望んでゐるかと言ふ點を慎重に考へなければならなくなつて來てゐる。そして、その最初に於てなすべきことは、先づ何何なる人々を結合させるかの問題である。ドイツの血の中には、既にユダヤ人等によつて多量の毒素が加へられてゐる。そしてその毒素はドイツの精神をも肉體をも腐敗墮落せしめつゝある。一瞥して誰にも知られる如く、ドイツの國內には北歐人も居れば東洋人もゐる。而してそれ等の間には無數の混血兒がゐるのだ。この混然雜然たる血の混亂は、ドイツにとつて數々の不利益を齎すものである。その中の最たるものは、血の不統一から生ずる信賴すべき群衆本能を缺いてしまつてゐることである。

若しも今日までのドイツが、他の若干の國家の如く、國民が誇り得るだけの民族的統一を持続し得てゐたなれば、今頃は疾にドイツが全世界を支配してゐるに違ひなかつた。

國家は強力な武器である

とは云へ私は、全ドイツ人の血が、これ等の毒素に依つて汚されてゐると云ふものではない。幸ひにしてまだ多くの純粹なドイツ人を、我々は同胞として持つてゐる。このことは、我々が全體的に消滅することから運命に依つて救はれてゐるものであり、それなるが故に我々は、これに對して流劍なる研究と評價とを加へなければならぬのである。

とまれドイツ帝國は、一切のドイツ人を抱擁しなければならぬ。そしてその抱擁されたるドイツ民族の中から、最も價值ある要素を集め、これを單に維持するだけに止どまらず、進んで徐々にそして正確に、これを支配的地位にまで高めるやうに努力しなければならぬ。

この見地よりして、國家は、一民族によつて生命のための久遠の戦闘に使用さるべき、偉大にして且つ強力なる武器でなければならぬ。この武器は又民族の共同の意志をも表現してゐるものであるから、民族のすべてはそれに服従しなければならぬものである。

我々は民族の混淆雜種が、必ず優秀な民族性を破壊するものであるといふ自然の法則を、充分に認

識しておく必要がある。更にこの法則は民族全體に於てのみならず、個人に於ても破られてはならないものである。若し之が破られたならば、民族の障壁が徐々に看過される危険率が増大するからである。この禁制が無視されることは、人類の使命の終りを招くものと思はなければならない。

血の純潔

最も神聖な人間の權利、而して最も神聖な人間の義務、それは血の純潔を守るといふことである。殊にドイツに於てはこのことは極力強調されなければならないことだ。

民族國家は、何を措いても先づ血の純潔を保持し、向上させることから出發しなければならない。そのためには結婚を民族的退化の水準から引上げ、主の化身を生むためのものであるといふ工合に調整させることから出發すべきである。

國家の經濟經營が不手際であるために、子供が生れることから經濟的不安を覚え、折角健康な肉體を持つ婦人の多産を制限しなければならぬといふやうなことは寧ろ罪惡である。健康な多數の産兒を得て、それが民族と未來の國民の價値を背負ふことを、國家生活の中心とすることが必要である。幾

十萬の男達が、單なる教會の命令に過ぎないやうなものに依つて強制され、束縛されて、自發的に獨身生活を行つてゐる世界に於て、民族の増殖をこのやうな高いところへ引上げるといふことが不可能であるなどとは考へられない。

勿論この民族の増殖を行ふといふことに對しては、國內の憐れなブルジョア共は必ず不満を表現するに違ひない。彼等は相も變らぬ煮え切らぬ態度で斯う云ふだらう。「それはまことに結構なことである。しかしそれは、怖らく不可能に終るであらう」と。強烈な國家觀念を持たぬブルジョア階級の云ひそうなことである。そして怖らくこのことは、ブルジョア階級自身にとつては不可能であるに違ひない。しかし我々は、こんな階級の連中に何一つ訴へたり、意見を叩いたりする氣持は毛頭持つてゐない。私が叫びかける相手は大衆であり、殊にその中の、春秋に富むドイツ青年諸君に對して特に然りである。

ブルジョアに今日何が出來ると云ふのか。若し今國民をこの荒廢的な惡徳から救ひ且つ解放するために、一大陸が擧げてアルコール征伐の戦ひを開始したとしたらどうだらう。ヨーロッパのブルジョア階級がなし得ることは單に頭を振り、呆然と目を見張、それからこの戦ひに對して皮相的な嘲笑を

始めることぐらいが關の山である。

優れた肉體の育成

次に教育のことに就て考へる。

民族國家の教育方針は、目標を先づ、民族の優れた肉體を育成する點に置くことが大切である。先づ健康だ。知的な教育はそれからでよい。現在の學校教育が行つてゐるより遙かに多くの時間をスポーツのために割いて、次の時代を擔ふべき少年に、健全な肉體を與へてやるといふことが先決問題である。従つて從來の國家主義者達が、野獸的で下等だと評して斥けてゐた拳闘も亦取り上げられてよいばかりか、寧ろその優れた攻撃精神を養ふ上から奨勵して然るべきものである。この勇猛果敢なスポーツは怖らく他の如何なるスポーツも、その熾烈な攻撃精神の點で三舍を避けなければなるまい。健康な若者達が今後の世界に處して行くためには、最も激しい打撃に對しても耐へ得ることを學ばねばならぬ。單なるイデオロギーや理論の塔に單つてゐる「精神的な闘士」とつては、私のこの主張は甚だしく亂暴に見えるかも知れぬ。しかし民族國家は平和の審美家や、身體虛弱者の集團を養成

するやうな仕事には全然關心を持つはゐないのだ。

若しもドイツの知識階級が、洗練された社交作法の代りに拳闘でも教はつてゐたならば、怖らく女街や脱走軍人などの肩書を持つ連中に、おめく革命を斷行させはしなかつたらう。一敗地に塗れた上に、世界中から足蹴にされて、それでも尙甘んじてその屈辱に堪へなければならぬのは、私の指摘する通り、ドイツ民族が自らの力を信ずることに缺けてゐるからである。さればドイツの青年は、その健康を取戻すことに依つて旺盛な闘志を培ひ、再び全ドイツの無敵國家たり得ることを信じるやうな教育方法を施さなければならぬのである。

この目的のために採用すべきは、青年への軍事訓練である。それが第一の目標だ。この軍事訓練によつて、青年に正しい意味の規律を教込まなければならぬ。この訓練は、青年に服従と忍耐と最後の勝利への確信を植へつける。而してその結果之等の青年には二つの卒業證書が與へられる。即ち彼に公的生活を許す公認證と、肉體が結婚に適してゐると云ふことを示す健康保證書とがそれである。

以上と同じ見地からして、民族國家はまた女子をも教育することが出来る。女子の教育の終局の、そして最大の目標は、將來に於て彼女等が母となるためのものでなければならぬ。そのためには矢

張り第一が健康な肉體を作るといふことである。その次が精神の發達であり、最後に知識の教育を施すべきである。

男子にしても女子にしても、民族國家に於ては、個性の發達に努めることは、第二義的なものであると思ふべきだ。

何にしても強い意志と決斷力の訓練、欣然として責任を受け且つ果す精神、これを充二分に養ふことが刻下の急務である。今日ドイツが無力であるのは、武器彈藥が缺乏してゐるためではなく、強い意志が缺けてゐるからである。壓倒的な危險に勇敢に立向つて行くことの重大性に全く認識を缺いてゐるためである。斯の如く、意志の缺乏してゐることが、あらゆる決斷力を妨げてゐる。この依つて來るところは、要するに従來の教育政策が知育にのみ走つた結果に外ならないことを、はつきりと知らなければならぬ。

最初の闘争

ナチ黨は大衆の主人

豫想以上の成功を齎した一九二〇年二月二十四日の民衆大會の反響が、まだ消え去らないうちに、我々は次の大會の準備に取り掛つた。

我々は既に月一二回の小集會以外に、殆んど毎週大會を開き得るところまで進んで來たのである。しかしまだ當時の私達には、大會毎に一抹の不安があつた。それは即ち大衆が我々の望むだけ來るだらうか、そして我々の話に耳を傾けるだらうかと云ふ一種の不安であつた。聽衆が集まつて來さへすれば、私は必ず彼等を私の演説に引きつけ、その心を撃つことが出來るとの確信を持つてゐた。

しかし、會場たるホーフプラウハウスへは、大會毎に多くの聽衆が殺到するやうになつた。ホーフプラウハウスこそは、最早單なる會場ではなく、我々とドイツ民族とのために、最も神聖なる意味を持つ殿堂となりつゝあつたのである。」

最初に「戦争の罪」について、次には平和條約について、その次からはあらゆる重要な事項について、遂次我々の演説は進められたがその都度大衆の数は増加し、熱心に耳を傾けるやうになつた。そして平和條約に關する演説に對しては、會場全體が爆發しさうな昂奮狀態を呈するのが常であつた。聴衆は遂にヴェルサイユ條約の不純と惡辣性とを認識するに至つた。これを知つた私は我々のヴェルサイユ條約に對する憎惡を以て、そこから國民の心に深く喰ひ入つて行かなければならなかつた。國民と同様に我々が、あらゆる角度から見てヴェルサイユ條約を憎み、且つ否定してゐると云ふことを一般に知らしめることは、取りも直さず國民から依頼するに足るナチ黨だと云ふ考へを勝ち得るからである。

大衆は大切である。とは云へ國民の輿論が根本的な問題に於て間違つてゐると思つた時には、私は敢然として之に反對する立場を執るべきであると信じてゐる。と云ふのは、ナチ黨は大衆の奴隷ではないからである。我々は常に大衆の主人であらねばならなかつたからである。

當時私の演壇の前には、いつでも決まつたやうに、私とは全然反對の考へを信じてゐる集團が頑張つてゐた。そのことは私を非常に勇氣づけた。私は彼等の中から、その彼等の持つてゐる考へを引離

し、その古い考への土臺へ、一つ一つ鐵槌を打ち下しては撃碎しつゝ、遂に私の考へにまで、手なづけて来るには、いつもたつぶり二時間の演説を続ける必要があつた。

敵の武裝を解除せよ

斯うした反對者を目標に演説し、それを説き伏せる努力を續けてゐるうちに、私は或る一つの重要なことを感づいたのである。それは先づ攻撃に先立つて、相手の武器たる「反駁」を、いち早く叩き落してかゝることであつた。この必要から従來「ヴェルサイユ條約」として表題をつけてゐた私の演説を「プレスト・リトヴスク條約とヴェルサイユ」と云ふ工合に変更した。何故なれば、私がヴェルサイユ條約について演説して行くに當つて、私の敵共がプレスト・リトヴスク條約について駁論の矢を放つて来る紋切型の言葉を覚えてしまつたからだ。私のヴェルサイユ條約に對する攻撃に對して、彼等はプレスト・リトヴスク條約の或部分を擧げて、私を參らそうと企ててゐることを知つた。そこで私は右の通り表題を變へると共に、彼等の反駁の言葉に就て慎重に考へた末、充分なる「打つて返し」を用意した。

私は右の二つの條約について、一章一章を丹念に比較研究した。そして演説を開始するや、ヴェルサイユ條約が最も殘虐なる非人道的條約なるに反し、ブレスト・リトヴスク條約は如何にロシアに對してドイツが人間的な情味をふんだんに盛り上げてゐるかを一々實例を擧げて之を示した。そうして私の反對者共がリトヴスク條約を擔ぎ出し、反駁して來る途を完全に遮斷して、豫想外の大成功を収めたのである。

私は、ヴェルサイユ條約程「生きてゐる問題」はないと信じた。従つてこの問題に對する私の演説は、集會毎にいつ果てるとも分らぬやうにすら思へたのである。だから私は、この彈劾演説は何度も何度も繰返して行つた。そしてその間に演説の内容を整理し、聴衆の心に、私と同様の考へを力強く叩き込んだのであつた。

斯うして集會毎に演説を繰り返す間に、私は次第に演説のコツなるものを會得するやうになつた。聴衆の心を捉へ、幾千の聴衆を支配するために必要な哀調や身振り等も手に入るやうになつた。

私はまた條約に關する宣傳用のパンフレットをも書いた。そしてそれは印刷に附せられて廣く一般にバラ撒かれた。最初の會合の時にはパンフレットや新聞その他あらゆる宣傳文書がテーブルの上に

溢れてゐるのが目立つてゐた。しかし何と云つても最大の力點は、そうしたペンや活字の力よりも、直接大衆に呼びかける「言葉」そのものにあることは忘れなかつた。

演説者はその舌を劍として、短刀直入に聴衆の心に迫り、之を動かすことが出来る。特に敏感なる演説者は、最初の數分間に於て、この聴衆を捕提するには、如何なる態度が最も有効であるかを正確に知ることが出来るのである。且又その聴衆の如何に依つては、臨機應變に自己の主題の表現をも變へることが出来る。このことは、文筆のよく企て及ぶものではない。

演説の偉大な力

聴衆は常に非常に氣まぐれなものである。同じ演説を、同じ演説者がやるにしても、午前十時と、午後三時と、宵の口とでは、その効果に非常な違ひを生ずるやうなことが屢々ある。このことは私自身でも充分體驗してゐる。ミュンヘンのある日の大會に、朝の十時に私は演説をしたことがあつたが、その日は如何に努力しても、いつもの様に聴衆を興奮させることが出来なかつた。私としては決して調子を下したものではなく、寧ろ常よりも張り切つてゐた積りであつたが、到頭最後まで充分に

聴衆を刺戟することが出来なかつた。私は可なり不満な氣持で降壇した。不思議に思つたので、其次の集會の時にもう一度此時間を選び、充分心して演説をしたが、結果は矢張り前回と同様であつた。愚鈍なドイツのインテリ階級の人々は、演説者よりも文士の方が常に優つてゐることを主張する。嘗て私は、大戦中に書かれたロイド・ヂョーヂの演説を、或るドイツの文士が批評してゐたものを讀んだことがある。その批評家は結論として次のやうなことを云つた。即ちロイド・ヂョーヂの演説は分り切つた極めて平凡なことを平凡に話したまで、知的には全く何の取柄もなく、まことに低調極まるものである——といふのであつた。そこで私は、どうも納得し兼ねたので、早速幾種類かのロイド・ヂョーヂの演説集を取り寄せ、慎重にそれを検討してみた。そして、その中に如何にも大政治家らしい大衆の心を巧みに捕へるところの巧妙なやり方が、隨所に用意されてゐることを發見して驚くと共に、そうした大衆に及ぼす心理的傑作の重要點に、まるで氣のつかない文士の批評を、改めて憫笑せざるを得なかつたのである。

總じて、民衆大會が非常に貴重なるものであると云ふことに就ては、次のやうな理由があるからだ。即ち個人が、不確な士臺の上に立つて、新しい政治運動に参加すべきかどうかを思ひ迷つてゐるやう

な時には、大部分が精神的孤獨感に捕はれてゐるものである。その人が、大會の會場に入つて演説を聞いてゐる間に、周圍の人々から受ける心理的影響は極めて微妙なものである。しかし彼はその多數の人々に對して一種の同僚感を持ち始め、次第に彼の心の中に勇氣と力とを生しめるやうになる。斯うした決斷のついてゐない心は、新らしい運動を暗々裡に信ずる幾千の心に取り卷かれてゐる中に、群衆心理的な一種の魔術的雰圍氣によつて足をさらはれてしまふ。そうして遂に彼は屈伏することになるものなのである。

この心理過程は、ナチ黨にとつて見逃してはならないものである。彼の、物識りには違ひないが、ドイツ帝國を投げ出し、彼等自身をも危険にさらし、彼等の指導的地位を自ら破壊してのけたブルジョアの愚者共によつて影響されるといふことは、斷じて許してはならぬのである。

赤色との戦ひ

ライプチヒの記念日

一九一九年から二一年にかけて、私は屢々ブルジョアの會合に出席するの機會を持つた。その中で特に彼等の會合らしい異彩を放つたものが今以て記憶の底にこびりついてゐる。年は忘れたが、それは「ライプチヒの戦ひ」の記念日であつた。ミュンヘンのワグネルザールの會場で、その日、或る嚴のある大教授の講演があるからとの招待を受けたので出掛けて行つた。壇上にはこの會の委員達が並んで腰掛けてゐた。中央の片目鏡なしの男を挟んで、右にも左にも片目鏡をかけた男が、ひどく眞面目な顔付と服裝とをして腰掛けてゐたので、全體の印象が、まるで誰かが死刑の宣告でも受ける法廷でもあるか、それとも嚴かな洗禮式と云つた格好であつた。そうした嚴肅裡に話しが始まつたが、それが四十五分も續くと、聴衆の中ではそろ／＼居眠りを始めるものが出て來た。

私の前に丁度勞働者が三人ゐた。彼等は勿論このブルジョア達の會合を妨害する積りで出かけて來

たのであらうが、暫くするとお互ひに顔を見合せてせゝら笑ひを始めた。そうして、三人とも靜かにこの會場から出て行つた。これが先づ彼等のなし得た最大の妨害であつた。要するにまるで生氣も何もない、魅のやうな會合に過ぎなかつた。

之と較べると、我々ナチ黨の會合は血走るやうな緊張を持つてゐた。我々の會合は決して靜かであつたことがない。そこでは二つの相異なつた世界觀が火花を散らして斷つた。そして閉會は、ブルジョア連のそのやうに、弱々しい讚美歌が何かで終るやうなものではなく、自然の情熱の噴出する爆發的な熱を以て幕が閉ぢられるものであつた。

赤色黨員との格闘

我々の會合では、屢々赤色黨員と我々との間に、本當の格闘が演ぜられた。我々の會合を破砕して來いと云ふ指令を受けて、とつそり聽衆の間に割込んでゐる赤色黨員は、種々の方法と手段とに依つて、この指令への責任を果さうとした。しかしその都度、恐怖といふものを知らぬ我々の防衛隊が、勇敢に之等の妨害者に突撃して行つて、激しい格闘の後に彼等を押へつけてしまふのが常であつた。

今我々と、この赤色黨との關係を振り返つて見るのも興味の無いことではない。

最初マルクス主義の指導者は、その黨員に對して、「ナチ黨なんか結構な」と命令した。全然目も振り向けないことに依つて、彼等の優位を誇らうとしたわけである。しかし會合を開く毎に、次第に聴衆が多く集まつて來るのを見ると、そろ／＼氣にせざるを得なくなつて來た。このまゝだと、ことに依ると存外大きな勢力になるかも知れぬ。これは今の中抑へつけて了はないと不可ないと考へ始めた。そこで腕に覺えのある赤色黨員中の闘士が、我々を殴り仆すために派遣されるやうになつた。しかし案に相違して、その勇敢なる闘士が逆に我々の防衛隊のために叩きのめされた。叩きのめされたばかりでなく、それらのマルクス主義者の中から、心より我々の説に耳を傾ける者を相當出すに至つたのである。茲に於てマルクス主義者は、彼等の教義に一抹の疑惑を抱き始めると共に、ナチ黨の容易ならざる力を改めて認識せざるを得なくなつて來た。

無視・嘲笑・攻撃・默殺・彈劾

これは赤の指導者にとつては容易ならざる事態であつた。何とか打開の途を講じなければ、意外の

深傷を負はされるかも知れないと思ひ始めた。そこで次に執つた彼等の指令は、ナチを回避すべしといふのであつた。

しかし回避するには、我々の會合は餘りにも大きく、華々しかつた、避けんとしても到底避け得ざるものであつた。さうと知ると彼等は、再び我々の會合を押潰すべく、以前にも増して強い粉碎手段を講じて來た。だがそれも所詮は永く續き得るものではなかつた。困惑し切つた赤の指導者は、最後の切れとして、その黨員に次のやうなスローガンを示したのである。曰く

「勞働者よ！ ナチの君主主義的反動者の會合に目を向ける勿れ！」――

一蓮托生の關係にある赤色新聞も、之と殆んど同様のコースを以て我々に當つて來た。

最初之等の新聞からは、ナチ黨は完全に無視された。その次には嘲笑であつた。嘲笑し切れぬと思ふと猛烈に攻撃して來た。攻撃が應へないと見ると默殺しやうとした。しかし到底默殺出來ぬ努力であるとなつてと今度は彈劾へと方向を轉じた。

私は之等のことに對しては決して無關心ではなかつた。しかし彼等が如何なる手段を以て我々の前進を妨害して來やうとも、また聞くに堪へぬ惡罵や嘲笑を浴びせて來やうとも、彼等が我々を勞働者

の眼前に置きつづける限りは、究極の勝利は我にありといふ見解を固く抱いてゐた。

斯う云ふ敵を向ふに廻してゐながら、我々には我々以外に保護者といふ者を持たなかつた。當局の保護などは頼りにならぬこと、夥しい限りであつた。そこで我々は自分達の會合を護り、自分等の手で平和を守らなければならなかつた。警察そのものを見ても、彼等は我々の邪魔をする者のみを助けて、我々は眼の仇のやうに取扱はれてゐたから、警察の援助なんかは却つてこちらからお断りしたい程であつた。「法と秩序」を振り翳して、我々の會合がまだ始まりもしない中から解散させたり、矢鱈に禁止を食はせるのが警察の役目だと思つてゐるかのやうだつた。

こんな環境の中に置かれた我々は、常に騒ぎが起きたらその瞬間に、我々の手でそれを抑へつける用意をして置く必要をしみじみと感じたのである。

突撃隊は斯くして生れた

當局から手篤い庇護を受ける集會は、その庇護が手篤ければ篤い程、民衆の信頼からは遠ざけられるものである。

勇氣と力のある、所謂男性的な線の太い男が、柔和で臆病な男よりも、容易に女の心を獲得し得ると同様、英雄的な行動は、當局の庇護の下に生きのびるやうな臆病者達の運動よりも、遙かに國民の心を捉へ得るといふのが私の持論である。

この見地からして、私は最初の民衆大會の時に、私が軍隊にゐた頃から十分氣心を知り合つてゐる青年のみを集めて「突撃隊」を組織した。この突撃隊こそは、我々自身を護る唯一の武器であり力であつた。それと同時に、我々の會合がそこらに轉がつてゐる討論クラブなんかではなく、主義と運動のためには、團員の凡てが、最後の血の一滴までも喜んで流すといふ強い觀念を持つたところの「闘争する集團」であることを、汎く天下に知らしめやうとする意圖も亦含まれてゐた。

突撃隊の組織に當つて、私はその隊員に繰返し繰返し次のやうなことを説いた。即ち突撃隊の使命を説明した後、世界の凡ての知識も、如何に優れた智慧も、力がそれを防衛し守護しなければ決して役立つものではない。平和の女神は單にそれだけではない。戦争の神と手を握つてこそ始めて眞の歩行が出来るのである。——私が斯う語つた時、彼等隊員の瞳は何と云ふ生々とした輝きを見せたことであつたらう。軍隊勤務の觀念は、彼等の心をこの仕事の上に充分の熱を以て突入させることが

出來たのだ。

彼等の戦ひ振り、それは勇ましさそのものであつた。彼等は我々の會合を粉碎しやうとするものを見付け出すと、彈丸のやうに飛びついて行つて、向ふ見ずな程の勇敢さを以て、相手を叩き伏せる迄戦つた。彼等の頭には、我々の神聖な使命のことのみが一杯になつてゐて、傷や血の犠牲などに對しては毛頭考へて見やうとしなかつたのである。

一九二〇年の夏には、既に突撃隊は正規隊の形をとり始めてゐた。そしてその翌年の春には、之等の勇敢なる騎士が數百人から成る中隊に分たれ、それがまた更に小さな分隊に區分された。

そこで私は、この國際主義者共と勇敢に闘ふ同志のために、その心を象徵する何かの標章が必要だと考へるやうになつた。私は大戰直後、ベルリン王宮前で行はれたマルクス主義者の一大示威運動の光景を思ひ出した。あの時、あの廣い王宮前を埋めつくした赤旗、赤色の腕章、赤い花——それは如何にも強烈な情熱を喚起する力を持つてゐた。

その後一九二〇年迄、マルクス主義者は、まだ旗によつて對抗されたことを知らない。彼等の敵であるべきブルジョア階級は、旗を作るところか、最早彼等に對抗出来る意見さへ持合はせてはゐなか

つた。

舊ドイツ帝國は既に死んでしまつてゐる。それに代つて我々は今新しい國民と新しいドイツを生み出すべく運動を始めたのだ。それが故に我々がマルクス主義者の面前に振り廻して、彼等にも國民にも知らすべき旗には、この新しい國民を表象しなければならなかつた。同時に我々の闘争の意志をも表はさなければならなかつた。問題を單なる旗や標識のことだけだと輕視しては不可ない。大衆に關係し、大衆が如何なるものであるかを知つてゐる人々には、この問題の重要さが、よく分る筈である。力強い標章が民衆の心を捉へ得たなれば、既にそのことだけでその運動の行手に大きな力と光明とが與へられるものなのである。

鉤十字の誕生

愈々ナチ黨の標章を作るとなると、黨員の中から無數の家が集まつて來た。私には既に腹案は出來てゐたけれども、指導者として、なるべく皆の考案したものの中から撰び出したかつた。この多數の黨員の中からは、誰か一人位私のと殆んど同案か、それともそれ以上の名案を提出するものがあるに

違ひないと思つた。果してシユタールンベルグの齒醫者が、非常によく出来た圖案を持つて來て見せた。これは私の案と可なり似通つたものであつた。たゞ曲つた鉤を持つたスワスチカ（鉤十字）で、白い圓を作つてゐると云ふ點が、私に満足を與へなかつた。

結局示されたさまざまの標識の中から、そのまゝ採用出来るものはなかつたので、私の腹案を土臺として、種々の角度から研究した結果、遂に今日使用されてゐるもの、即ち赤地の旗の中央に白の圓を描き、その中へ黒い鉤十字を染め抜いた旗が出来上つたのであつた。突撃隊員には特に、同じ圖案の腕章が手渡された。又ミユンヘンの鎊職フス君は黨員が佩用するメダルを作り上げて來た。

斯くて鉤十字のナチ黨旗は、我々の若々しい情熱そのものゝやうな色を以て、一九二〇年の夏、始めて大衆の前に大きく翻へされたのである。

この旗に就て一應説明を試みるなれば、旗の赤地は我々の熱狂的な社會思想を表はしたものであり、鉤十字はアリアン人の勝利の闘争を——永久に反ユダヤ人であらうとする創造的な仕事の、勝利のための闘争を象徴してゐるものなのである。

一九二〇年に入つてからは、最早我々は一週一度の會合では満足出来なくなつて來た。そこで思ひ

切つて週に二回の會合を開くことに決定したのである。街の要所要所へ貼られたポスターの周圍には人々が群集した。ミュンヘンの町では、どこへ行つても我々の噂を聞くことが出来た。そしてミュンヘン第一の大會場も、常に熱心な聴衆によつて一杯に満たされるやうになつた。我々は既にミュンヘンに於ける強力な黨として、自他共に相許すものとなつたのである。

年が改まつた一九二一年の一月末に近く、ドイツ並びにドイツ人にとつて實に重大な問題が生れて來た。それは後の世までも種々の話題と事件とを生んだ賠償金問題であつた。ロンドンの命令は、ドイツに實に一千億金マルクと云ふ天文學的數字の賠償金を支拂へと云つて來たのである。

國內のあちらこちらでこの問題について一様に反對意見が叫ばれた。ミュンヘンに於ても共同抗議をするといふやうな噂が立つた。分散した小規模の國民團體や、勞働者の協同體が、それらを組織化しやうとして骨を折つてゐた。しかし強力な指導者を缺く彼等は、だら／＼としてゐて、一向進捗しなかつた。一方ドイツの大きな諸政黨は何をしてゐたであらうか！——彼等はこの龐大な金額に度膽を抜かれてしまつて、今や抗議をしやうとする意志すらも失つたかのやうな状態にあつた。」

賠償金反對の大示威運動

一九二一年二月一日に私は決定を要求した。そして私はまる一日待たされた後、やつと回答を手にすることが出来たが、それは全く曖昧模稜たるものであつた。到頭私は痺れを切らしてしまつた。斯くなる上は、私は私自身の發意に依つて、大示威運動を起さなければならぬと決心した。最早一刻も猶豫の出来ぬ場合であつた。そこで私は二日（水曜日）の正午に、ポスターへ使用する文句をタイプストに打たせた。それから電光石火的にツイルクス・クローネの會場を借りてしまつたのであつた。このツイルクス・クローネは、石の我々にも、餘りに會場が廣すぎて、こゝだけは未だ一度も利用したことの無いものであつた。

或る意味で、ナチ黨突撃隊は、こんな廣い會場を有効に、且つ充分に警戒し得るだけの大きさにはなつてゐなかつた。従つて當局の保護などを全然頼みに出来ない我々にとつては、この會場を使用するといふことは、そのことだけで實に一大冒險であると云つてよかつた。——しかしそれはその時の私だけの考へだつたかも知れない。後目に至つて私は、狭い場所よりも廣い會場の方が、騒ぎを鎮め

たりなんかするには、却つて好都合であることを知つた。

ポスターは出来上つて来た。しかし廣告するためには、木曜日一日しかなかつた。しかもその日は朝から相憎雨が降つてゐた。條件はすべて不利であつた。私は、ことによるとあの廣い會場を一杯にするには出来ないのではないかと案じた。そこで私は更に數種のリーフレットを大急ぎで印刷させた。そしてそれを、赤い腕章をつけた黨員に持たせ、十人、十五人位づゝトラックに分乗させて、街中を叫び廻りながら、全部撒いて来るやうに命令した。

トラック隊は時を移さず出動した。之こそ、マルクス主義者以外の者がなした、最初のトラック宣傳であつたのだ。ブルジョア階級の人々は、この鉤十字の旗と腕章で満たされたトラック隊を見て仰天したし、共産主義者共は、撒き散らして行つたりリーフレットを捌んだ拳を振り上げながら、「畜生」と惡罵を浴びせかけた。

おゝ、我等の勝利！

この大會は八時から開かれることになつてゐた。私は會場から十分間置きに電話で刻々の報告を受

けてゐた。」

晩の七時にはまだ充分の入場者とは云へなかつた。そろ／＼私は焦り出した。しかしそのうち安堵すべき状態の報告が入り始めた。八時十五分前には、既に会場は四分の三の入りを示し、尙切符賣場には大變な群衆が長蛇の列を作つてゐると云ふ報告が來た。

八時二分に私は会場たるツイルクス・クローネに到着したのであるが、その門前にはまだ夥しい人々が切符を争つて買つてゐた。

一步その廣大な会場へ足を踏み入れたとき、私は喜びのため足が地につかないほどであつた。六千人に餘る聴衆がギツシリと静謐めになつて、それがまるで巨大の砲彈のやうに、私の前に横たわつてゐた。慄々この聴衆を前に演壇へ立つた時、私は如何に我々の將利が大きなものであつたかを、更に新たに感じたのであつた。

私は空前絶後の國辱的賠償金問題について演説を始めた。この演説は實に二時間半の長きに亘つて続けられたのである。私はこの夥しい聴衆の胸へ、ぐん／＼と私自身を揉み込んで行つた。懸命の辯であつた。そして一時間後には割れるやうな拍手が、演説の要所要所で起るやうになつた。私は完

全に聴衆の心に喰ひ込み得たことを意識した。私は更に説き進めた。その中、聴衆は拍手することもあり忘れて、その廣い會場が水を打つたやうな静けさになつた。この嚴肅な沈黙は、この日のこの會場に居合せた者なれば、決して生涯忘れることが出來ないであらう。二時間半の後私は演説を終つた。人々はシーンと静まり返つてゐた。が總て既に私の演説が終つたことに氣がつくと、天井も崩れ落ちんばかりの拍手と喝采が湧き返つた。そして誰からともなく熱烈なドイツ國歌が合唱された。その合唱裡に自ら會は閉ぢられたのであつた。

私は立上つて、昂奮し続けながら歸つて行く民衆を、二十分間も見送つてゐた。限りない喜びが胸の中で疼いた。

最早我々の存在は絶対に無視するわけには行かなくなつた。この日の會合の大成功が、單に幸運に恵まれたものに過ぎぬと思つてゐた連中も、第二回、第三回とこの同じ會場で大會を催し、その回毎に前同様の大成功裡に終つた事實を目撃しては、遂に自らの考へが間違つてゐたことを認めねばならなくなつたのだ。

一九二一年の夏になると、我々の會合は週二回から三回へ飛躍した。そしてその會場はあの廣大な

ツイルクス・クローネを使用するのがおきまりになつてしまつた。その結果我々は益々多數の聴衆と黨員とを獲得することが出来たのである。

この事實を見て我々の敵が喜ぶ筈はなかつた。そこで彼等は、今にして威嚇して置かなければ、始末に了へなくなると考へ始めた。その手始めが代議士エルハルト・アウエル事件である。つまり彼等の味方であるエルハルト・アウエルが何者かのために、或る夜發砲されたと云ふのだ。そして犯人が餘りに早く逃走したので、それが何者であるかは判らない——と云ふのが被害者エルハルトの説明である。然るに社會民主黨の新聞では、堂々とこの犯人こそナチ黨員に違ひないと指摘して來た。之は彼等が私及びナチ黨に對して、最後の試みを加へる前提であつた。私はミエンヘンのホーフブラウハウスで演説する豫定になつてゐたが、その夜彼等が私を襲撃すると云ふ警告を發して來た。

二 發のピストル

當夜八時少し前に私は會場へ到着した。會場は既に滿員であつた。勿論その中には、我々を襲撃する手順を整へた敵が多數割り込んでゐることは判つてゐた。そこで私はホーフブラウハウスへ着くと

直ちに、私を待ちうけてゐた四十五、六名の突撃隊員を整列させて一場の注意を行つた。「今晚こそ君達が君達の信念を發揮すべき絶好の機會である。死んで擔ぎ出されでもしない限り絶対にこの會場から出てはならない」と激勵した。私自身も飽くまで會場に頑張る。そして若しも君達の中から一人でも臆病者を見付け出したなれば、その者から容赦なく腕章をもぎ取つてしまふ、とも云つた。これに對して、平素よりも何倍か力強い「ハイル！」の三唱が答へられた。

愈々私は會場に入つて行つた。そこには私の敵兵が手具整ひいて待ち受けてゐた。彼等の敵意に燃えた眼は一齊に私を睨みすへた。その數は豫想よりも遙かに多いものであつた。ホーフブラウハウスはピヤホールである。だから私の演説は、いつもそのホールの隅にテーブルを置いて、その上に立つてなされるのであつた。その晩もいつものやうに私はテーブルの上に立上つて演説を始めた。

私の眼の前には、敵が幾回もなつてテーブルを占領し、ビールを飲みながら私を見凝めてゐた。彼等は主としてマツフエイ工場や、クステルマン、イザリア等からやつて來た者達らしかつた。

彼等はビールを飲みながら巧みにその足の下に、彈丸となるべき空のコップを集めてゐた。

私の演説に對しては、豫期してゐた通り盛んに反對の聲が起きた。しかし私はそれを無視し、或は

抑へつけて演説を續けて行つた。そしてその會場の默然氣は、明かに私が支配してゐるやうに思はれた。そのために、敵の指導者達がいら／＼し出した。處々で小集團を作つて、何事か耳打ちが始まつた。私は充分注意して、彼等に妨害の隙を與へないつもりでゐたのであつたが、一寸したはづみで、心理的な誤りを犯した。その言葉を吐いてしまつてから、私はしまつたと思つたが、もう遅かつた。待つてゐたやうに嵐が始まつた。その數瞬間は、實にひどい騒ぎであつた。突然一人の男がテーブルの上に立上ると「自由！」と叫んだ。それが合圖しかつた。忽ち部屋全體が修繕場と化した。コッブが飛ぶ。組打ちが始まる。椅子の足が折れる。テーブルが壊れる音がする。

その中にあつて、私は依然私の位置に立ちながら、突撃隊員の猛烈果敢な鬭争振りを見守つた。彼等は狼のやうな勢ひで敵に飛びつき、そいつ等を打ちのめしたり、場外へ追放したりした。五分間の後には、血に塗れてゐない者は一人もないと云つた有様だつた。私はこの時始めて心の底から突撃隊員の信念の強さと勇敢さに打たれた。實に有爲の人材をその中から何人か見出すことが出来た。例へば私の忠實なモオリス、私の現在の祕書ルドルフ。ヘスその他、何れも身に重傷を負ひながら、更に屈する處なく死に身に働いて呉れた人々を本當に知ることが出来た。

二十分後には、敵はあらかた場外へ追ひ出されてしまつた。その數たるや我々の僅か四五十人に對して、實に七、八百人も多數だつたのである。

突如會場の入口から二發のピストルが射ち込まれて來た。その音は、戰場生殘りの我々の心を、更に勇み立てる役にしか立たなかつた。猛烈な射ち合ひが始まつた。そして二十五分の後には、會場を散々に荒らされはしたものの、再び元の靜肅な狀態に戻つた。それを見て、この晩の議長ヘルマン・ユツセルは「よし、會合を繼續する。辯士發言」と宣言した。

私は再び演壇に立つて、遂に終りまで話した。

我々の會合が完全に終つた頃になつて、物々しく昂奮した警察副署長が乗り込んで來た。そして兩手を擴げながら叫んだ。

「この會合は解散を命ずる！」

私はこの如何にも間の拔けたお役人と、その典型的な自尊心に、思はず失笑せずにはゐられなかつた。とまれこの會合は我々にとつて、いろんな貴重なるものを齎した。我々としても大いに學ぶところがあつた。しかし我々の敵はより以上に我々が與へた教訓も腦天に感じたに違ひなかつた。

我が突撃隊

恐怖手段は打破し得ず

一つの國家の黄金時代と云ふものは、その國民の最高の水準にある者が、その國の支配者となつた時にのみ現はれる。

國家の發展が正常的な歩みを續ける時は、それは國民の中の中間群の勢力が平衡を保つてゐる時である。

國家が衰退の歩を辿るのは、その權力を最惡の分子が掌握した時に限られる。

さてこの中間層であるが、この階級の人達は、彼等自らの中に何等指導性を持つてゐないものである。兩極端が相戦つてゐる間は、この中間層は自らを指導者と考へるが、何れかの方が勝つて彼等の上に臨んで來ると、わけもなくその方に靡いて行くものである。最善の分子が勝利者となつた時之に従ふのは當然であるが、最惡の分子が勝つた時にも、敢て之に反抗を試みやうなどとの氣持を起さな

い。

ドイツは大戦に於て最善の分子を大方戦場の露として失つてしまつた。その結果ユダヤ人や共産主義者の肩がドイツの政治を牛耳るやうになつたのだ。ブルジョアはユダヤ人と手を握り、大衆は共産主義の捕虜となつてしまつた。

この時に當つて我がナチ黨が生れたのである。

ナチ黨はブルジョア諸黨のやうに「過去を恢復する」ことなどは全然考へてゐない。飽くまでも新しい民族國家を現出せんとするのが目標であり理想である。

この若々しい血を持つた新運動は、創始の日から、その理想は精神的に表現すべきではあるが、運動を防禦する手段としては、肉體的な實力に頼らなければならぬことを固い信條としてゐる。

過去の歴史の中には、新見解に立脚する世界征服の道具としての恐怖手段（テロリズム）が、形式的な國家權威などでは、到底打破れないものであるといふことの證左を、到る處で證明してゐるからである。

現在のドイツの状態は、マルクス主義的支配者の手に完全に掌握されてしまつてゐる。従つて國民

の大部分も亦之に屈從してゐる。斯うした環境の中から、どこまでもナチ黨の信條を指し立て、それを貫徹するためには、どんな角度から考へても、之等の國際主義者から自分自身を、そして世界に提供するところの新しい理想を防衛しなければならぬ。防衛するに足るだけの何等かの機關を持たなければならぬ。それは單にナチ黨のために必要なと云ふだけではなく、ナチ黨の背負ふべき義務でもあるのだ。

永久なる突撃隊

前述のホーフブラウハウスに於ける、流血的會合は、私のこの所論を裏書する。斯の如き事態が惹起されるが故に、防衛隊は必要であり、その防衛隊あるが故にナチ黨は健在なのである。

そこであの夜、ナチ黨を守る以外の何ごとをも考へずに、比類のない果敢さを以て我々の敵に飛びついて行つた勇氣を永久に記念するために、我々の防衛隊を永遠に突撃隊と呼ぶことにした。

突撃隊は、ナチ黨の指導者の命によつて、他の如何なる國防團體へ加盟することも許されなかつた。それらの國防團體は、名前こそ國防團體ではあるが、眞の意味に於ては全く空名のみで、何等の力も

權威も備へてはゐなかつたからである。

又我々の突撃隊は、その隊員の間で特殊な秘密組織を持つことをも許されなかつた。よしんばそれが黨のためになる秘密組織であつたにしても、我々の望むところのものは、數百の勇敢な陰謀者ではなく、幾十百萬の狂熱的な闘士だつたからである。我々の仕事は、秘密的な陰謀を持つて、影でこそ――やるやうなものではなく、常に堂々と大衆の前に、大示威を行つてなさるべきものである。

單に一般大衆だけではない。我々の正面の敵たるマルクス主義者共にも、このことは徹底的に知らさねばならない。即ち將來ドイツ帝國の大立物となるべきものはナチ黨であり、而してそのナチ黨が新しい民族國家の主人となるものであるといふことを――。

ウイルヘルム・テル

秘密結社が得てして陥り易い特殊な危険は、その團員が自己の任務を過小に評價し易いといふ點である。つまりは暗殺を行ふことに依つて、一民族の運命が好轉すると云ふやうな意見が生れ勝なことである。斯うした信念は、或る國民が強力な壓制者の暴政に苦るしんでゐる時には、或は歴史的に正

當と見られるかも知れない。

そうした暴威を振ふ壓制者がのさばる時代には、自分を犠牲に供して國民をその壓制から救はうと覺悟した人間が生れ、その國民から憎惡の的となつてゐる男をやつつけると云ふやうなことが起り得る。ドイツの偉大なる詩人が、有名な「ウイルヘルム・テル」の中で、このことを頌讃してゐるのに引換へ、このテルの行爲を目して憎むべきものであるとするのは、自分が罪を犯し、暗殺に値すべき人間たることを意識してゐる惡漢達の共和主義的心情のみであらう。

しかし、一九一九年から一九二〇年にかけてドイツは、斯くすることに依つて、國民をその苦悶から救ふことが出來ると考へた或る秘密組織があり、その團員がドイツ帝國の破壊者として復讐を企てる危險が多分にあつたのである。だが之は根本に於て考へを誤つてゐた。と云ふのはマルクス主義者は悪いには違ひないが、單に彼等が彼等だけでドイツを革命に導いたのではなく、之を防壓すべき筈のブルジョア階級が、何等の抵抗力もない臆病者の集まりだつたためであることを考へなければならぬ。ブルジョアが確かりしてゐたなれば、マルクス主義者へそのまゝ權力が移つて行くやうなことは有り得なかつたのだ。思ひをこゝに致せば右の秘密組織の持つた考へは愚かしいものであつたこと

が分るわけである。

ドイツのブルジョア階級は、この點に於て最も痛烈に攻撃を受けねばならない。彼等は少しも偉大でない指導者に依つて指導された革命に對して、殆んど何等なところなく服従してしまつたのだ。

或る時代の一國民が、例へばフランスの偉大なる革命家たるダントンや、ロベスピエールやマラーなどに、その時代のフランス國民が屈服したと云ふことは了解出来る。しかし一國民が、愚物のシャイデマンや、でぶのエルツベルゲルや、フリードリヒ・エベルトなどの愚昧な政治家の前に平服してゐることは、何としてもその國家並びに國民の一大屈辱と云はなければならぬ。今之等の中から一人や二人を片づけて了ふことは容易だらう。しかしそうしてみたところで、殆んどそれは無意味である。なぜなれば、折さへあれば之等の人間と取つて換らうと虎視眈々たる吸血鬼が、無數に充滿してゐるからである。

突撃隊の綱領

ナチ黨突撃隊が、秘密團體でもなければ、軍隊的な防衛團體でもないといふことは、或る意味に於

て非常な重要性を持つてゐた。こゝで少し我が突撃隊の組成方法に就て説明を加へておかう。

一、突撃隊の訓練は軍隊的な標準によるものではなく、専ら黨の方針に随つて指導された。

何事よりも突撃隊員は身體を敏捷に働かし得ることが第一である。その意味から云つて、容易に役に立つこともない射撃なんかを練習するよりも、拳闘や柔道の方が遙かに有効である。ドイツ國民の中に六百萬のスポーツマン的健康體を作り上げ得たならば、必要に應じて何時でも強力な軍隊を編成することが出来る。

二、何事をも秘密裡に行ふことを嚴しく禁じた。隊員もまた秘密を考へやうとするものもゐなかつた。従つてその規模と力とを、全世界に誇示することが出来たのである。

秘密の會合を持つ必要がなかつたから、如何なる場合にも堂々と會合した。堂々と街上を示威行進も行つた。第一隊員の服裝そのものからして、誰が見ても一目で突撃隊員であることが判るやうなものを書んだ。

三、着る制服と同様に隊の内部組織も飽くまで黨の方針と合致するやうに圖り、軍隊で行つてゐるやうな方法は採らなかつた。

斯うした方針の下に私は突撃隊精神の鼓舞を圖ると共に、この原則に依つて自己をも導いて行つた。そして一九二二年には、數に於て可なりの隊員を養成し得、我々の鬭争勢力を益々旺んなものとさせることが出来たのである。

六 萬 人 の 聽 衆

一九二二年の夏、共和國防衛法が施行された。この法律には全國の國際團體が勢ひ立つて反對し、遂に反對運動の一大示威運動が、ミュンヘンのケーニヒスプラッツで行はれることになつた。

我がナチ黨は勿論參加した。その日の黨の行進は壓倒的なものであつた。先づ百名づゝ六組に區分した突撃隊が先頭に立ち、その後へ我々の諸部隊が続いた。二組のプラスバンドは勇壯な行進曲を奏し、十五席のナチ黨旗は翻翻と翻へつた。随分多くの集團がこの廣場へ集まつて來たが、その中で我が黨だけが特に華々しい威勢を示した。何故かと云ふに、堂々たる突撃隊員と、黨を象徵するところの旗とは、他のどの集團にも無いものだつたからである。

斯うした隊勢で廣場へ到着すると、無數の人々は我々を迎へて爆發的な歡呼の聲を浴びせた。そし

てその日私は六萬人の聴衆を前に置いて演説することの名譽を獲得出來たのであつた。

全くナチ黨の成功は壓倒的なものであつた。しかしその成功を齎した原因は、單に堂々たる行進振りであつたと云ふことだけの故ではなかつた。その日我々が廣場へと行進を續けつゝあつた時、我々の敵たるマルクス主義者共が、この行進を途中に擁して妨害しやうとして來た。それを、忽ち我が突撃隊員が粉碎して、爾今ナチ黨は街上をも支配するぞといふ決斷を見せたことが、一層皆の共鳴を得たからであつた。

コーブルグ事件

突撃隊は、一悶着ある毎にその強さを増して行つた。殊にコーブルグで起きた事件は、ナチ黨にとつても突撃隊にとつても可なり大きな試練であつた。

やはり一九二二年のある日、ある民族團體がコーブルグと云ふ町で「ドイツ・デー」を開催することを發表した。そして私に對しても、當日若干の隨員を帶同の上、一場の演説をやつて貰ひたいと云つて來た。そこで當日となるや、私は突撃隊員以下約八百名の黨員を引具し、ミュンヘンから特別仕

立の列車に乗つて、このバヴアリアにあるコーブルグへ乗り込むことになつた。或る一つの民族團體が會場へ行くために、列車を特別に仕立てるなど云ふことは、おそらくドイツ始まつて以來のことであつた。我々の乗つた列車は驛毎に停車し、そこで又その地方の黨員を乗り込ませた。勿論沿道の多數の人々は、ナチ黨に多大の關心を寄せることになつたし、鉤十字の黨旗もこの日は格別の光彩を放つたことである。

愈々我々がコーブルグへ到着すると、「ドイツ・デー」を代表する委員達が我々を出迎へた。そしてこの土地の獨立社會黨員と共產黨員との間で出来た協定なるものを示したのであつた。それに依ると「國旗を押し立てゝ行進すること、音樂隊を使用すること、一黨一團の行進であること」は全部拒けられて、我々は幾つかの小さな分隊となつて、こつそり會場へまで、行かなければならぬといふのであつた。

勿論私は直ちにこの提案を一蹴した。この中どれ一つを受け入れても、それは我黨にとつて許すべからざる屈辱だからである。私はそんな間拔けな申入れは一切黙殺して、豫定通り樂隊と突撃隊とを先頭に、堂々行進することを命じた。この停車場前の廣場では、我々に敵意を持つた眼の多數の群衆

に出會つたが、そんなものは何でもなかつた。我々は狼狽して了つて爲すところを知らぬ警官達に護衛？　されながら、颯爽と街を行進して、町の中央なるホーフブラウハウスに向つた。我々は全然知らなかつたのであるが、我々の本部とするところはこのホーフブラウハウスではなく、射撃場であつた事を後になつて知つた。

この町の多數の人々は、我々の後からゾロ／＼とついて來た。そして我々がホーフブラウハウスに到着し、その中へ入ると、それに續いてこの大衆達も突入しやうとした。それがために警官は我々を中へ入れた上で、扉に鍵を下してしまつた。云はゞ熊のよい閉ぢ込めを食つたわけである。これはどうにも我々に我慢のならないことであつた。そのうち私は、こゝが我々の本部ではないことを知つたので、時を移さず警官に扉を開けることを要求した。彼等は暫らく躊躇してゐたが、總て諦めたやうに鍵を外した。

そこを出た我々は、再び隊形を整へて町を行進し射撃場の方へ進んだ。すると途上で待ち受けてゐた赤達が、亂暴にも我々の行列に向つて石を投げつけて來た。構はず進んだが、益々投石は激しくなる一方である。事茲に至つては最早我々の忍耐も限度に達した。忽ち突撃隊員の突撃が開始された。

そして十五分の後には、附近に赤のかけらも見えなくなつてしまつた。

その夜は、黨員の中の個人個人が、赤のために到る處で襲撃された。そこで我々は今度は本氣になつて、襲撃して来る連中を追跡し片つばしから之を征服した。そのお蔭で、この夜一夜だけで、數年間コーブルグを悩ましてゐた赤の恐怖が、すつかり打倒されたのであつた。

赤たちはマルクス主義者やユダヤ人特有の陰險な方法を以て、「ナチ黨は平和な労働者諸君を攻撃するためにコーブルグへ大暴してやつてきたのだ」とデマを飛ばしてゐた。そんなことのために、我々は味方であるべき大衆からも、憎惡の眼で見られなければならなかつた。彼等は午後一時半に、ナチ黨をへこますために、労働者の一大示威運動を決行すると發表した。こいつは面白いと思つた。そこで私は、果して彼等が我々を攻撃するだけの勇氣があるかどうかを試すつもりで、若干の突撃隊員とその時刻に、發表された廣場へ行つてみた。

ところが行つて見ると、數千人の示威運動を行ふといふ觸れ廻しであつたのに、僅か數百人しかゐなかつた。突撃隊員がそこへ乗り込んで行くと、彼等の中の或者はいち早く逃げ出した。残つてゐた大部分の者はなんにもしないで立ち盡してゐた。僅かに數人の赤衛隊員だけが我々を攻撃しやうと企

てたが、それすらも間もなくその氣力を喪つてしまつた。

赤の力は大衆の前に遺憾なく暴露された。我々がこの廣場から隊伍を整へて戻つて來ると、沿道の大衆の氣分が非常に違つて來てゐることに氣がついた。赤のために長い間威壓され、苛められて戦々兢兢としてゐた大衆は、我々と赤との間に行はれた鬭争の結果から、漸く勇氣を取り戻したのである。彼等は我々に敬禮したり、歡呼の聲を浴びせたりし始めた。その歡呼の中には、衷心から迸り出るものをも多分に聞き取ることが出來たのであつた。

しかし、我々がミュンヘンへ引揚げるべく停車場へやつて來ると、その鐵道勞働者が我々の列車を運轉することを拒否した。そして反抗の氣勢を示した。私は時を移さずその指導者階級の者數人を捕へさせて、彼等を人質として客車の中へ連れ込み、君達が運轉しなければ、我々の手で動かすのみだと威かした。

列車は遂に時間通りに出發することになつた。そして我々は無事にその翌朝ミュンヘンへ歸つて來たのであつた。

我々の意氣は實に軒昂たるものがあつた。しかしそれは我々だけの凱歌ではなかつた。ドイツ全體

が、この時を契機として、ナチ黨の意氣の中に重大なものを認識し始めたのだ。彼等は、滔々たるマルクス主義の濁流を阻止し、且つ之を消滅せしめる力は、ナチ黨の中にのみあることを漸く理解し始めた。たゞ民主主義的な考へを持つ者だけが、力に對して力を以て報ひる我々の闘争に不満を持つてゐたに過ぎない。

コーブルグ事件のお蔭で、我々は當日の敵の中から、若干の味方を獲得することが出来た。マルクス主義の洗禮を受けてゐた労働者達は、ナチの労働者の鐵拳を喰つて、この鐵拳の中にこそ、眞の下イツの生きる力が罩められてゐることを始めて悟つたのである。

しかしコーブルグ事件の最大の收穫は外にあつた。それは、今迄あらゆる會合に於て、赤のテロ行為がのさばり、殆んど満足な會合を持ち得なかつたものが、今度は逆に、彼等のこのテロ行為に對して攻勢に出得る黨の出現を認識させたといふ一事である。今迄民衆から失はれてゐた會合の自由權を、今こそ我々は奪還したと宣言して憚らなかつた。斯くて全盛を誇つたバヴァリア地方の赤の城砦も、この日を境として次から次へと我が突撃隊とナチ黨の宣傳との餌食にされるに至つた。

突撃隊への解散命令

ナチ黨にとつても、突撃隊にとつても、重大な意義を持つ一九二三年になつた。

この年突如フランスが、ルール地方を占領したのだ。

ルールの占領は、ナチ黨にとつては、さのみ驚くに足りる程のことではなかつたが、兎も角今日以後のドイツは、フランスを目標として立ち上り、今日までの怯懦極まる退却政策を一擲して、多分に積極性を帯びて来るであらうといふ希望を持たせるには充分であつた。突撃！このことが、あらゆる意味に於てドイツには必要であつた。突撃隊は、國家の情勢が新興ドイツの誕生に向ふなれば、その國家的奉仕に参加することに、非常に大きな期待と、無限の感激を覚えざるを得なかつた。そこで將來のために、突撃隊の組織を軍隊的に編成換へすることになつた。しかし、若し、後義道にルールを占領したフランスに對して、ドイツの積極的な抵抗が新たにはじめられるに違ひない、といふ假定が正しいものでなかつたなれば、突撃隊の軍隊的改變は有害であつたかも知れない。

一九二三年の末、ドイツ政府はナチ黨に解散を命じて來た。それと同時に突撃隊も亦解散の止むな

きに至つた。このことは我黨にとつて實に痛恨極まる出来事であつた。しかし後日考へれば、之が寧ろナチ黨のために倖せを齎したものであつた。

一九二五年にナチ黨は再生した。時を同じうして突撃隊も編成された。しかしその時の突撃隊は軍隊的編成ではなく、これが生れた當時の最初の原則に従つて編まれた。

突撃隊は防衛同盟でもなければ、秘密組織でもない。——ナチの民族運動のためには、一萬人の親衛隊が必要である。

(註——一九二三年、ルール地方に獨佛間の危機が孕まれるや、ナチ黨は政府の命令に依つて解散を命ぜられ、ヒットラーは投獄の憂き目に會つた。「我が闘争」の前半は、この獄中に於て書綴られたものである。ナチ黨はヒットラーの出獄を迎へて一九二五年再び建設され、今日に至つてゐるものである。尙ヒットラーがナチ黨の指導者の位置についたのは、一九二一年の夏であつた)

大戦後のドイツの盟邦

戦後には不誠意のみ

大戦後に於けるドイツの外交に就て考へる。敗戦後のドイツ帝國の外交は、戦前と比較すれば更に一層なつてゐなかつた。戦前には混亂が目立つただけであつたが、戦後は不誠意の固まりになつてしまつてゐた。革命をやつてのけた政府の連中は、ドイツを自由に、そして強力にしてやるために、他の國と有利な同盟を結ぼうなどといふ考へを少しも持ち合はせてゐなかつた。

ドイツの指導階級と、實際にはさうでないが自分ではさうだと思ひ込んでゐる議會主義者と、何等の考へをも持たぬ羊のやうに溫順なドイツ大衆とを、はつきりと區別して考へておくことが、この際特に重要である。指導者たちは小憎しくも、大衆が何を欲求するかといふことをよく知つてゐる。議會主義者達は何れも腰抜けばかりであるから、易々諾々と指導者の後について行く。そして大衆は尙更愚昧であるから、黙々と之等に服従し引きずられて行く。これが現在の姿だ。

ナチ黨が一般から認められてゐなかつた時代には、ナチ黨の支持者達の間に於ても、外交問題はそう重要に考へられなかつた。何故かと云ふに、ナチ黨が第一に爲すべきことは、強力なる新ドイツを先づ造らねばならぬといふことに全力が傾けられてゐたからである。ドイツを崩壊させた原因を取り除き、その崩壊を利用して肥つた奴隷を打倒すべしとなすのが第一の目的だつたからである。

しかしナチ黨が再建され、その勢力が前にも増して擴大強化されるに従つて、我々は對外關係にもハッキリした、そして確乎たる態度をとることの必要を感じて來た。指導的な一つの原則を守り、その原則に従つて強力な外交陣を張らねばならないと思ふやうになつた。

この意見の決定といふことには、ドイツが今日に於て救はれるか、それとも將來に於て救はれるかの重大な意義が掛けられてゐる。しかし一步を誤れば、この原則が我々を或ひは害するかも知れなかつた。

何れにしてもドイツの今日の外交政策の目標は、世界大戰に依つて見る影もなく失はれてしまつた國家の自由を、一日も早く取り返すことでしかない。

力ちからの劍けんに依よる失地しつちくわい回復かくふ

祖國そこくの政治せいち的てきな力ちからと自由じゆうとを回復かくふするに就つて、先づ行なはれなければならぬことは、大戦たいせんによるドイツの喪失地さうしちを奪還だつゑんすることである。しかしこの場合その失地しつちが持つてゐる利益りえきを計算けいさんの中なかに入れて奪還運動だつゑんどうを起おこしてはならない。失地しつちの回復かくふは壓迫あつぱくされ通とほした人民じんみんの願望がんぼうに依よつて實現じつげんされるものではない。これを遂行すいかうし得うるものは、戦争前せんそうぜんの共同國家きうどうこくかの中なかに残存ざんぜんしてゐる最も偉大ゐだいなで自由な部分ぶぶんの力ちからのみである。

要ようするに力ちからの劍けんに物ものを云いはさなければならぬ。力ちからの劍けんのみが失地しつちを共同國家きうどうこくかの中なかに取戻とどすことが出来る。願望がんぼうや抗議かうぎだけでは他物たものをも得えることは不可能ふかうである。従したがつて指導者しだうしやは先づ國民こくみんをしてこの力ちからの劍けんを鍛錬たんれんさせることに力ちからを傾かたける必要がある。そしてそのことをなす任務にんむの一部分いぶぶんとして、指導者しだうしやは同盟者どうめいしやを求めなければならなくなる。

大戦前たいせんぜんに於おけるドイツの外交政策がいこうせいさくが失敗しつぱいであつたことは、既に前まえにも言及げんきした通りである。ドイツ帝國ていこくは商業しょうぎやや植民政策しつめいせいさくに據よるよりも、先づヨーロッパ國內こくないで新しい土地とちを獲得くわくとくすることに重點じゆうてんを置く

べきであつた。商業や植民に依つて英國を敵に廻した結果はあの大戦になつてしまつたのだ。それよりも寧ろ英國と同盟して、ドイツ國力の強化を計るべきであつたのだ。或は又四五十年の文化活動を一切犠牲にする覺悟で、世界の如何なる國も齒の立たないやうな強力な軍隊を作り、新領土の獲得を目ざすか、この二つの中の何れかを採るべきであつた。

沈黙の征服者英國

今日迄のヨーロッパに於ける強力政治の足跡を検討してみると、次のやうな結論が生れて来る。先づイギリスである。イギリスは歐洲本土から離れた地の利を占めて、三百年このかた、全歐洲諸國家の勢力を平衡させ、それを維持することに依つて全歐に支離的勢力を持ち續けて來た。従つてイギリスの背後を脅かし得る何物もなかつたから、思ひさま冀足を伸ばして、殆んど全世界にその勢力を植えつけることが出來たのである。

英國史を注意して讀めば、エリザベス女皇以後のこの國が、如何に英國以外の強國の誕生を怖れ、徹底的にその防止と抑壓とを計つて來たかと云ふことが、誰にでも氣附かれる筈である。

イギリスは決して戦ひを怖れたり避けたりする國家ではない。一見弱々しい商業國の如く見えるけれども、歐洲内に英國を凌駕する程の國が生れやうとしたり、その商業貿易上に於てこの國の進展を阻害するやうな國が出て來た時には、情容赦もなく大軍を動かして、その國の息の根を止める手段をも講じ得る國家なのである。

海洋に於ける覇を競はんとしたスペインとオランダとは、敢なくもイギリスのこの方針のために抑へつけられてしまつた。間もなくフランスが次の目標となり、最後にナポレオンをワートルローに於て撃破したのである。

ドイツはまだ、この頃は國內的に統一を缺いてゐたので、英國の目標となるとところまでは到つてゐなかつた。しかし一八七〇年以後の普佛戦争があつて後は、漸くドイツの中に、將來の危険を感じるやうになつた。斯うして、英國の心中に一種の警戒が生れかけてゐた時に、計らずもドイツの指導者が、經濟による世界征服の方策を樹てたのである。この新しい方向は必然的に英國と正面衝突を捲き起す運命を持つてゐた。事實に於て英國は、此の時からして既に、如何なる事があつてもドイツを打倒しなければならぬといふことを決意したのであつた。

この目的のために英國は、ひそかに同盟國を集めにかゝつた。要するにそれは英國自身の世界制覇を強化せんがために、他國の力を利用するといふ、英國一流の狡猾な政策には違ひなかつたが、ドイツによつては容易ならぬ世界情勢だつたのである。

フランスをよりよくわ 佛蘭西強力化への恐怖

事態は遂に英國の思ふ壺に嵌つた。歐洲大戰は、ドイツの革命と共に終りを告げ、ドイツ帝國はその内部から大音響を立てゝ瓦壊してしまつた。最早英國はドイツを怖れる必要を持たなくなつた。

しかし、この四年半に亘る戦争の後に英國は刻々とその目的を達し得たと見えたが、吻と息をつく間もなく思ひがけない新勢力の擡頭に、再び利權を尖がさなければならなくなつた。ドイツが完全に破壊された——そのことは一夜の中にフランスを歐洲大陸に於ける一大勢力たらしめたのである。結局英國は四年半の惡戰苦闘から何物をも獲得出来ないと云ふやうな失敗を演じてしまつたのである。今少しこれを具體的に云ふならば、戦後に於けるフランスの勢力は、戦前に於けるドイツのそれよりも遙みに大きなものに生長した。

一九一四年頃のドイツは、どちらかと云へば多少窒息状態だつたのである。即ち東にロシア、西にフランスを加へ、北方英國と戦ふためには、ドイツの海岸線は餘りに短すぎた。然るに今日のフランスは之と全然反對である。今やこの國は、最も大きな脅威であつたドイツとの國境に、何の不安をも持たなかつたし、他の國境は弱國スペインと、南方に於ては僅にイタリアと接してゐるに過ぎない。しかもその海岸線は英本土をも、またその重要な植民地をも、常に脅かし得る長大なものを接つてゐる。何と云つても英國にとつては、このフランスの強力化は、單に邪魔なと云ふ程度のものではなく寧ろ恐怖に近いものであつた。

英國は歐洲本土をバルカンの如く弱小國に分割して、弱體化即ちバルカン化することを年來の希望とし政策として來てゐる。それと同様にフランスは、歐洲に於ける覇權を目ざして、ドイツそのものをバルカン化することに眼目を置いてゐた。要するにこの兩國の目標は、今や完全に對蹠的な立場を持つに至つたのである。

英獨同盟のチャンス

この點を我々は見逃してはならぬ。今日英國は、これ以上ドイツが崩壊することを見たくない氣持になつてゐる。といふよりも、出來得ればフランスの勢力と結抗出來るところまで、ドイツの國力が恢復することを私に希望してゐる。

このことから推論して、ドイツが今若し同盟國を求めるとしたら、イギリスを指いて他になしと斷ずるものである。

「同盟」の眞の意義を知る者にとつては、この斷言は決して唐突でも不合理でもないことを知るであらう。何故なれば、國と國とが結合するのは、共同の利益、即ち征服による勢力の相互増進といふ唯一の目的のためにのみなされなければならぬからである。

國家が同盟を結ぶのは、相手國への「愛」などいふセンチメンタルなものからではない。たゞ利益を期待することに依つてのみ結ばれる。如何なる場合に於てもドイツ人はドイツ人であるが如く、イギリス人はイギリス人であり、アメリカ人はアメリカ人なのである。

嘗て敵同志であつた國が永久に敵である必要はない。同様に昨日までの味方も今日は敵になる場合もある。ドイツは英國と戦つたけれども、英國の利益とドイツの利益とが一致し、このことのために

協力出來得るとしたら、お互ひにその目的のために同盟を結ぶことは少しも不自然ではない。

勿論斯うした同盟は、そう永くは續かないかも知れない。共同の目的が達せられれば、それで同盟は解かれるかも知れない。或はまた正反對の事情に變化することがあるかも知れない。しかし同盟の目的と意義がそこにある限り、生れて來る事情に依る變化は已むを得ないものである。何れにしても達見を有する外交家は、或る時期に於て、自らの利益のために共同の道を歩まねばならない外國の指導者を見付け出すことは比較的容易である。

そこで私は次のやうな質問を提出する。

即ち今、ドイツが假に完全に抹殺されて了ひ、之に取つて代つてフランスが強大國となるのを好まないのは、一體どの國であるか？

佛蘭西は永遠の敵

このことについて私は、こゝに一つのことを明かにしておく必要を感じる。

それは、フランスこそはドイツにとつて、永遠の敵であるといふことだ。永遠に變らざる敵國フラ

ンスー　このことは銘記しなければならぬ。

フランスの支配者が誰にならうと、如何なる主義の政府が樹立されやうと、この國がドイツに對する政策は常に一定不變である。即ち鐵と石炭に恵まれたライン・ランドを領有することゝ、ドイツを無組織の分裂状態に置いて弱體化させることに依り、自國の國境を安泰ならしめやうとすることが、如何なる場合に於ても考へられてゐるものと思はなければならぬ。

イギリスは、ドイツが歐洲の支配者となることを好まないが、フランスはドイツの存在を喜ばないのである。同じやうに見えてもその根本には千里の運庭がある。

之に對し現在のドイツは如何？　我々は世界の覇者たるを望んでゐるのではない。我々はドイツ人のドイツを建設するために闘つてゐるのである。

この眞意から云つて、我々が今日求め得る同盟國は只二つしかない。それはイギリスと、今一つイタリアを擧げることが出来る。

英獨に水をさすもの

英國との場合は既に述べた。

然らばイタリアとドイツとが、何の故に同盟を結び得る可能性があるか？

一言にしてイタリアはフランスの強大となることを喜ばないからである。由來イタリアの生命線は地中海にあり、地中海上の征服そのものがイタリアの安泰を招來する。過ぐる大戦に於て、イタリアが聯合國側へ参戦したのは、フランスや英國を強力にするためでもなければ、ドイツを倒さうとする目的でもなかつた。彼等はたゞ、オーストリアからアドリア海を取り戻したかつたに過ぎない。然るにフランスの勢力が増大すれば、當然それに従つて地中海に於けるイタリアの安全感は脅かされざるを得なくなる。この國がフランスの隆盛を喜ばない點は、一にかゝつてこの點に在るのである。

斯の如く、イギリスとイタリアとは、ドイツの存在と何等の撞着もない必要な條件を持つてゐる。彼等の利害は、可なり多くの點で我々の利害と一致してゐる。この見地から私はこの二の同盟國を擧げたのである。

しかし之は、少なくとも現在に於ては、私だけの一方的な考へに過ぎない。と云ふのは目下のドイツの國家組織を見、臆病者と吸血鬼のマルクス主義者共に壟斷せられてゐる無力なドイツを見るなれ

ば、どこの國がドイツと同盟を結ぼうなどの心を起すであらう。

我々は我々の考へを捨てるものではない。しかし我々の宣傳がその仕事を終つた瞬間に於て、始めて所論の通り同盟の締結を實行に移すことが可能となる。

この場合今一つ考へて置かばならないことがある。それは我々の正面の敵たるユダヤ人に對する心算へである。イギリス人は最早現在以上ドイツが弱體化することを望んではゐないが、ユダヤ人は別である。ユダヤ人だけは、依然として我々を打倒することを終生の目標としてゐることを忘れてはならない。

ユダヤ人はドイツ撲滅煽動者中の最大の存在である。彼等はこの目的のための、あらゆる攻撃方法の發明者だと云つてよい。戦争中に於ても既に然りであつた。彼等の金融機關とマルクス主義的諸新聞は、飽くなき策謀の手を廻して、多數の國をドイツの敵として起たしめることに成功した。

今日の彼等が計畫してゐることは、ドイツ人の感情を刺戟して、イギリスを憎むやうに仕向けることである。これは云ふまでもなくドイツと英國との同盟を妨害せんとする意圖から出發してゐるものに外ならない。このために彼等はまことしやかな顔をして「ドイツは植民地を奪還せよ」と叫んで我

我を煽てやうとする。若しもこの煽動に乗ぜられて、我々が起ち上つたとしたらどうなるか。ドイツの以前の國力と領土とを奪還するために暴力行爲が行はれ、ブルジョア階級がこれに引きずられて、本氣にこのことを要求し出したとしたらどうなるか。我が國內に居住するユダヤ人は、頃合を計つてこのドイツに起きた問題をこつそり英國内のユダヤ人に賣渡すに違ひない。そしてこれを直ちに反ドイツ的な宣傳に利用し、英獨の關係を惡化させる責め道具に使ふに違ひないのである。植民地や海上權の奪還は勿論忘れてはならないことだ。しかしそれには時機が必要である。我々は先づドイツ人のドイツを再建しなければならぬ。このことを忘れて、彼等ユダヤ人の策謀に乗ぜられたなれば、それはドイツを再建する代りに、現在より以上惨めなドイツを現出する結果となる。

多くの敵を持つな

今日の私は、失地の回復といふことは、議會主義的なお喋りや何かで出来るものではなく、飽くまでも劍と血の嚴しい闘争力によるより外ない、といふ考への下に行動してゐるのである。

しかしチロル地方(註)——獨伊國境の舊獨領、イタリアの領有する處となつてゐたが、近年獨伊同

盟によりドイツに返還された。尙ナチ黨の最初の綱領には、この地の奪還といふ項目が上げられてゐたが、獨伊接近の歩を進めた一九三〇年の改訂綱領からは、この項目は除外されてゐるを、この際戦争に依つて奪還を計るといふことは不可能であることを言明しなければならぬ。何となれば、ドイツそのものが只今ではまだ外國の支配下に惱んでゐるからだ。而して七千萬のドイツ人の心には、まだ充分なる國民的熱情が醸し出されてゐないからだ。こんな状態にあつて七千萬のドイツ人が苦しんでゐる時、南チロールに住む二十萬の同胞を獲得するために、戦争に訴へるなどとは、寧ろ犯罪に屬する誤つた行爲である。

我々はその目的の達成を急ぎすぎて、大戦前のドイツの様に、多くの敵を持つことは嚴に警戒しなければならぬ。敵は最大のものを選べばよい。最大の敵を遂に孤立に陥らしめ、それに對して破壊のための全力を傾けることが最も賢明なる方寸である。

我々は武器を欲する

想ふに、一九一九年にドイツ人の上に與へられたヴェルサイユ條約は、我慢出来ない殘酷なもので

はあつたが、それだけにあの條約は、ドイツにとつて、もつと大きく利用されて然るべきものであつた。あの條約を突きつけられた時、我國の政治家達が果然自失なす處を知らぬやうな態度を取らずに逆に之を國民に示し、この條約の不正と不義を摘發して國民に訴へたならば、全ドイツ人の憎惡は火と燃え鋼鐵と凝つて、

「我々は武器を欲する？」

といふ巨大な叫びに迄昂揚させ得たに違ひない。然るに我々の指導者は、このことに就て何一つなさなかつたのだ。否なし得なかつたのだ。

こんな状態と時期の下で、ドイツが何れかの國と同盟のことに就て考へることは不可能である。大戰に於て我々が敵として戰つた國々の人々は、まだドイツに對して憎惡を持つてゐる。弱體ドイツ、憎まれてゐるドイツが、同盟の可能性について希望を持つことが出来る時期は、ドイツ人の自己保存精神の復興が再び現はれ、眞の性質を啓示出来るやうになつた時に始めて許される。つまり我々が安定した政府を持つた時、始めて同盟を實現する時期が到來するのである。

日本とユダヤ人

如何なる場合にも我々はユダヤ人を忘れてはならない。このことを我々同様に痛感してゐるのはフアシスト。イタリアである。イタリアは我々より一足先に、その絶對的な國家權力を以て、この怪物の牙を抜き取る工作に取掛り、既に半ば以上成功せんとしてゐる。

しかしイギリスに於ては、事ユダヤ人に關する限りイタリアとは逆の現象を呈してゐる。そこではユダヤ人の根が深く蔓り、經濟界に於ても言論界に於ても、抜くべからざる支配力を持つてゐる。従つてこの國家の利益がユダヤ人の利益の方向に結びつけられてゐることは當然ではあるが、時として又兩者の利益が全然相反するやうな場合も生ずる。そのよき例は、嘗て日本と米國との間に危機が孕まれた時の英國の態度に見ることが出来る。

元來英米は同文同種の兄弟國である。従つて英國としては、如何なる場合に於ても米國の側に立つのが自然の政策である。

又一方ユダヤ人にして見れば、世界から帝國主義の民族國家を一掃してしまひ、その上へユダヤ王國

を建設するのが究極の目的であるから、日本のやうな帝國主義國家は云ふまでもなく、ユダヤの攻略の前によき目標とされてゐる。

されば日米兩國間に危機が到來し、あわや戦争の幕が切つて落されんとする氣配の見えた時には、當然英國政府も英國内のユダヤ人勢力も米國に組して、之を大いに支持すべきものと見られるのが至當である。しかるに英國政府は、種々の方法を盡して日本の手を握らうとしたのであつた。之は明かにユダヤ人の利益とは相反するものである。

然らば何故英國政府が、國內のユダヤ人の意志に反いてまで、日本に接近することを計つたか。それは云ふまでもなく、米國に依つて日本が付された時、米國が非常に強大な國家となることを怖れたからである。現在に於てすら米國は「イギリスは四海を支配する」と云ふ誇りに對して、大きな脅威を與へてゐる。それが若し現在より以上に強力化したなれば、英國は明かにその地位を奪はれなければならぬ。さればこそ骨肉に反いて、ひそかに日本と提携するの政策を選んだものであつた。

ドイツの場合をもう一度考へてみても、かの大戰に於てドイツを破壊したのは決してイギリス人ではなく、明かにユダヤ人であつた。之と同様のことが日本に就ても云ひ得るのである。

日本の潰滅を計るユダヤ人

ユダヤ人の理想は、一切の國を互壊せしめて、全世界を雜種化させ、然る上で國際的の一大國家ユダヤ王國を建設することにかゝつてゐる。だから世界の何地にせよ、確かりした獨立國家が存在する限りは、彼等の理想は阻まれるのである。

歐米に於ける彼等の民族雜種化政策は、或る程度まで成功して來たと云はねばなるまい。それは彼等の容貌が、歐米人として通用するといふ條件に恵まれてゐたからである。ところで日本と云ふやうな、東洋の特殊な人種に對しては、ユダヤ人の雜種化政策は之を施す方法を斷たれてゐる。そこでユダヤ人は、その政治、經濟、宣傳のあらゆる力を動員して、日本を倒し得る力を持つた國家に巧みに働きかけ、それらの力に依つて日本を倒させやうとしてゐる。(註——日支事變がそれであり、日ソ關係がそれであり、米國の挑戰的態度が即ちこの事を明かに物語つてゐる。)

ユダヤ人は彼等の企圖する世界獨裁を成就せしめるためには、どうしても日本を倒さなければならぬ。そのことはユダヤ人新聞が臆面もなく「日本の帝國主義と日本とを打倒しなければならぬ」と屢

屢放言してゐることだけでも明瞭である。

ナチ黨がユダヤ人を正面の敵として、彼等との闘争否、彼等の撲滅を決意した理由は實にこゝにある。我々は全世界に向つて、怖るべきユダヤの陰謀を知らしめる責任を感ずる。我々はユダヤ人とリアン民族を混同しては不可ない。英國人とユダヤ人とを混同しては不可ない。我々の敵は常にユダヤ人であることを銘記しなければ不可ない。

我が東方政策

斷じて世界的強國たれ

次に對外政策に就て考へる。

若し對外政策なるものが、或る一國が世界の他の部分に於てその國を善處して行くといふ意味のものであるならば、私はナチ黨の對外政策を次のやうに決論する。

我がナチ黨の理想とする民族國家の對外政策は、自國民族の人口と、その増加率と國土の大きさ及びその質との間に、永續的な、健全な、且つ直接的な相關關係を樹立することに依つて、自國民族の存在を保護する點にかゝつてゐると斷言する。

従つてドイツ民族は、ドイツなる民族國家の實質的部分を形成する土地に居住しない限り、健全な相關關係を持ち得ないものと考ふべきである。假に新しい領土を得たとしても、その領土が完全にドイツ國家の一部となり得ない限り、如上の健全な相關關係とは云ひ得ないのである。

この對外政策を堅持し、且つ之を強行して行くためには、即ちドイツ民族を完全に保護して行くために、何よりも先づ、ドイツが世界的な強國とならねばならぬ。弱小國では絶対に安心は得られない。

然るに今日のドイツは如何？ それは決して世界的強國ではあり得ない。世界は今や別個の大國に分割されやうとしてゐる。中には英國の如く世界の到る處にその領土を有する國家もある。僅か五十萬平方キロの面積しか持たぬ。しかもその國內にまだ幾多の不統一を有する現在のドイツを以て、強國だなどと思つたり云つたりすることは、寧ろ笑ひ草だと云はなければなるまい。

三つの貴重な戦利品

しかし過去は既に過去である。

我々ナチ黨が爲さねばならぬことは、嘗てドイツの指導者が採り來つた、對外政策や植民政策への無目的無方針に對して、敢然と戦ひを挑むことでしかない。即ち我々は今より以上に強固な團結力を以てドイツ國民を強化し、彼等を新しい領土を獲得し得る方向へ導き、ドイツをして狭小なる奴隷國

に終る危険から救ひ出さなければならぬのである。我々はドイツの大人口に對する極めて狭小な國土しか與へられてゐないといふ不均衡を何としても打破し、優秀なるドイツ民族に與へられたあらゆる義務を履行する責任を感じるものである。

ドイツ人は何れの國の民族よりも勇敢であると信じてよい。ドイツの歴史は、他民族の壓迫や侵略から、ドイツ人とその祖國を護るために、他の如何なる民族よりも多くの血を流して來たことを物語つてゐる。にも拘らず、現在のやうな悲しむべき状態が我々に與へられてゐるといふのは、明かにその血を流す目標が誤つてゐたことを示すものである。

この無駄に流された血の海から、我々は三つだけ、貴重な戦利品を拾ひ上げることが出来る。

一、主としてバヴァリア人に依つて行はれたところのオーストリア植民。

二、エルベ河以東の地の征服。

三、來るべきドイツ帝國の母體となるべきプロシヤ國の成立。

前二項は、ドイツが行つた必要な土地を獲得した中の代表的なものであり、第三項はドイツ人の血の純潔を守るための王城であつたからだ。

民族的國境への熱求

我々はドイツにとつて必要なだけの土地を欲する。しかしこれは單に大戰前のドイツの國境を恢復しやうと望むことゝは全然違つたものである。戰前のドイツ帝國の土地を得んとして、再び流血の慘を見るのは愚の骨頂である。何となれば、我々が欲する土地とは「ドイツ民族に必要な土地」であつて、政治的な國境なんかでないからだ。

假に舊ドイツの國境を回復し得たとして、一體それが何になるのであらうか。そのことのためにイギリスへの海岸線が近くなるわけでもなければ、アメリカの様な大國になれるわけのものでもない。ましてやフランスの政治的勢力を奪取することなど思ひもよるまい。

我々は、ドイツ民族の存在のために、當然與へられなければならぬだけの土地を欲する。この目標は不變である。或る種の民族主義者は、私のこの考へに對して、「ドイツ民族のために他の民族を犠牲に供することは自己撞着であり、人權の蹂躪である」と攻撃するかも知れない。しかし私はかゝる徒輩に反問する。

「如何なる國家が他に優越せる權利を以て土地を保有してゐると云ふのか。國境とは何であるか。それは人間が勝手に作つたものに過ぎぬ。従つてそれが人間に依つて變更されることに何の不自然があるか」と。

領土は天から授かつたものではない。若し或る民族が、その民族の生きて行くために、より以上の土地が必要とされたなれば、それは當然與へらるべきである。人間は人間のみでは生き得ない。人と土地とがあつて始めて民族の自立が出来るのである。しかし今日の様な時代に於ては、その必要な領土を得るためには、只劍と征服とに依るより外ないことを、充分覺悟しておかなければならないのである。

佛蘭西との總決算

この際我々はフランスとの總決算を行ふべき時代が到來してゐることを感じる。何故かなれば、我が歐洲に於て領土の擴張をすべく行動を起した時、我々の背後をフランスに依つて脅かされることは、非常に大きな支障となるからである。この總決算が如何なる形式と内容のものであるかは言明の

限りではないが、以上の目的のためには、何としてもフランスとの間に問題の起らね根本的な解決方法を講じておかなければならぬ。

更に、民族國家は他國の利害に拘泥することは禁物である。その眼は専ら我が民族のために戦ふと云ふ意識の上に向けられてゐなければならぬ。他國の利害を考へるといふやうな國際的センチメンタルからは、決してその民族の大は生れて來ない。輝かしい未來は國家のために戦ふ兵士によつてのみ招來されるのである。

既にナチ黨にとつて、ドイツ民族のために新領土を獲得すると云ふことは、單に權利であるに止まらず、既に義務となつてゐる。茲に於て我々は今日只今より從來のドイツが採り來つた對外政策を放棄する。そして我々は、ドイツ人の流出すべき方向として、眼を東方に轉すべき時に立つてゐることを知るのである。

ロシアを許さず

ドイツ民族のための新しい土地——これを歐洲本土に於て求めるとしたら、我々は當然ロシアとそ

の所屬邊境諸國を考へざるを得ない。

今日のロシアは、血腥い犯罪者によつて充たされてゐる。彼等は大戰中の悲劇的な好機に恵まれて、あの一大帝國を根こそぎ倒潰させ、幾百萬と云ふ有能な知識人を殺戮し、更にまた幾百萬の無事の民を流血の慘事へ叩き込んだ悪鬼であり、比類なき暴政者であり、地上の屑である。その上に彼等は又世界一の大鹽吐でもあるのだ。

斯かるロシアが、何れかの國と同盟を結ばうなどとの眞面目な考へを抱いてゐる筈は決してない。ましてやドイツに對して特に然りである。

ロシアのボルシェヴィズムは、ユダヤ人の世界制覇を象徴する見本のやうなものである。彼等はドイツに對して、たゞ如何にしてこの國を木葉微塵に粉碎すべきであるかといふことだけしか考へてはゐない。ドイツを叩き潰さうとする考へは、その方法こそ異なれ帝政ロシア時代も、今のソ聯も少しも變つてはゐないのである。

世界大戰前に於てすら、私はこの危險を感じて、ロシアの脅威からドイツを救ふためには、一切の行きがゝりを捨てゝも、イギリスと同盟を結んで之に當らなければ駄目といふことを考へてゐた。

私はロシアの汎スラヴ主義が、大戦前ドイツに加へた我慢ならない恫喝を忘れることは出来ない。更にまたドイツを憫まさんとして彼等が行つた嘗ての日の國境大動員を忘れない。尙更戦前にロシアの新聞がドイツに加へた惡罵と憎惡、フランスに與へた女郎のやうな媚態を忘れることは出来ないのである。

若し今日が戦前であつたなれば、或は私は凡ての感情を抑へてもロシアに接近して行つたかも知れぬ。しかし今日では情勢は全然一變してゐるのだ。ロシアのドイツに對する態度は、最早斷じて許してはならぬものなのである。

歐洲に二つの強國を許すな

ナチ黨の政治的誓約は常に次の通りである。

「歐洲の中に、決して二つの強國の存在を許してはならぬ」

ましてや、ドイツの國境に接して、ドイツ以外の強國が生れるといふことは斷じて許してはならぬ。ドイツ國家の義務は、若しもそのやうな強國が生れたならば、必要に應じては武力を以てしても

その國家を潰滅させなければならぬのである。來るべき數世紀間、ドイツ國民が充分なる土地を所有し得ることを確實に保障されない限り、ドイツ帝國は絶対に安全ではないからだ。

この地上に於ける最も尊い權利は、國民が自分に屬する土地を耕す權利にある。而して人類の最も尊い權利は、人類がその土地に對して流す血潮であらねばならない。

正當防衛の權利

悲慘なる降伏者

洞察力の鋭い勝利者は、如何なる場合にでも、その敗北者に對する要求の形を「なし崩し」の方法に求める。

一度に苛酷な要求を突きつけることは、敗者の反抗と憤懣とを買つて、再び敗者に抵抗の勇氣を喚び戻させ、一朝にして昨日の勝利者が今日の敗北者となつた實例は、歴史の隨所に見出されるからである。その反對に済し崩し的に一つ又一つと要求して行けば、敗者は一つの要求を満たしてやるといふ比較的軽い氣持になつて、容易にそれを受諾する。しかし、氣がついた時には既に勝者の望んでゐた要求がいつの間にか大方叶へられて居り、それに對して起ち上る力は、敗者の體から抜き取られて了つてゐるものなのである。

カルタゴが亡びたのもこの例であつた。一世を風靡したカルタゴも、この巧みな敵方の要求に誘は

れ遂に再起不能の衰弱體にされてしまつたのであつた。

ドイツの場合に於ても正に然りであつた。休戦となつた時、ドイツ國內にそれを振りもぎつて敵と戦ひ得る勇氣を持つた指導者がゐなかつたにも依るが、一つには聯合國側の要求が、ドイツ國民の感情を爆發させない様な、慎重な考慮の下になされたことを明瞭に見得るのである。斯くてドイツが氣づいた時には、完全に武裝解除をされた丸腰の國となつて居り、凡ての方面に於て奴隸的地位に甘んじなければならぬ弱小國となり果てゝしまつてゐたのである。

フランスは實にこの目的のためのみに戦つて來たのだ。そのことをドイツ國民はもつと早く氣づくべきであつた。氣づかなかつたがために、ドイツはフランスの思ふ壺に嵌められてしまつた。せめてもの取柄は、ドイツ軍が常にフランス領内で戦つてゐたといふ點だ。あれが若し逆にドイツ領内を戰場としてゐたなれば、ドイツは單に弱小國となるばかりでなく、疾の昔に影も形もない分散國家にされてゐたに違ひない。その意味から云へば、我々の同胞の幾百萬が流した尊い血は、決して無意義ではなかつたのである。

平和は戦争の延長

フランスのクレマンソーは「平和は戦争の延長であり繼續である」と叫んだ。彼は一刻も早くドイツ軍をその國境からドイツ領内へ追ひ返し、然る後にフランスの望む政策を講じたかつた。大戦はドイツの敗北に終つて、フランスのこの望みは着々達せられた。

之に對してドイツは、一九二二年から二三年にかけて、何等かの對抗手段を講すべきであつた。私はその時二つの方法を考へた。その一つはドイツが凡ゆる方策を講じてフランスの意圖を挫折せしめるか、さもなければ第二の手段として武力を以て之に對抗し、フランスの野望から祖國を護るといふことであつた。

私は近い將來に於て、必ずドイツが武器を取つて立つべき日のあることを確信してゐる。何故ならば、若し私がクレマンソーであり、フランスがドイツの如く高貴な國家であつたとしたら、私も必ずやクレマンソーと同様の政策を取るに相違ないからである。歐洲に於て必要な勢力を維持するためには、獨佛何れかの一方が、他のために屈せられなければならないからだ。

從つてドイツは、今後數世紀に亘つて、相變らずフランスにその地歩を譲り續けるか、さなくばフランスと最後の總決算を行ふべく、國家總力戰の態形を整へるかの、二つに一つの道しかない。我々の途は云ふまでもなく後者唯一つのみだ。而して完全に我々がフランスを清算して後、始めてドイツは他の別な方面への發展を考慮し得るのである。

今日歐洲には八千萬のドイツ人がゐる。今から一世紀の後には、この數は二億五千萬人となるであらう。而して之等のドイツ民族に與へらるべき正しい政策とは、彼等を他國の工場で奴隸的に働かせることではなくして、ドイツの勞働者及び農民として、共存共榮の實を擧げ得るところまで、彼等の生活を向上させること以外にはない。

しかし、一時はこの熱望も泡沫の如く消え去るのではないかと思はしめた。それ程ドイツ人は手酷く叩きのめされてしまつてゐた。だがフランスがルール地方を占領したことは、それがフランスの早まつた失政であつたことと共に、ドイツ國民に活を入れ、再び起ち上る勇氣を誘ひ出す絶好の機會を與へたものであつた。ドイツの平和論者たちは、それまで一にも二にもフランスの出方を拍手してゐたのであるが、この事件が起きたために、彼等が抱いてゐたフランスの自由主義禮讃に一度に幻滅を

感じさせた。ドイツは始めて國內的にも對外的にも、將來への希望を取り返したのである。

更にマルクス主義的ユダヤ人の害毒驅逐に就いては、對フランス問題同様、或はそれ以上に緊急重要な問題であつた。この祖國を破壊と死滅に導くことのみを念願としてゐる惡魔共を、破碎するために組織せられた國民的團體の行動に對しては、無制限な自由が許されて然るべきであつた。このために血腥い争闘がドイツ國內に展開されやうとも、それは已むを得ないことである。この闘争と内亂の中から、眞のドイツ人が創造されて行くのだ。人爲的にやつと保つてゐる平和が、次第に惡臭を發して來るのと比較して、何れが良く、何れが本當であるかは考へるまでもないことであつた。

しかし我々の運動には、仲々この自由が許されなかつた。ドイツのブルジョア階級は死んでゐる。彼等はマルクス主義を破壊しなければならぬと云ふ確乎たる考へを持つてはゐない。彼等はドイツが死滅するのも已むを得ない時の勢ひであると考へてゐる。要するに彼等は、葬式の行列に於て自分の地位を争つてゐる亡者に一步手前の人種に過ぎない。

ムツソリーニは偉大だ

ドイツが斯かる状態にある時、アルプスの南に於ては、既にムツソリーニが、イタリアとマルクス主義とは俱に天を蔽かずと云ふ氣概を以て、敢然と之の絶滅に邁進してゐた。率直に云つて私は、國家のために、國民の敵を撃碎せんとしつゝあるムツソリーニに、欣慕の情を禁ずることが出来なかつた。それだけにドイツ國內の現状は私に長大息と憤激を與へるばかりであつた。

ドイツがその鐵鎖の桎梏から脱せんがためには、如何なる犠牲を拂つても、マルクス主義を全滅させなければならぬ。之を爲し得て、始めてドイツは更生し、解放されるのである。彼等が我々の陣營内に巢喰つてゐる以上、我々には絶対に完全なる勝利はあり得ない。

凡ては指導者にある。強力なる指導者のみが、之をよく爲し得る。

最後に私は、一九二四年の春行はれた我々への大公判廷に於て、私が行つた演説の結語をこゝに引用しやう。

「この國の裁判官は我々を斷罪するかも知れぬ。しかし歴史は、——より大いなる真理と、より完全なる法の女神は、他日微笑してこの宣告を引裂き、我々の凡ての罪を赦すであらう」と。

附

ヒットラーの小傳

『我が闘争』は、主としてヒットラーの思想と精神との成長過程を示したものである。しかし、之を讀了することに依つて、我々は人間ヒットラーの細微をも略知することが出来る。けれども所詮「我が闘争」はヒットラーの思想史であつて、彼の今日まで經て來た人の子としての道筋を明かに知ることは不可能である。従つてそのことが「我が闘争」の時間的經過への了解を妨げる懸念もなしとしない。その不安を除くためにヒットラーの略傳も必要であらうかとの老練心から、以下系統立てゝ五十一歳までの歩みを映し出すことにする。

一八八九年四月十一日、この日アドルフ・ヒットラーは抵々の膝をあげた。ドイツとオーストリアとの國境にあるブラウナウと云ふ小さな税關町が、即ち彼の産湯を使つたところである。彼の父はこの町の税關の官吏をしてゐた。

父母ともにバヴァリア生れではあつたが、その國籍はオーストリアに屬してゐた。従つてヒットラーは、ドイツ系オーストリア人としてこの世に生れたわけである。

彼がその少年時代をランバツハで送つたことや、十三歳にして父を失ひ、十六歳にして母と死別したことや、畫家となるべき希望が美術學校の入學試験不合格で挫折し、將來建築家たるべき志望を抱いたこと、ウィーンで五ヶ年間建築場の手傳ひや、貧しいペンキ職としてドン底の生活を祇めねばならなかつたこと等は、既にヒットラー自身が本書の初めに於て語つてゐるところであるから省略して、こゝでは當時の感激し易い彼の心を刺戟したオーストリアとドイツとの間の空氣について一應の説明を加へておきたい。そのことの方が「我が闘争」の、少年時代の背景を了解するのに却つて役立つと思ふからである。

始めオーストリアのハプスブルグ王家は、ドイツ民族諸邦をその傘下に集めて、中歐に覇を囑へてゐたのであるが、十九世紀の半過ぎになると、次第にその國威に衰へを見せ始めた。そしてオーストリア國內に包含せられてゐた異民族、即ちスラヴだとかマヂヤールなどの民族が、徐々に勢力を増大し始めたのである。この時に當つ

て、ドイツ民族諸邦中最も北部にあつたプロシヤのフレデリック大王が蹶起し、一八六六年、鐵血宰相と敬はれたビスマルクに大軍を與へて一路南下、遂にドイツ諸邦の支配者であつたオーストリアと一戦を交へることになった。要するにハブスブルグ王家の羅胖から脱して、昔のプロシヤ王國を建設したいがための戦ひであつた。

老大國オーストリアはビスマルク軍との戦ひで、脆くも大敗を喫した。その勢ひを以てビスマルクはフランスをも攻略（普佛戦争）、遂にヴィルヘルム一世を援けて大ドイツ帝國の建設に成功したのである。しかしこの大ドイツ帝國の建設に當つて、オーストリアは除け者にされてしまつた。

元を洗へばオーストリアもドイツも同民族である。それが二つに分れて相睨み合ふことになつたのであるから血で血を洗ふ状態を生んでしまつた。そうなつてみると、オーストリアは既に戰敗國であり、ドイツにそのまゝの力では對抗出来ないことは明かであるから、國內に住む異民族、特にスラブ民族に頼つて、それらの民族の母國（ロシア）の庇護の下に、オーストリアの安泰を計らねばならなくなつた。親スラブ政策は斯くして生れたのである。従つてこの國の中のドイツ民族は事毎にハブスブルグ王家からの壓迫と干渉とを受ける立場に置かれた。殊に獨逸國境地方近いオーストリアのドイツ人は、具さに被壓迫民族の辛慘を嘗めさゝれたものである。

ヒットラーをして「何故我々はドイツ人でありながら普佛戦争に参加出来ないのか」との疑問を抱かせたのもまた「あゝドイツ」と、火のやうな盛がれの心を起させたのも、みな斯かる社會情勢の生みしめたものであつ

たのである。

ヒットラーの胸中に、ドイツへの憧憬と、ハプスブルグ王家への反抗とが芽生えたのは、十三四歳頃からである。その後十六歳から二十一歳までの間、ウィーンに於て送った生活中に、彼は完全にハプスブルグ王家を憎悪するやうになり、それに正比例して身を以てドイツのために盡さうといふ決意が燃え上つた。

ウィーンに於て彼の思想はあらゆる方面に成長した。

横暴なハプスブルグ王家の中央集權主義や、この大都市の中に現はれた資本主義の矛盾、ユダヤ人の憎るべき陰謀、墮落し切つた議會、オーストリア政府の反民族、反ドイツ政策。生來研究的であり物事に熱中し得た彼はこの五年の間オーストリアをすつかり解剖した。そしてこの國の中には、ヒットラーを生かし得る何物もないことを洞察したのである。時に彼はまだ僅か二十三歳の青年に過ぎなかつた。

一九一二年に彼はウィーンに見切りをつけて、憧がれのドイツミニン市へ走つた。ミニン市は七十萬の人口を擁する大都市であり、そこには渴望久しかつたあらゆるドイツの文化が充満してゐた。彼はこの町にはつきり彼の祖國を見出したのである。

彼はこゝで建築設計の仕事を見付け出して働きながら、外交、政治、經濟等の問題に對して常に鋭敏な勉強と研究とを怠らなかつた。そしてその研究の中から、ドイツがオーストリアと同盟を結んでゐることは、百害あつ

て一利もないこと、この同盟はオーストリアの瓦礫にドイツが卷添へを食ふ危険が多分にあることを發見して、ドイツのために眞剣に獨逸同盟の破壞を希望した。又オーストリアとバルカンとの間に醸されつゝある政治的不安が、近く大暴動を豫想させるに充分のものがあつたことも見抜いてゐた。

果して彼がミュンヘンへ移つてから三年目の一九一四年七月二十八日、遂にオーストリアとセルビアとの間に戦争が起り、それが瞬く間に歐洲全土に擴がる大戦争となつてしまつたのである。

ドイツがロシアへ宣戰を布告したのは、それから五日目の八月一日であつた。ヒットラーは時を移さず國王に従軍志願書を出して、バイエルン豫備歩兵第十六聯隊に入隊を許された。

その後の彼の戰線に於けることや、二回に亘る負傷（第一回は足に砲彈の破片を受け、二回目は毒瓦斯のため眼をやられた）のこと、及びその前後の國內と戰線のこととは、彼自身が「我が國争」の中で相當詳しく語つてゐるから、重ねてこゝで述べる要もあるまい。

ドイツ瓦礫の導火線となつたものは、一九一八年十一月九日、共產主義者の煽動に乘せられたキール軍港の水兵約五百名が赤旗を翻へして政府反對、戦争反對を叫びつゝ、トラツクの縱列を作つてベルリンへ乗り込んだことから始まる。この反戰運動は燎原の火のやうな勢ひで瞬く間に全ドイツ國內に燃え擴がり、時の政府も最早如何ともなす術を失つてしまつた。その結果はアメリカからの降伏勸告となり、カイゼルの退位、ヒンデンブルグ

將軍の亡命、續いて社會民主黨のエーベルトやシヤイデマン等のドイツ共和國誕生、戦争の即時停止といふ大軍命が起きたのである。

このことを目撃して、身自ら第一戦で死生の間を彷徨し、幾多の忠勇なる戦友の墜れるのを見て來たヒットラーが、如何に憤激し、哭き、悲しんだかといふことは、彼自らが血涙を以て物語つてゐる。

ヒットラーが偉大なる建築家にならうといふ希望を捨て、政治に依つて祖國を救はふと決心したのは、この時からである。

その後のドイツは全く蜂の集をつゝいたやうな騒ぎに陥つてしまつた。

元々この革命を煽動したのは共產主義者のスバルタカス團首領リーブクネヒトであつたが、政府を乗つ取つたのは社會民主黨のエーベルト一派であつた。うま／＼と裏を掻かれた共產黨がこれを見て黙つてゐる筈はない。彼等はその親分であるソ聯の援けをかりて積極的な攻勢を取り、國內至る處で悪質の騷擾を起した。之に對して共產黨撲滅の旗を押し立てた海兵旅團や、ドイツ愛國青年將校團などが驟起して、隨所に小戦闘を演じるといふ騒ぎであつた。

ミュンヘンに於ても同様であつた。ミュンヘンの在る地方はバイエルン王國であつたが、それが倒れてレーテ共和國と云ふソヴィエト國家になつた。こゝでは共產主義の活躍が實に猛威を逞しうしてゐた。それだけに右

翼即ち愛國主義者の反抗心も相當熾烈なものがあつたのである。

ヒットラーは戦線から歸つて後、伍長勤務としてこの土地の兵營に起居してゐる中、新聞記者上りのヘラーが結成したドイツ労働黨に加盟した。

この間にバイエルンのソヴィエト政府が中央政府から脱され、遂に中央政府の討伐軍の爲に亡ばされて、フオン・カールの社會民主黨政府が樹立されるといふ事件が起り、引續いてヴェルサイユ條約の締結に依つて、聯合國に對するドイツ人の呪咀、無能なる共和黨政府への反抗等の風潮が助成されるやうになつて來た。

黨員僅か七人のドイツ労働黨は、この機運に乗じて、次第にその勢力を加へて來た。この黨の中でヒットラーが受持つた役は「宣傳委員長」だつたのである。ドイツ労働黨の初期に於ける忍酷と苦闘とは、本文に於て矢張りヒットラー自身が具に述べてゐる通り、我々の想像以上のものがあつた。それだけに、ヒットラーとしては全身全霊を打込んで闘つた。自然その闘争はハラ／＼させるやうなものがあつた。その結果比較的穩健派の首領ヘラーと事毎に合はなくなつて、遂にヘラーの引退となり、黨の獨裁權は自らヒットラーの手中に歸すこととなつたのである。

彼は事實上の支配者となると間もなく黨の名稱を變へた。「國民社會主義ドイツ労働黨」即ちナチ黨といふ看板に塗り代へたのである。そして愈々共產主義とユダヤ人に積極的な闘争を拵み、中央政府猛攻の手をゆるめな

つた。

「嵐の分限」として怖れられたナチ突撃隊が生れたのはこれから間もなくのことである。そしてナチ黨は、この突撃隊のために益々強くなると共に、民衆の絶大な人氣を獲得することにも出来たのであつた。

一九二二年頃になると、國粹諸團體の中でナチスは最大最有力の團體にまで生長した。そしてその勢ひは日増しに全ドイツへ擴がらんとする様子が見え、それにつれて他の右翼團體も益々活氣づいて來たので、ベルリンの中央政府は「共和政治安維持法」を作り、之に依つて右翼團體を抑壓しやうと企てた。やゝ壓迫され氣味だつた共產主義者達は、この治安維持法の發布を見て俄然勢力を盛り返しそふになつたので、之に憤慨した國民主義諸團體は、全國に機を飛ばし、ミュンヘンの王宮廣場前で大示威運動をやつてのけた。何故ミュンヘンが選ばれたかと云ふに、勿論そこにはナチス黨本部があつたにも依るが、今一つはフオン・カールが國民主義者であり、中央政府の指令にお構ひなく、之等の右翼團體を陰に陽に庇護してゐたことも大いに預かつて力があつた。

ミュンヘン王宮廣場の大示威運動、次に行はれたコーブルグの大會合（本文参照）は、共に大成功裡に終つてナチ黨とヒットラーの聲名は愈々廣く喧傳されるに至つたのである。

一九二三年一月十一日、フランスはドイツがヴェルサイユ條約に定められた義務を履行しないこいふことを口實にして、ドイツのルール地方に五ヶ師團の軍隊を進め、之を不法に占領して了つた。之には全ドイツを擧げて

憤激した。殊にヒットラーの憤激は大きかつた。機會ある毎に中央政府の無能を痛烈に攻撃し續けて來た彼は、最早單なる攻撃では濟まされなかつた。よろしく實力を以て中央政府を仆し、その勢ひを以てルール地方を奪還しなければならぬと思ひ立つた。

そのためには六千の突撃隊だけの力では不充分であつた。そこで彼は國民主義者であるフオン・カール總監を動かして、エーベルト政府の軍隊と合流し、ベルリン進撃をしなければならぬと計畫した。この計畫はうまく行つた。カールは賛成し、その上前ドイツ參謀總長ルーデンドルフ將軍も、一軍の指揮者たることを快諾した。後は只進軍の機會を待つばかりの手順となつた。

ところがカールは承諾を與へたのみで容易にその兵を動かさうとはしない。何故かといふに、彼が中央政府を憎惡し、之から獨立しやうといふ氣持を抱いてゐることは事實であつたが、それは單にエーベルト政府の獨立のみの事とであつて、ヒットラーの全ドイツ民族合流と云ふ考へとは根本的に食ひ違つてゐた。だから彼は中央政府に反對を宣言し、中央軍のエーベルト進攻を迎へて之と一戦を交へるのなれば否やはなかつたが、こちらから進んで中央政府を攻撃することには不同意だつたのである。

このことを見抜いたヒットラーは、ルーデンドルフ將軍と謀し合はせ、ミュンヘンのビエルガアプロイの酒場で國民大會が開かれ、そこでカールが演説するを機會に、カールを捕へて強制的にでも彼等の意に従はせやうと

計畫した。

一九二三年十一月八日の夜である。ビエルガープロイの裏表に武装した突撃隊のトラツクが停り、その中からヒットラーとルーデンドルフ將軍の姿が現はれた。そして二人は、會場に入るや否や演壇に馳け上つて、今し政見發表中のフォン・カールの横に立つや、一發のピストルを天井に向けて發射して、ざわめき立つ數千の聴衆に叫んだのである。

「諸君、たゞ今民主主義の革命が勃發した。バイエルン國防軍と警察とは、今から凡てハーケンクロイツの旗の下に立つてゐる！」

斯うして、色を失つてそこに立ちつくしてゐるカールを別室へ引張り込むと、ピストルを煮しつゝ彼の決心を促したのである。之ではカールと雖も反對の仕様がなかつた。話は立ち所に決まつた。ヒットラーはルーデンドルフ將軍にカールの監視を任せて、自分は諸般の準備のために本部へ歸つたのである。

ところが、カールは僅かの隙をうかゞつて巧みにそこから逃れ、直ちに放送局へ馳けつけるや否や、ラヂオを通じて全國に向ひ「ヒットラーは暴徒を引連れて大舉ベルリンを衝かんとしてゐる。自分は今彼のピストルに依つて心にもないことを云つたが、あれは全然嘘である。私はエーベルトの總監としてこゝに彼等暴徒の鎖鎖を宣言すると共に、ナチス及び之に従ふ團體の一切の行動を禁じ、合せてナチ黨の解散を命ずるものである」と云ふ

放送をやつた。

その夜から翌日にかけて、裏切られたナチ黨と、裏切つたエーベルト政府の軍隊及び警官との間に猛烈な市街戦が演ぜられたが、時利あらず、遂にヒットラーは單身國境を越へてオーストリアへ亡命を餘儀なくされた。そして、今一步でオーストリア領へ入ると云ふところで、不運にもドイツ憲兵のために捕縛されたのであつた。時に十一月十一日である。

ヒットラーはこのために「五ヶ年の禁錮、但し服役六ヶ月にして假出獄を許す」と云ふ判決を受けた。そしてランツベルグ城の監獄で、靜かに六ヶ月を送りながら、ナチ黨の再建を考へたり、「我が闘争」の前半を書き綴つたりしたのだ。

一九二四年十二月二十五日、ミュンヘンの街がクリスマスの賑はひで華やかな雰囲気を感じ出している日、ヒットラーは遂に出獄した。

出獄後ヒットラーが第一回の演説會を開いたのは、思ひ出も深いホーフブロイの酒場であつた。二、三千人しか収容出来ないその會場からは、約一萬人もの聴衆がハミ出してゐた。依然としてヒットラーの人氣は素晴らしいものであり、ナチ黨の健在が明かに立證される盛況であつた。慌てたバイエルン政府はヒットラーに撤口令を施した。これにならつて、全ドイツの各州が同様ヒットラーに撤口令を與へた。しかしこのことは却つてヒット

ラーの偉大さを裏書きし、彼の名聲を高めてやることにしか役立たなかつた。

撤口令が解かれてから、第一回の黨大會はワイマールで行はれたが、この時には約一萬人のナチ黨員が集まつた。次に一九二六年七月、ニュールンベルグで開かれた第二回黨大會には、實に十數萬人の黨員が、雲霞の如く集まつたのであつた。

しかしベルリンだけはナチ黨にとつてまだ一指も染められない魔女地であつた。流石のヒットラーもベルリン攻略には久しく手を憚いた。中央政府のお膝元であり、共產主義者の牙城があるから、生たかな力を以てしては容易に浸蝕を許しさうにもなかつた。とは云へベルリンは如何にしても攻略せねばならぬ心臓部であつた。

愈々ナチ黨の地盤が確立したと見らや、ヒットラーは黨内で最も宣傳上手なグレーゴル・シュトラッサアをベルリンに潜り込ませて、ナチ黨の宣傳に着手させた。だがシュトラッサアは失敗してしまつた。そこで今度はグツベルスを送つたのである。倭軀の上に饜腹で、一向風采のあがらないグツベルスではあるが、人心を、特に都會人の心を捉へることに天才的な才能と手腕とを持つてゐた。そして彼がベルリンへ乗り込んで百日とはたかない一九二七年二月十一日には、既に第一回のベルリン支部の黨大會が開かれ、即興の突撃隊が「突撃隊の歌」を高唱しながら、ベルリンの大通りを行進すると云ふところまで潜ぎつけた。斯くてナチスの勢力は、遂にドイツの心臓部にまで及ぶことになつたのである。

ヒットラーは議會主義を排撃してゐた。然しナチ黨が大きくなるに従つて、國會の議員の中から加入して來る者も出來て來て、こゝに一つの問題が起きた。議會を認めないナチスの中に、國會へ出席する議員があると云ふことは從來の主義に反する。そこで幹部とヒットラーの間にこのことに就て種々研究が積まれた結果、「ナチ黨は飽までも議會を否定する。故に議會を叩き潰さなければならぬ。そのためには、議會に黨員を入れて合法的に之を破壊する方向を採らなければならない」といふ宣言を發した。國家に對する非法運動が極めて成功率の少いことを見抜いて、こゝにナチスが合法化へ轉身したことは、ヒットラーの遠見と云はなければならぬ。

一九二八年に行はれた總選舉に、ナチ黨は候補者を立て、始めて選挙運動をやつた。その結果はゲッベルス以下十一人の代議士を國會に送ることが出來た。

之を機會として當時クルツブ鐵工場やウーファ映畫社を持ち、ドイツ國內に特殊の地位を有してゐた國權黨の總裁フリーデンベルグとヒットラーとの握手が成つた。之はナチ黨のために、新しい勢力を加へることになつたのである。このためにヒットラーの股肱と見られてゐたシュトラッサーは、ヒットラーが資本家と握手して、ナチスを資本主義化せしむるものと云つてヒットラーを攻撃したために、その弟と共に追出されると云ふやうな事件もあつた。

一九三〇年に再び總選舉があつた。この選挙からナチスの選挙運動は本腰となつた。何でも構はず國會の中の

絕對多數黨となり、第一黨となれば、總でも總でもナチ黨の理想を實現出來ると見たからである。従つて選舉運動は極めて猛烈であつた。その結果、ナチ黨からは第一回の十二名の代議士に引かへ、今度は一躍百七名の代議士を國會へ送ることになつたのである。このことは明かにナチ黨の飛躍を物語つてゐる。しかし議席五百七十六に對して百七名の代議士では、絕對多數どころか、第一黨にもまだ相當の距離があつた。この時の第一黨は矢張り政府黨たる社會民主黨であり、その數は百四十三名に達してゐた。

時の大統領はヒンデンブルグであり、總理大臣は中央黨のブリューニングであつた。ブリューニングはヤング案即ち米國の提出した大戰の賠償金を支拂ふ案に賛成して、可なりの無理をしながらも之を實行して行くことがドイツの安泰を圖る結果であることを信じてゐた。しかしヒットラーもその盟友フーゲンベルグも之に大反對であつた。それはまるでドイツを米國に賣るものだとの見解を抱いてゐた。従つてブ首相とヒットラーの間は、事毎に面白く行かなかつた。

斯かる情勢の中に、ヒンデンブルグの大統領任期が終り、一九三二年には大統領の選舉が行はれることになつた。

大統領の選舉は原則としては國民投票に訴へるのであるが、議會が一致して大統領を推薦するなれば、國民投票に依らなくともよいことになつてゐた。ブリューニングはヒンデンブルグを推薦するつもりでゐた。しかしそ

れには議會の一致が要る。そのため彼はヒットラーを招いて、ナチ黨の賛成を求めたのである。ヒットラーはそれのことを申込まれると、

「ヒ元帥が大統領に再選されることは私も賛成です。しかしあなたの意見に賛成するためには、あなたが首相の席を退いてくれなければ駄目です」

と答へたものである。勿論ブリーニングがこの申出を素直に受けやう筈がない。そのため議會の推薦はお流れとなり、國民投票に依ることになった。

ヒットラーはその當時まだ大統領になるには少し早いと思つて居り、また當選するとも思はなかつたが、一つにはナチ黨の存在を益々明かにするためと、今一つはブリーニングへの反抗から大統領選挙に立候補した。この時の候補者はヒンデンブルグ、ヒットラー、國權黨のデヌスターベルグ、共產黨のテールマン、それからウィンターの五名であつた。

ドイツ全土を溯かせた選挙は終つて、三月十三日開票の結果はヒンデンブルグが千八百六十餘萬票、ヒットラーが千百三十餘萬票、その他は五百萬票以下といふ、大體豫想通りの得票數が國民に示された。しかし之ではヒンデンブルグが大統領に再選するわけには行かない。時のワイマール憲法は、全投票數の半分以上を一人で得ない限り當選とは認めなかつたからである。そこで今度はテールマンを除く他の候補者は退却し、ヒ元帥とヒット

ラーの一騎打を以て選挙のやり直しをすることになった。この選挙ではナチスの反動黨からあらゆる妨害が加へられたが、よくその間隙を縫ふて奮戦し、豫想通りヒトラーの再任となつたとは云へ、ヒトラーは前回の得票よりも約二百萬票餘の投票増加數を勝ち得たのであつた。

一九三二年ブリュニング内閣は辭職してその後へはフオン・パーベン内閣が出来た。パーベンは比較的強力な背景を持たなかつたので、ヒトラーの援助を求めて來た。そこで、ヒトラーは國會を直ちに解散すること、突撃隊その他に加へられてゐる種々の禁止條項を解除することを交換條件として、パーベンの援助を承諾した。

この年の六月議會は解散となり、七月にはナチ黨にとつて第三回目の總選挙があつて來た。パーベンの選挙運動はヒトラーとの默契もあつて不干渉主義を採用したから、まるで戦争の様な騒ぎであつた。

開票の結果、ナチ黨は遂に宿敵社會民主黨を葬つて第一黨となつた。社民黨が百三十三名の議員と七百九十五萬の票を得たのに對して、ナチスは當選實に二百三十八人、得票千三百七十萬と云ふ壓倒的かつ記録的な大差を以て凱歌を奏したのであつた。しかしヒトラーも黨の幹部も之を餘り喜ばなかつた。と云ふのは、彼等の目標が「絶對多數」の獲得にあつたからである。

パーベン首相はヒトラーに副總理の椅子を與へるから入閣して貰ひたいと交渉した。しかしヒトラーともあるべきものが、何を以てパーベンの下に座ることを承諾するであらう。彼は「全權を與へぬ限り御免だ」と

云つて、大統領からの意趣があつても頑として應じなかつた。

パーベンは何もなく擯冠した。シュライヘル將軍に組閣の命令が下つた。しかし之も一九三三年一月でその命數が盡きた。茲に到つてヒンデンブルグ大統領は、ヒットラーの起用を決意するに至つたのである。

一九三三年一月三十日、この日こそ一介の勞働者から身を起したアドルフ・ヒットラーが、遂に總理大臣の印綬を帯びるに至つた最も記念さるべき日である。ドイツ全土に亘つて、

「ハイル、ヒットラー！」

の歡聲が津浪の如く湧き上つた。

當然この時の總理はナチ黨の絕對多數の理想を實現させた。時にヒットラーは僅かに四十四歳の血氣盛りであつた。

この年の三月二十一日、總理ヒットラーの前に第一回の國會が開かれた。彼はこの日壇上に於て、二十數年來叫び續けて來た新ドイツ再建の抱負を餘す處なく全國民に獅子吼した。そしてその次に、歴史的に有名な賠償金支拂義務の放棄、國際間の差別撤退、マルクス主義の全滅、中央集權等の爆彈的宣言を發表した。それから更に彼は嚴然たる態度を以て議會即ち國民に次のことを要求したのである。

「爾今國家の一大事を一大決心を以て斷行するに當つて、一々國會に相談したり、大統領や參議員に諮つてなす

「ことは私の主義と反する。依つて今後一切の權利を私に任されたい」

といふのであつた。ヒットラーを總理大臣とする限りは、ヒットラーの獨裁を認めよといふのである。之は今迄のワイマール憲法を放棄する重大な問題であつた。しかし既にヒットラーに壓倒されてしまつた國會は、九十四票對四百四十一票の大差を以て、彼の申し出を可決して了つた。斯くて名實共にヒットラーの獨裁政治が展開され、全ドイツはナチの總領に従つて一大民族國家たるスタートを切つたのであつた。以下その政策の主なるものを摘録して大要を説ふことにしやう。

世界の耳目を驚かせたのは、ヒットラーのユダヤ人國外追放である。何故彼が斯かる一見非人道的に見える政策を執つたかは、本文の隨所に現はれてゐるから説明を省くが、このためドイツ民族の血の純潔は、今日より以上汚される憂ひはなくなつたわけである。

次に一國一黨主義の採用をあげなければならぬ。多數の政黨に依る會議は獨裁權の喪失を意味し、そのことは同時にドイツ民族の純潔力を弱めるといふ見解から、彼は一國一黨即ちナチスを以て唯一の政黨たるべきものとなしてゐる。

更に彼は「結婚獎勵法」を發布して、ドイツ民族の増殖を圖ることに非常に意を用ひてゐる。それには健康が第一であるとなして、規律ある生活と、眞摯なスポーツを積極的にすすめてゐる。

失業者の救済にも非常に力を入れた。一九三三年頃のドイツの失業者は六百萬と註され、世界第一と云はれてゐたが、種々の方法を講じて、之が解決問題に關心し、その成果は驚くべき程のものがあつた。

斯様にして徐々に國內騷擾を整へる一方、一九三三年十月十四日に至り、彼は敢然として國際聯盟脱退を斷行したのであつた。最早ヴェルサイユ條約もヒットラーにとつては一片の紙切れに過ぎぬ。彼は諸外國の思惑などにはお構ひなく、之を契機として、どん／＼軍備の擴充に力を注いで行つた。

ところで茲に許らずも「突撃隊騒動」が起つた。それは再軍備に當つて五十萬の突撃隊を、從來の國軍へ合併させやうとするヒットラーの考へに反對意見を持つロエームが企てたことであつた。ロエームは突撃隊の參謀總長であつた。彼は僅か十萬の軍隊へ、ドイツの今日をあらしめた突撃隊が合併されるといふことに反對を抱いた。國軍こそよろしく突撃隊へ合併すべしといふのである。その結果國軍の反感を買ひ、兩者の調停に流石のヒットラーも大いに悩まされたのであつた。然るにロエームが斯様な強硬な意見を吐いてヒットラーに屈しないのは、單なる反對ではなく、ヒットラーを窮地に追ひ込んでおいて、あはよくば彼を倒し、その後釜として自分がナチ黨の天下を乗つ取らうと云ふ陰謀かも知出でしてゐることが分つたので、ヒットラーを心の底から怒らせてしまつた。その結果ヒットラーの抜き打ち的ミュンヘン襲撃となり、ロエーム一派七十名は、瞬く間に捕へられて銃殺に附された。この陰謀が露がれなかつたなれば、今日果してヒットラーが健在であり得たかどうか分りかねる大事

件だつたと云へる。

一九三四年八月二日、ヒンデンブルグ大統領が死んだ。その後を襲つて大統領となるべき者は、勿論ヒットラーを指して他にはなかつたが、彼は敢て大統領の椅子には上らず、國民の「指導者」として自らを呼び、大統領と總理とを兼任するやうな地位を取つた。ワイマール憲法の置土産たる「大統領」の名稱なんか眞平御免だ云ふわけである。この日からヒットラーを總統と呼ぶことになつたのである。

一九三五年一月には、フランスの手からザール地方を取り返した。この年の軍備充實には目覺しいものがあり、一ヶ年に六十萬の軍隊と、一千臺の飛行機とを持つやうになつた。工業界も俄然活氣を呈し、海軍力も急激に充實し始めた。

ヒットラーは依然としてソ聯を憎んでゐたが、この國を牽制するには日本と提携するより外ないと云ふことを見抜いて、一九三六年十一月に日獨防共協定を結んだ。イタリヤがこれに加はつたのはその翌年のことである。かくてヒットラーとムツソリーニとは、日本にとつて海の彼方の人々ではなく、壁一重の隣人となつたのであつた。

電撃的なヒットラーの政策は、次から次へと展開された。近年に起つたドイツ民族國家建設への諸問題は、既に一般の熟知するところであるが、尚一つの記録として次に摘記しておく必要があらう。

○オーストリア併合問題

ヒットラーの故郷であるオーストリアには、多數のドイツ民族が住んでゐる。のみならず彼自身がドイツの總統である關係上、オーストリアを一個の獨立國として置くことは不都合なこともある。そこで當時既にこの國の中にも結成されてゐたナチ黨支部に指令を發し、ドイツ合併の運動を起させた。之を知つたドルフス首相はイタリアと結んでナチ運動の妨害を行つたため、遂にナチ黨員に依つて暗殺されてしまつた。親伊派のドルフスを殺されたイタリアは怒つて、飽までドイツがオーストリアを併合する積りなれば、敢て一戦を斷ずるものではないといふ強硬な態度に出て來た。まだ國內の軍備が充分に整つてゐなかつたドイツは、今イタリアと戦ふことは極めて不利であることを知つて、一先づ手を引いたかに見えた。その間にヒットラーとムッソリーニとの會見があり、何等かの了解がなされたやうである。ドルフスの後を受けて立つたシュシュニツク首相は、ナチ黨の勢力を驅逐するには、國民投票の形式をとつて政府が國民を引ずり込み、國民全勝の態を以てドイツ合併反對を表現するのが賢明の策なりとしてこのことを發表した。勿論ナチ黨はこの國民投票には反對である。ヒットラーは直ちにこの投票を延期すること、シュシュニツクは辭職して親獨派のインカーに首相の椅子を與へることを要求した。シュシュニツクはこの申出を一蹴した。彼には私かにイタリアの援助が期待されてゐたからだ。申出を拒否されたヒットラーは突撃隊に命じて直ちに國境を越え、オーストリア内へ進軍せしめた。これを見て急をイタリ

アに頼じ救援を求めたが、兩巨頭會議で話し合のついてゐるムツソリーニは、今度は全然相手になつてくれない。致し方なしにシエシニツクはイタリヤへ逃込み、ブログラム通りにインカートが内閣を組織した。斯ふ云ふ過程を経て一九三八年三月、遂にオーストリアはドイツに合併されることになつたのである。

○ズデーテン奪還

ズデーテンとはチェツコの一地方であり、大戦前はドイツ領であつた。失地回復とドイツ民族救済のために、オーストリアを併合するや間もなくヒトラーは、この地にも突撃隊を派遣して返上を迫つた。イギリスはドイツがそう大きく強くなつて呉れては困るので、何等かの手を打とうとして「止め役」に立つたが、ドイツは何がどうあらうと強還するといふ強腰であり、之に對抗して戦ふには英佛とも自信がない。仕方なく長い物には巻かれると、あべこべにチェツコをなだめて、ズデーテン地方をヒットラーに獻上させた。これが一九三八年十月一日のことだ。

○チェツコの併合

この問題に端を擧げて、チェツコとスロバキヤ紛争が生じた。スロバキヤはチェツコの一部分ではあるが、チェツコとは全然人種が違ふ。そこでこの機會に獨立を計らふとしてドイツに援助を乞ふた。ヒットラーはスロバキヤを助けることはチェツコを弱らせる結果になると見て之を承諾した。そのためスロバキヤはチェツコに對し

て獨立を宣言した。斯うなつては最早チエツコもバラ／＼である。ドイツとスロバキアに挟まれては、今後到底安んじて生きてゆけぬ。それよりは寧ろ大木の影に立寄るに如くと観念して、一九三九年遂にドイツへの合併を申し入れたのであつた。

○メーメル地方の奪回

メーメル地方とはリトアニアの東部地方で、矢張り獨逸に屬する。勿論多數のドイツ人が居住してゐたが、引續いての失地恢復にリトアニアは情氣ついてしまひ、ドイツからいぢめつけられない中に返上して了ふ方が後生安樂と諦めて、三月二十一日我からこの地方の返上を申出た。

○ダンチビ・回廊問題

こゝまで順調に行つたが、ダンチビ自由市及びポーランド廻廊地方をも奪還せんと企てたヒットラーは、遂に英佛の謝忍の緒を切らせてしまつた。この地方をドイツに取られると、ポーランドは唯一の海への出口を塞がれて窒息状態に陥る。そこでポーランドはイギリスとフランスへSOSを發して援助を求めた。英佛ともポーランドを救ふと共に、飽なきヒットラーの失地恢復運動をこの邊で食ひ止めなければ果てしがないと感じた。交渉は幾度も重ねられたが仲々結着がつかない。その間にヒットラーは手際よくソ聯と不可侵條約を結んで、若しポーランドと戦ふことになつても、ソ聯からの干涉と攻撃からは免れ得るやうに芝居を打つた。兎角する中に、國

境に待機してゐた兩國の兵が越境したとかせぬとかの悶着となり、それがきつかけで遂にドイツ軍が雪崩を打つてポーランドへ侵入、僅かに半ヶ月の戦ひで完膚なくこの國を叩き潰した。電撃戦の序幕を見せたのである。

○第二次歐洲大戰勃發す

一九三九年九月三日午前十一時十五分(日本時間昭和十四年九月三日午後七時十五分)、面目を丸潰しにされた英・佛は同盟を結んでドイツに宣戦を布告した。斯くて驚天動地の第二次世界大戰は勃發してしまつたのだ。その後の経過は今茲に書くまでもない。

ハーケンクロイツのナチ旗は、ジスマークを被ひ、ノルツエーを屈し、戦じてオランダ、ベルギーを一瞬にして降参し、遂にフランスをも只一躍みに降参しつゝパリ―城頭高く懸へつてゐる。時を移さずイタリヤは共同戦線を張つた。世紀の二巨人ヒットラーとムッソリーニとは、今やドーブア海峡の彼方に運命の戦ひを控へて、默然として浮ぶ大ブリテン國を睥睨しながら、古今未曾有の大敵前上陸の機會を靜かに窺つてゐるのだ。

「ハイル・ヒットラー！」

の叫びが果して幾世紀かの叫びとなるか否かは、怖らく茲斷言にして、神の審判臺に載せられることとなるであらう。

昭和十五年九月五日 印刷
昭和十五年九月十日 發行
昭和十六年二月十一日 五版發行

不許

編者 水野宏一

ヒツト
ラーの我が闘争奥付

〔定價金壹圓〕

複製

發行者 橋口景二

東京市神田區鎌倉町十一番地

印刷者 阿部喜太郎

東京市本郷區元町一丁目一番地

發賣所
研文書院

電話小石川(四)二四三七番
振替東京五九五七五番



